伊能忠敬研究

史料と伊能図

二〇二一年 第九十三号

伊能忠敬研究会

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.93 2021

史料と伊能図「伊能忠敬研究」

二〇二一年 第九十三号

伊能忠敬研究会

表紙解説

アメリカ議会図書館蔵 伊能大図151号部分（備中松山城周辺）

表紙図は「天空の城」として知られる国指定重要文化財**備中松山城周辺**（高梁市、総社市、岡山市）を切り出したものである。因みに、羽柴秀吉による水攻めで知られる備中高松城も含まれる。（右下）測量は第7次測量（九州一次）の帰路に行われた。本隊と支隊、後手と先手に分かれて、効率よく測量されたようである。

表紙のエリアは概ね海抜500m以下の大地を切り裂くように**高梁川**をはじめとする河川が流れ、川に沿って道があり集落があり測線が描かれている。

伊能隊がこの地を訪れたのは文化八（1811）年閏二月である。伊能測量隊は三好より手分けし、本隊・支隊に分かれ二方向からこの地を訪れた。

支隊（坂部他）は閏2月14日**地頭村**に着いた。（左下）その後、16日**松山城下**、18日**中津井村**、19日**砦部村**を経て20日**小坂部村**に着いた。21日、**本隊と合流**、手分け測量をして新見町に着いた。

本隊（忠敬他）は19日**新見村**着き泊。20日**上熊谷村**に泊。21日**田治部村**、**小坂部村**まで測量。**支隊と合測**、**新見町**へ引き返し泊。22日**先手**（忠敬他）は新見出立、止宿より**石蟹村**他、難所舟測、**井倉村**まで測る。そこより乗船、八ツ半**松山城下**板倉允之進居城**本町着く**。長谷村小休へ松山代官柳井与治郎右衛門出る。止宿平松与七郎。本町年寄宗兵衛、鍛治町年寄三郎兵衛、同所代官内海宗衛門出る。

後手（坂部他）は**井倉村より仏谷**、**杉平**、**竜王峠**、**高谷**まで測る。止宿藤井鎮右衛門。23日小雨、川面村、今津村枝地久印へ繋ぐ。川舟にて松山城下へ九つ後着く。止宿同前。忠敬ら再宿。24日朝微雨、同所逗留、松山領割元池上直左衛門、下町年寄定十郎出る。同割元庄屋中島益治も出る。此の夜宵大曇、5ツ後少し晴れ測量。江戸状(注)を出す。25日松山東村より広瀬川を渡り美袋、宍粟村まで測る。26日宍粟村枝見延、槙谷村界郷岳測る。引き返し湛渡口郷滝追分より井尻野村枝湛まで測る。他に井山宝福寺まで測る。27日門前村を経て板倉村まで測る。他に門前村より上足守町まで測る。

宮内　敏

(注) 江戸状には伊能七左衛門宛伊能忠敬書状が含まれている。この件、本誌「伊能忠敬研究」2006年　第45号 24ページを参照されたい。

（表紙題字は伊能忠敬の筆跡）

地理院地図に伊能図測線（赤線）他を加筆

目次　93号

表紙解説
アメリカ議会図書館蔵
伊能大図151号部分（備中松山城周辺）　宮内　敏

研究と話題
●伊能忠敬一行の淡路島測量
—岩屋浦～仮屋浦—　廣田　晋也　1
●伊能忠敬の未公開書簡（三）　前田　幸子　9
●江戸府内第一次測量の記録（三）　玉造　功　17
●伊能忠敬　周辺の人⑨
渡辺啓次郎慎　尾形慶助　前田　幸子　30

資料
●「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」
連載第二十七回　渡辺　一郎・井上　辰男　36

忠敬談話室
●祖母のこと　伊能　洋　56
●伊能忠敬と私
大河ドラマ〝一押しシーン〟に！　戸村　茂昭　61
●白山を測った「地平経儀」　河崎　倫代　64

ニュース・会員便り・新入会員紹介・お知らせ
石川県支部ニュース
海みらい図書館イベント開催報告　河崎　倫代　66
会員便り
「伊能忠敬　笹山領探索の会　新聞　第9号」発行　資料提供　加賀尾宏一　68
第二次測量隊が宮古町鍬ヶ崎浦で止宿した
「和泉屋民右衛門跡地」の特定　須賀原修二　69
企画展『海図の発展とEEZ』
「海の伊能忠敬」柳楢悦と伊能図　前田　幸子　70
新入会員自己紹介　岩手県　須賀原修二　72
お知らせ　事務局　72

伊能忠敬一行の淡路島測量
―岩屋浦～仮屋浦―

廣田　晋也

●はじめに

伊能忠敬の第六次測量隊による四国測量は、文化五年（一八〇八）三月四日から徳島藩領の淡路島最北端の岩屋浦から始まった①。忠敬一行は三月三日に舞子浜に到着し、岩屋浦に渡海を試みたが、終日曇天で東風が強く、この日は断念した。岩屋浦は須磨や明石から淡路島に渡る玄関口であったが②、淡路国名所図絵に「迫門ハ海中山を夾むの間水最深く淵の如く盤渦波涛高くして舟舶容易からざるの處なりといふ」③とあるように、明石海峡は渡りにくかった。忠敬一行は翌三月四日に舞子浜を出立し、岩屋浦に到着した。三月五日に岩屋浦から仮屋浦まで測量した後、淡路島の東海岸と南海岸、沼島の測量を進め、三月十六日に淡路島の福良浦から四国の測量に向かった。四国測量を終えた後、同年十一月十一日に福良浦に戻り、淡路島の西海岸と中街道を測量、十一月十七日に岩屋浦に到着し、淡路島の測量を完了した④。

本稿では伊能大図と現在の地形図とともに（図1、図2、図3）、伊能忠敬測量日記⑫と伊能測量隊員旅中日記⑬の原文を記載した。それらの史料と淡路島の郷土史料をもとに、忠敬一行の足跡を辿り、江戸時代の岩屋浦と仮屋浦の統計（表1）も参考にして当時の様子について述べた。

●淡路島測量（岩屋浦～仮屋浦）に関係した人物

第六次測量隊の構成員及び徳島藩から淡路島の測量に貢献した人物を表2にまとめた。伊能忠敬測量日記によると、三月四日は本陣を岩屋浦庄屋・宇右衛門の家、脇宿を海部屋幸十郎の家とした。宇右衛門とは天保五年（一八三四）時点で岩屋浦庄屋であった武藤宇右衛門又はその先代であろう⑲。三月五日は本陣を仮屋浦庄屋・植野六郎兵衛の家、脇宿を仮屋浦庄屋・正井脇右衛門の家とした。徳島藩は天文方の関権次郎と樋富菊郎、引縄手伝足軽十一名を派遣した。天文方の二名は徳島藩の藩士（身分は徒士）であった㉑㉔。また岩屋浦で挨拶に訪れた郡代奉行（津名郡代）の津田甚之助は三百石の藩士（身分は組士）であった㉒。高木津左衛門と石浜久兵衛は郡代手代であった。徳島藩士の身分は上から、家老、中老、物頭、組士、高取諸奉行、大小姓、中小姓、日帳格、徒士、小奉行、の十種に分類されていた㉓。

●伊能忠敬測量日記（以降、測量日記）

忠敬一行は文化五年（一八〇八）三月四日から五日で岩屋浦から仮屋浦まで測量した。測量日記の原文は旧暦と不定時法で日時が記されている。本節では原文の後に、括弧内に文献㉔の広島の太陽暦四月一日に合わせて時刻を記載した（本文の現代語の意訳は文献㉕を参照）。

二月廿五日　同所逗留。間清市郎来る。伊勢山田暦師山口久太郎扇子持参対顔。午後より麻田立達へ「色半切五十枚」、青木常左衛門へ「小菊紙十帖、菓子一箱」、足立左内へ「小菊十帖」持参して見舞に越す。夫より天満天神へ参詣し、七ッ頃に帰宿。阿州家士関権治郎饅頭一箱持参見舞、少前樋富菊郎も来る。一同に帰る。関権治郎は坂部へ立寄、淡州東海辺片側を測、阿州へ渡る事を相談す。

（略）

三月四日　朝曇北風、四ッ後より少晴。明石大船頭、郡代組小頭、淡州渡海の儀不宜旨を云。度々かけ合、漸く九ッ後舞子浜乗船。順風直に淡路の国津名郡岩屋浦へ着。止宿、庄屋宇右衛門、脇宿海部屋幸十郎。此日四ッ頃、関権次郎、樋富菊郎、岩屋浦より舞子浦止宿まで乗船して来る。仍て淡州へ渡海、並に淡州測量を談す。岩屋浦着後、郡代奉行津田甚之助鎗引馬にて罷越し挨拶。此夜晴天測量。

三月五日　朝より晴天。濛気多して遠山は不見。六ッ半頃岩屋浦出立（下河辺は地図、先へ仮屋浦へ行）。我等、坂部、柴山、青木、稲生、文助、岩屋浦の止宿下より逆に燈明堂迄測り、引返し又止宿下より初、楠本村、浦村、来馬村を歴て仮屋浦（旧来馬村の属）まで測。止宿、本陣植野六郎兵衛、脇正井脇右衛門。此日中食（楠本村）、太右衛門、定平。着後郡代手代高木津左衛門、石浜久兵衛出る。関権次郎、樋富菊郎、日々付添（此以後署之）。此日より引縄手伝足軽十一人差出す（伊吉、武助、久郎、幾之助、俊蔵、新蔵、牛之介、寅之介、冨之丞、吉之助、甚蔵、合て十一人なり）。淡州阿州両国不残手伝なり。

（三月四日から五日は現在の三月三十日から三十一日である。原文中の時刻は、六ッ半は午前六時半、四ッは午前十時、九ッは午後十二時十分、七ッは午後四時四十分、である。）

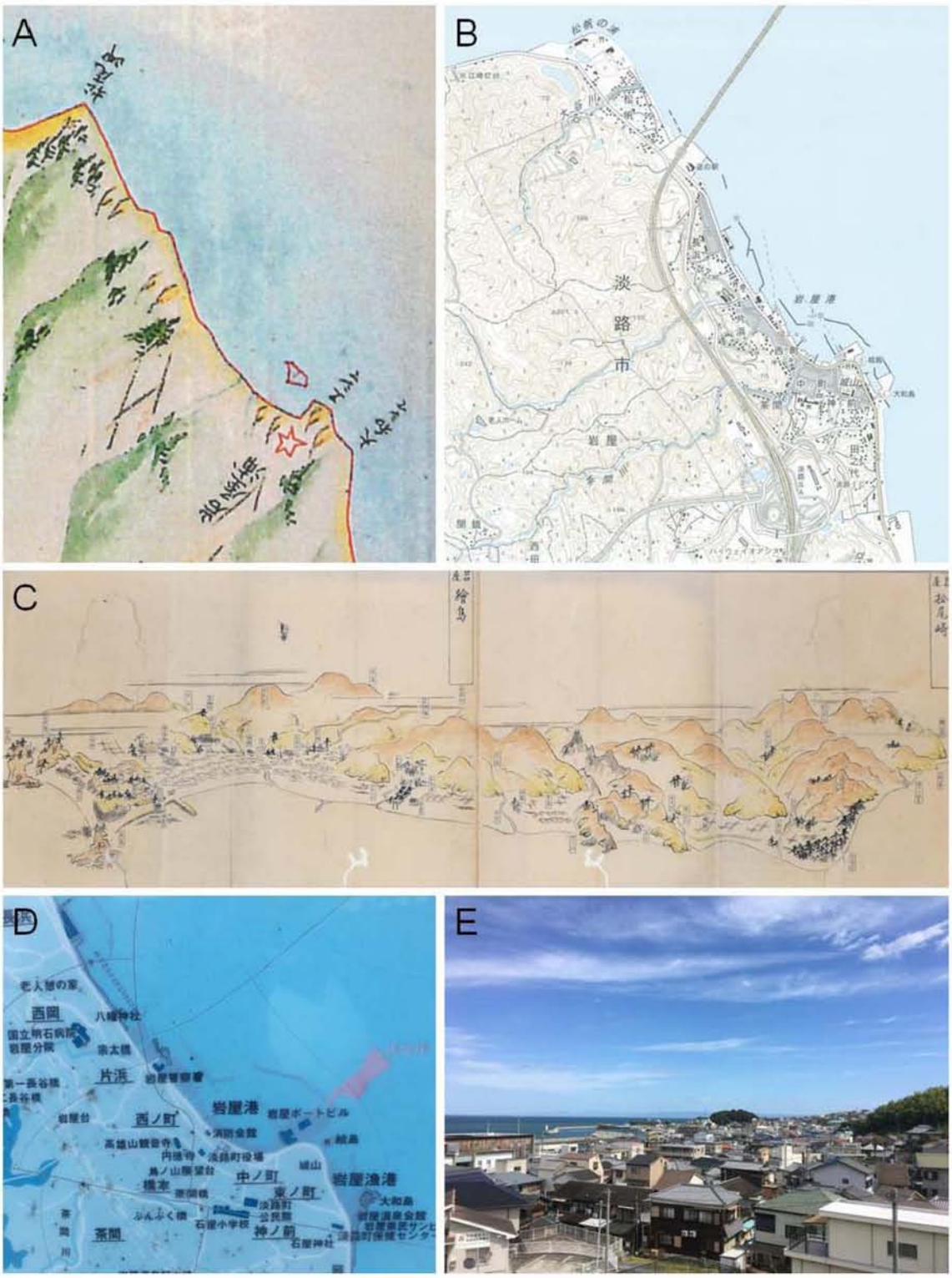


図1　岩屋浦

（A）伊能大図の岩屋浦（引用：文献⑤）（赤線：測線、☆：天体観測地点［大日本沿海実測録巻 5[6]によると、この天体観測より忠敬らは緯度 34 度 36 分と出し、現在の緯度とほぼ一致する］）、（B）岩屋浦の地形図（出典：国土地理院発行の 25,000 分の 1 地形図［須磨］）。（C）淡路国名所図会の「岩屋絵島」と「岩屋松尾崎」（兵庫県立歴史博物館所蔵）（D）岩屋にある案内板。当時岩屋浦は五つの町（東の町、中の町、橋本町、西の町、長濱）から成り、ほかに開鏡などの集落があった[7]。（E）岩屋八幡神社裏から撮影した現在の岩屋の中心

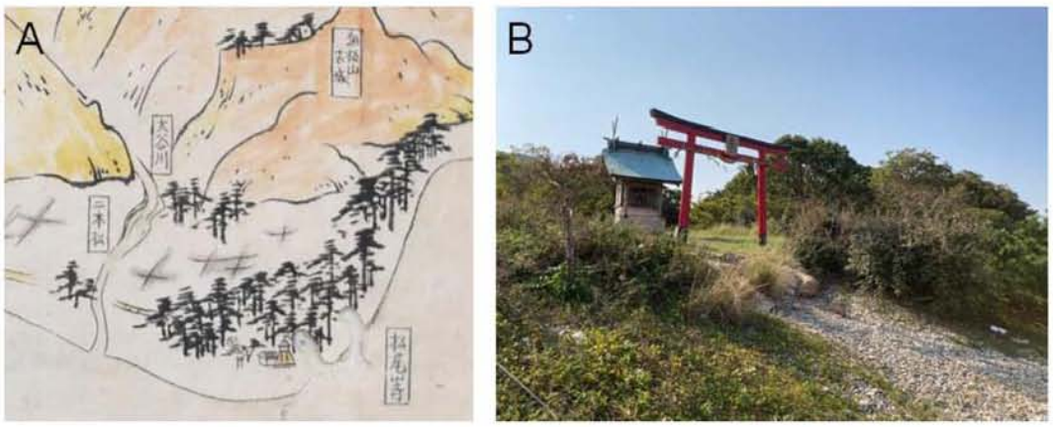


図 2　岩屋浦の松帆崎

（A）淡路国名所図会「岩屋松尾崎」（兵庫県立歴史博物館所蔵）。松帆恵比寿神社の鳥居右側（西側）に燈明堂が確認できる。松帆が訛り松尾とも言われてきた⑧。（B）現在の松帆崎の燈明堂跡付近

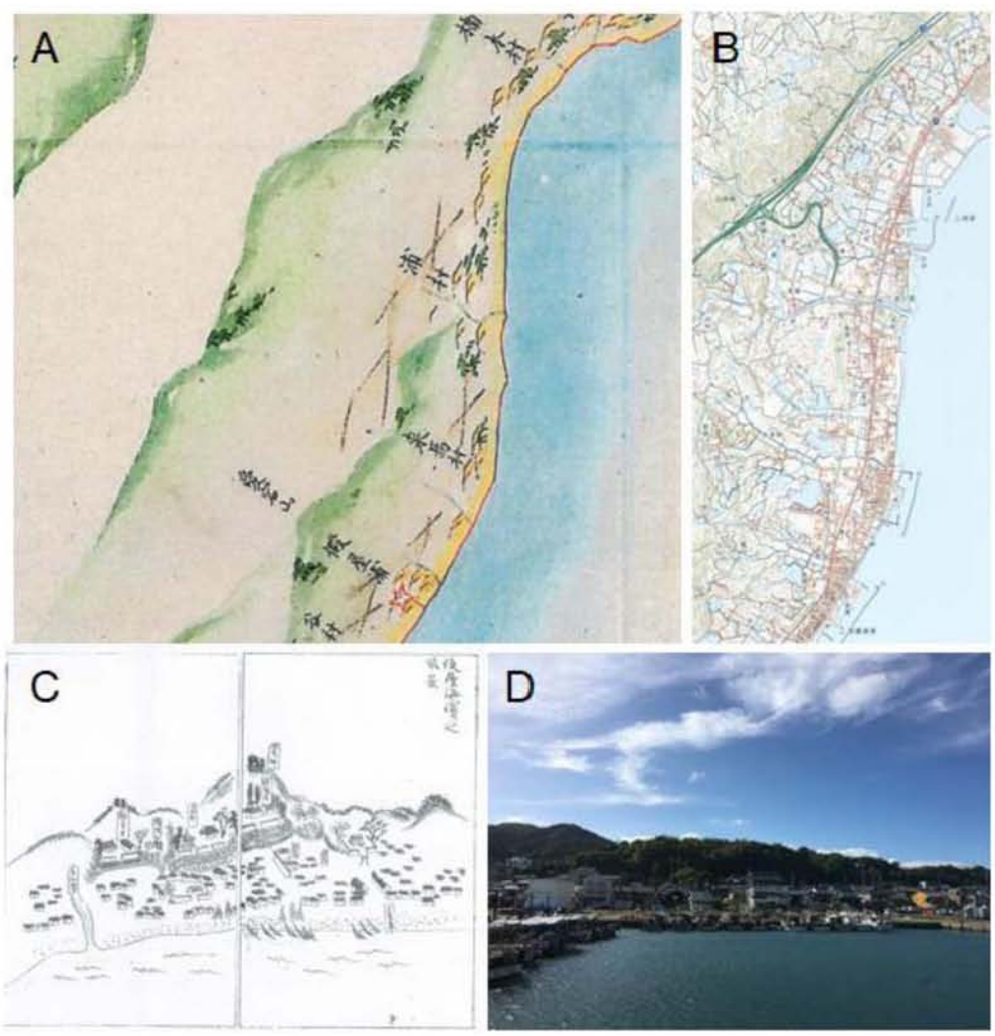


図 3　楠本村から仮屋浦

（A）伊能大図の楠本村から仮屋浦（引用：文献⑨）（赤線：測線、☆：天体観測地点［大日本沿海実測録巻 5⑩によると、この天体観測より忠敬らは緯度 34 度 31 分半と出し、現在の緯度とほぼ一致する］）、（B）楠本から仮屋浦までの地形図（出典：国土地理院発行の 25,000 分の 1 地形図［仮屋］）。（C）味地草に描かれた仮屋浦（引用：文献⑪）（D）現在の仮屋

●伊能測量隊員旅中日記（以降、旅中日記）

第六次測量は測量日記のほかに、旅中日記がある。作者は明記されていないが、第六次測量のみ参加した柴山伝左衛門と推定されている。前節と同様に、原文の後の括弧内に、現在の時刻を記載した。測量日記と旅中日記で人名の表記が異なる箇所は、原文をそのまま記載し、次節以降の記載は測量日記の表記で統一した。

二月廿五日晴天、夕方曇
一今日大坂逗留　呉服町会所預り
　　町年寄　新十郎
　　平兵衛
○松平阿波守家来　関権次郎
　　樋留（富カ）菊郎
　右両人阿州測量中ニ付添被申渡候ニ付、為挨拶罷越ス
○天満天神江参詣

（略）

三月四日未明微雨朝曇天
一今日風間見合、昼九時過、播州明石郡山田村舞子濱茶屋伊川半次郎方出立、夫方乗船
　但松平左兵衛督殿方八反帆二十弐丁立、壱艘上分不残同船荷物ハ、五十石積壱艘ニ積下之者ハ、別段に積、都合船数六艘也、尤大船役西海屋太兵衛也
同八時頃ニ淡州津名郡岩屋浦江着
　但松平阿波守殿より為馳走大船壱艘小船て八艘海中迄出行
　関権四郎、樋留（富カ）菊郎、待請夫より、海端廿間計りニして止宿
　尤伊能止宿別宿
　　岩屋浦止宿　百姓卯右衛門
　　海府や幸十郎
　夜有測量

同五日晴天無風
一今五時朝六時過岩屋浦出宅止宿、前方測量相始、同所方西ノ方松尾岬燈明堂迄相測り○三十四丁也、夫方立戻り、岩道前方南ノ方坂屋敷止宿迄相測
　○二里二十一丁也
一中食ハ楠本ノ内百姓　四人前　七右衛門宅
　　先生　多左衛門宅
一泊り仮屋敷（浦カ）八時頃着　和木右衛門
　　主　六郎兵衛
　夜中有測量

（原文中の時刻は、朝六時は午前五時半前、五時は午前七時四十分、昼九時は十二時十分、八時は午後二時半、である。）

●測量日記と旅中日記から解釈した測量隊の足跡

忠敬一行は文化五年二月二十四日から二十九日まで大坂の呉服町に滞在した。二月二十五日に徳島藩の天文方の関権次郎が饅頭一箱を持参し挨拶に訪れ、淡路島東海岸を測り、徳島藩領に渡ることを相談した。このとき樋富菊郎も訪れている。二十九日には尼崎方面に出立する一行を関と樋富が見送っている。

三月三日の四ッ後（午前十時過ぎ）に忠敬一行は舞子浜に到着し、明石海峡を渡り岩屋浦に向かおうとしたが、終日曇天で東風が強く、明石大船頭（明石藩大船上役）の西海兵太の意見もあり断念している。舞子浜には茶屋が四軒あり、その中の亀屋嘉右衛門の家に宿泊した。

翌三月四日の未明は小雨が降り、朝の天気も曇りで北風が吹いていたが、四ッ後（午前十時過ぎ）から少し晴れてきた。明石大船頭と郡代組小頭から淡路島への渡海は難しいと伝えられた。このとき忠敬は度々かけ合い、ようやく舞子浜の別の茶屋伊川半次郎方から九ッ後（正午過ぎ）に乗船し、順風であったため岩屋浦には八時頃（午後二時半頃）に到着した。

明石藩主松平直周が出した船は合計六艘で、伊能忠敬らが乗った船は八反帆船で二十二丁立（漕ぎ手が二十二人）であった。八反帆船の関船であれば長さは三丈八尺五寸（約十一・七メートル）、幅は一丈二尺八寸（約三・九メートル）である[26]。徳島藩主松平阿波守（蜂須賀治昭）の大船一艘と小船が沖で待っており、岩屋浦にともに到着した。

四ッ頃（午前十時頃）に、徳島藩天文方の関権次郎と樋富菊郎が岩屋浦から舞子浜の宿まで船で訪れ、岩屋浦に到着した時には関権次郎、樋富菊郎が待ち受けていた。伊能忠敬の宿は岩屋浦庄屋の宇右衛門の家で、脇宿の海部屋幸十郎の家は海辺から二十間（三十六メートル）ほどであった。宿に到着した後は淡路島の測量について話し合っている。岩屋浦に到着した後、津名郡代の津田甚之助（禄高三百石）が槍を立てて馬を引き挨拶に訪れた。夜は晴天で天体観測を行っている。大日本沿海実測録によると、岩屋浦の緯度は三十四度三十六分であった。

三月五日は朝から晴天で風も無かったが、霧で

遠くの山は見えなかった。忠敬一行は六ツ半頃（六時半頃）に出立し、下河辺は地図の作成のため先に仮屋浦に向かい、下河辺以外は松帆崎の燈明堂まで海岸に沿って測量した。山島方位記（表３）によると、松帆崎の燈明堂で本州の山や村の方位を測り、岩屋浦では他に燈明堂より東の三ヵ所で方位を測っている。一ノ谷を基準とすると燈明堂前は寅、それ以外の地点は丑であるから、燈明堂前が一番西の測量地点である。また㈠は燈明堂で、㈡以降に続くので、はじめに松帆崎まで海岸測量し、岩屋浦の宿の前まで戻りながら他三ヵ所で方位を測ったと考えられる。その後南下し、楠本村の太右衛門の家と定平の家で中食をとり、浦村、来馬村、仮屋浦まで測量した。仮屋浦の本陣は仮屋浦庄屋の植野六郎兵衛の家、脇宿は仮屋浦庄屋の正井脇右衛門の家であった。仮屋浦では郡代手代の高木津左衛門と石浜久兵衛が出迎えている。夜に天体観測を行い、大日本沿海実測録によると、仮屋浦の緯度は三十四度三十一分半であった。

(1) 江戸時代の岩屋浦と宿泊場所

岩屋浦は寛政二年（一七九〇）の時点の家数は三〇九軒、人数は一七九一名（男九八二名、女八〇九名）であった（表1）。岩屋は漁を生業とする家が多く、寛政二年時点の船数は漁船と渡海船を含めて二一四艘であった。岩屋浦は漁師町のため船大工が多く、家内工業的に漁師舟を製造していた[27]。岩屋浦で行われていた漁法は、イサリで突くイサリ漁、釣漁、鯛のごち網漁、鰯地曳網漁、蛸壺曳漁、など多彩であった[28]。漁業以外には魚介類仲買業や海運業など海関連の仕事のほか、綿実商人、紺屋、酒屋、酒造業、石工などがいた[29]。

表１：寛政二年（1790）岩屋浦から仮屋浦までの村浦の家数・人数等一覧表[14]

村浦名	石高	家数	人数	男	女	社数	寺数	僧数	船数	牛数	馬数
岩屋浦	606.113	309	1791	982	809	8	3	4	214	38	14
楠本村	749.977	85	393	173	220	1	1	1	2	75	28
浦村	1122.755	153	610	312	298	11	4	6	8	136	78
来馬村	1352.723	147	668	348	320	4	1	2	3	93	48
仮屋浦	6.991	358	1445	786	659	4	3	6	228	2	1

表２　伊能忠敬の第６次測量隊の構成員と徳島藩の測量に貢献した人物[15-17]

第６次測量隊		徳島藩	
隊長	伊能忠敬	徳島藩主	蜂須賀治昭
隊長・従者	藤吉	徳島藩筆頭家老洲本城代	稲田敏植
天文方下役	坂部貞兵衛、柴山伝左衛門、下河辺政五郎、青木勝次郎	徳島藩天文方*	関権次郎、樋富菊郎
		人馬割元役**	廣田直道***
天文方下役・従者	文吉、兵助、惣助、文蔵	岩屋浦・本陣	庄屋・宇右衛門
		岩屋浦・脇宿	海部屋幸十郎
内弟子	伊能秀蔵、植田文助、久保木佐右衛門	楠本村・中食	太右衛門、定平
		仮屋浦・本陣	庄屋・植野六郎兵衛
供侍	神保庄作	仮屋浦・脇宿	庄屋・正井脇右衛門
		引縄手伝足軽	伊吉、武助、久郎、幾之助、俊蔵、新蔵、牛之介、寅之介、冨之丞、吉之助、甚蔵
棹取	佐助、善八	郡代奉行	津田甚之助
		郡代手代	高木津左衛門、石浜久兵衛

* 徳島藩の天文と気象観測を務める係[18]、** 忠敬一行の宿や中食場所の手配、人夫や馬の調達、その他雑務を行う係、*** 淡路島北部にある柳澤村庄屋兼柳澤組十一ヵ村組頭庄屋

表 3：山島方位記 22 の岩屋浦の各地点での方位測量結果

文化五戊辰三月五日淡州津名郡岩屋浦松尾岬燈明堂前					
高御位山	㊀印ニテ測	戌	大半	二一二	小方
男子山		亥	大半	二八二二	小方
女子山		子	大半	六三	小方
有馬山　本名		子	大半	二八二八	小方
武庫山		丑	大半	二一	小方
摩耶山		丑	大半	二三四	小方
尼神山		丑	大半	二七三	イ
一ノ谷		寅	大半	七二五	小方
同日㊁印ニテ測					
男子山		亥	大半	二六二八	イ
女子山		子	大半	二四七	イ
明石タイ上山		子	大半	二四一四	イ
尼神山		丑	大半	一六三二	イ
一ノ谷		丑	大半	二三四	イ

文化五戊辰三月五日淡州津名郡岩屋浦松尾岬燈明堂前					
高御位山		イ	二一三	下	二一一（五力）
男子山		丙	二九三	下	二九二五
女子山		イ	六五五	下	六四五
有馬山　本名		イ	二八五	下	二九
武庫山		イ	二一三五	下	二一一
摩耶山		イ	二四五	下	二四
尼神山		乙	二六四		
一ノ谷		丙	七二	イ	七四五
同日㊁印ニテ測					
男子山		丙	二六		
女子山		丙	二三		
明石タイ上山		丙	二三三五		
尼神山		丙	一五五五		
一ノ谷		丙	二三		

同日㊁印ニテ測					
一ノ谷		丑	イ	二一二	丙
尼神山		丑	イ	一四三	丙
明石タイ上山		子	イ	二三一	下
女子山		子	イ	一四五	丙
男子山		亥	イ	二五二	下
			丙		
同日㊃印ニテ測					
尼神山		子	大半	二一五	小方
有馬山		丑	大半	九三八	小方
一ノ谷		丑	大半	一四三	小方
雨ノ森		辰	大半	二八一三	小方
飯森		巳	大半	五五三	小方
女子山		子	大半	五	イ
					乙

文化五戊辰三月五日淡州津名郡岩屋浦松尾岬燈明堂前					
高御位山		下	二一		
男子山					
女子山					
有馬山　本名					
武庫山					
摩耶山		イ	二一二五		
尼神山		乙	九一		
一ノ谷		乙	二一一		
同日㊁印ニテ測					
男子山		イ	一四四		
女子山		イ	二八三		
明石タイ上山		イ	一四		
尼神山		イ	九五		
一ノ谷		イ	五五五		
同日㊃印ニテ測		乙	五三		

図4　岩屋浦の本陣・庄屋宇右衛門の家

（A）岩屋浦庄屋・武藤宇右衛門の家の跡地（B）岩屋の略地図内の武藤宇右衛門の家の跡地の場所[33]

岩屋浦には徳島藩の御屋敷があり、藩の軍船を収める御船屋が二ヶ所（岩樟神社前の広場に三棟、八幡神社北東に四棟）と、交通の取り締まりを行う御番所が三ヵ所（絵島、長濱、松帆）あった[30]。松帆崎の御番所の横には燈明堂が描かれており、この付近で方位を測っている（図2）。

岩屋浦は瀬戸内海と大阪湾の間の重要な拠点であったため藩士の中でも家老と中老に次ぐ物頭が在番となり、西の町から片浜にかけて足軽屋敷が立ち並んでいた[31]。伊能図には岩屋浦の中心部のすぐ外側に絵島と大和島が描かれており、どちらも岩屋の名所である。絵島は往古から歌に詠まれてきた。大和島は絵島の南にあり、当時は神霊が住むと言われ、誰も登らなかった[32]。

岩屋浦の本陣は庄屋宇右衛門の家、脇宿は海部屋幸十郎の家であった。岩屋浦庄屋の武藤宇右衛門の家は岩屋の東之町集会所の南の区画にあり（図4）、二つの場所のいずれかが武藤家の屋敷跡であるが子孫は見つからず、庄屋武藤家を知る地元の人もいなかった。海部屋幸十郎の家の場所は不明だが、海岸から僅か二十間（三十六メートル）の場所にあった。

(2) 江戸時代の仮屋浦と宿泊場所

仮屋浦は寛政二年（一七九〇）の時点で家数は三五八軒、人数は一四四五名（男七八六名、女六五九名）、船数は二二八艘であった（表1）。仮屋浦の廻船は、図3の味地草に描かれた船のように小型で、大阪沿岸の諸都市と行き来し、燃料や原材料、食料を供給し、手工業製品を移入していた。庄屋の植野六郎兵衛と正井脇右衛門をはじめとする十軒は廻船と漁船を所有し、漁業生産から流通までの一連の経営をしていた。仮屋浦には文政八年（一八二五）の事代主神社（戎神社）の鳥居があり、植野六郎兵衛と正井脇右衛門を含めた寄進者の名前が刻まれている[34]。忠敬来島当時の仮屋浦の人たちの名前と考えられるが、仮屋浦以外に大坂の雑喉場の生魚問屋の商人や兵庫、尼崎、堺の魚問屋商人の名前もあり、大坂などとの行き来が活発だったようである。

仮屋浦の本陣は庄屋植野六郎兵衛の家、脇宿は庄屋正井脇右衛門の家であった。植野六郎兵衛の家は事代主神社と正井家屋敷の間にあったようである。正井家は勝福寺のすぐ東の区画にあった（図5）。

●おわりに

淡路島の岩屋浦は四国測量の開始地点であった。文化五年（一八〇八）二月二十五日に徳島藩の天文方は饅頭一箱を持参して事前に大坂で忠敬らに挨拶に訪れた。三月四日に忠敬一行は舞子浜から明石海峡を渡り岩屋浦に到着した。岩屋浦と仮屋浦はともに漁師町で、当時の岩屋浦と仮屋浦の絵図や家数、船数の記録が残っているのでイメージしやすい。岩屋浦と仮屋浦で天体観測を行い、緯度を測っているが、現在の緯度とほぼ一致している。岩屋浦の本陣の宇右衛門の家の場所はほぼ特定できたが、脇宿の海部屋幸十郎の家はわからなかった。仮屋浦の本陣の植野家の場所はおおよそわかり、脇宿の正井家は分譲されていたものの跡地を特定できた。いずれも子孫の方はすでに土地を離れたためかお会いすることはできなかった。今後は文化五年三月六日以降の淡路島の測量について掘り下げていきたい。

●謝辞

植野商店の皆様に仮屋の事代主神社の鳥居などをご案内いただき、淡路地方史研究会の海部伸雄会長には岩屋と仮屋の歴史について教えていただいた。この場を借りて感謝申し上げたい。

●文献

① 渡辺一郎監修『伊能忠敬測量日記 第十二巻 解読』イノペディアをつくる会（二〇一七）
② 仲野安雄『重修 淡路常磐草』臨川書店（一九九八）一一八～一一九頁
③ 暁鐘成『淡路國名所圖繪 巻之一』近藤雄太郎（一九三五）一ノ十三
④ 渡辺一郎監修『伊能忠敬測量日記 第十三巻 解読』イノペディアをつくる会（二〇一七）
⑤ 渡辺一郎監修『伊能図大全 第三巻』河出書房（二〇〇三）一一五頁
⑥ 伊能忠敬『大日本沿海実測録 巻五』大学南校（一八七〇）一頁
⑦ 藤井容信、藤井彰民編『淡路草 上巻』名著出版（一九七五）三七二頁
⑧ 仲野安雄、前掲書②、一三一～一三五頁
⑨ 渡辺一郎監修、前掲書⑤、一一五頁
⑩ 伊能忠敬、前掲書⑥、一頁
⑪ 小西友直、小西錦江編『味地草 第五冊』名著出版（一九七四）三八九頁
⑫ 渡辺一郎監修、前掲書①
⑬ 安永純子「伊能測量隊員旅中日記（上）について」愛媛県歴史文化博物館 研究紀要第六号（二〇〇一）九五～九九頁
⑭ 淡路町誌編集委員会『淡路町誌』淡路町（二〇〇五）二二三頁
⑮ 渡辺一郎監修、前掲書①
⑯ 伊能忠敬研究会『忠敬と伊能図』アワプラニング（一九九八）一一六～一二〇頁
⑰ 渡辺月石『淡路堅磐草付蝦夷物語下巻』臨川書店（二〇〇三）三一一～三一二頁
⑱ 高田豊輝『阿波近世用語辞典』高田豊輝（二〇〇一）二五四～二五五頁
⑲ 三宅進「淡路の庄屋」淡路地方史研究会会誌 第三号（一九六六）二九～四七頁
⑳ 宮本武史『徳島藩士譜 中巻』徳島藩士譜刊行会（一九七二）一五一頁
㉑ 宮本武史『徳島藩士譜 下巻』徳島藩士譜刊行会（一九七三）九五頁
㉒ 宮本武史、前掲書⑳、二四三頁
㉓ 洲本市史編さん委員会『洲本市史』洲本市役所（一九七四）一六三～一六六頁
㉔ 保柳睦美「江戸時代の時刻と現代の時刻」地學雑誌 八六（五）（一九七七）二七三～二八四頁
㉕ 廣田晋也「忠敬一行の淡路島・沼島測量―測量日記と淡路四草を紐解いて―」伊能忠敬研究 第八十七号（二〇一九）一三～二〇頁
㉖ 徳島県史編さん委員会『徳島県史 第三巻』徳島県（一九六五）三五〇～三五二頁
㉗ 淡路町誌編集委員会、前掲書⑭、三四四～三四六頁
㉘ 淡路町誌編集委員会、前掲書⑭、二四三～二五四頁
㉙ 淡路町誌編集委員会、前掲書⑭、二五七～二六二頁
㉚ 淡路町誌編集委員会、前掲書⑭、二三五～二三七頁
㉛ 淡路町誌編集委員会、前掲書⑭、二三〇～二三五頁
㉜ 仲野安雄、前掲書②、一二二～一三一頁
㉝ 淡路町誌編集委員会、前掲書⑭、二二三～二二九頁
㉞ 東浦町史編集委員会『東浦町史』東浦町（二〇〇〇）四三二～四三四頁

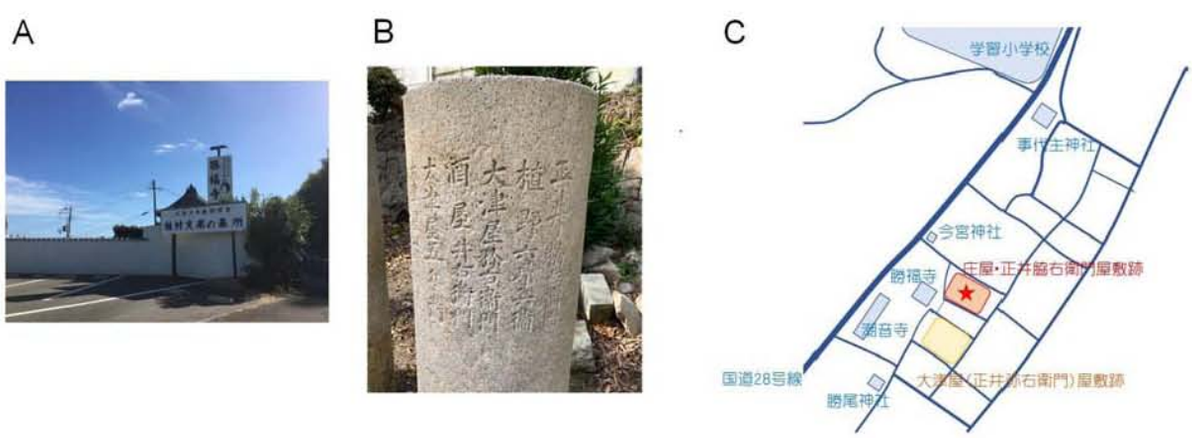


図5　仮屋浦の脇宿・庄屋正井脇右衛門の家

(A) 仮屋浦庄屋・正井脇右衛門の家の跡のすぐ西にある勝福寺 (B) 事代主神社（戎神社）の鳥居の柱の一部。両庄屋の名前が刻まれている。(C) 仮屋の略地図内の正井脇右衛門の家の跡地の場所

伊能忠敬の未公表書簡（三）

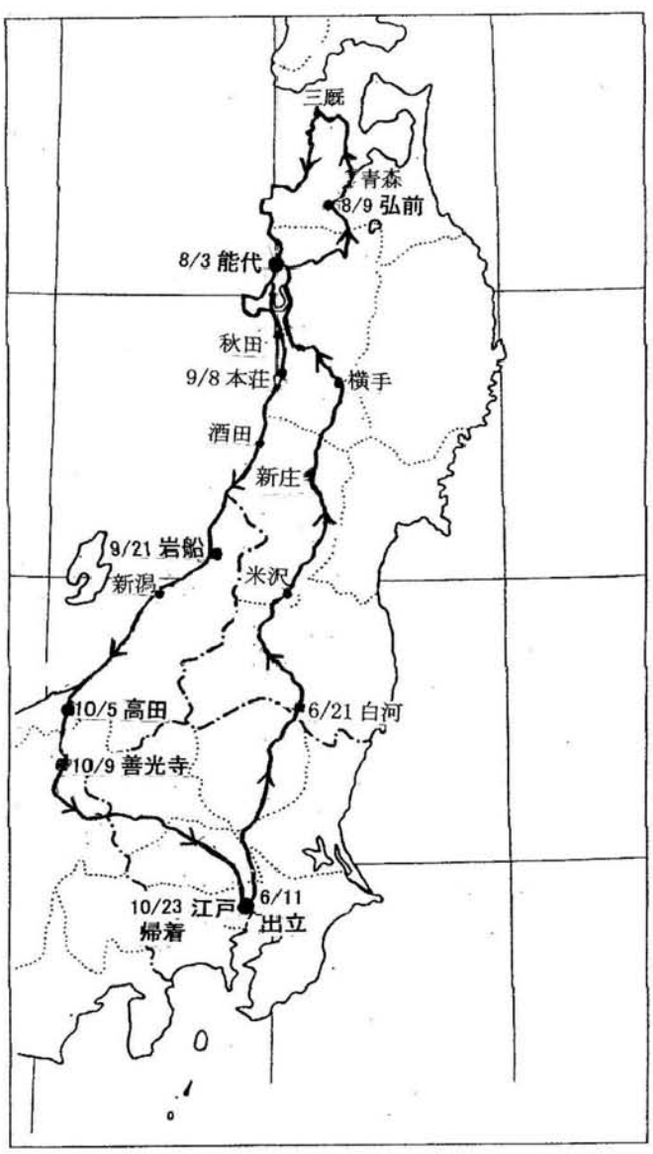
前田　幸子

はじめに

『三交會誌』所載の忠敬書簡紹介の第三回目である。今回は、第三次測量（羽越）の際の書簡から四通を紹介したい。第三次測量は享和二年（1802）六月十一日から十月二十三日までの四か月余、一三二日間で行われた。沿海測量では最も短期間だが、伊能測量が大転換した特筆すべき回とされる。第一次、第二次の「自費測量」を脱して幕府事業とほぼ同等の待遇になったという。今回は四通の書簡と『測量日記』とを併せ読みながら、第三次測量の起点から帰着までを辿ってみたい。時系列で第十九（江戸）、第二十（岩船）、第五（高田）、第六（善光寺）の順に見ていくことにする。なお第三次の書簡のうち、第一書簡（能代）と第二書簡（弘前）は前々回で紹介した。

辞令は語る

第十九書簡は忠敬が第三次測量の辞令を請けて提出した書類であるが、この辞令を読むと、第三次測量への幕府の待遇がそれ以前の測量に比べ、格段に手厚くなったことが分かる。まず手当金が大増額されて第一次（日数一八〇日）が二十二両余、第二次（日数二三〇日）が三十八両のところ、第三次（日数一三二日）は六十両であり、これは所要経費のほぼ全額にあたるといわれる。また、人足・馬の供給や書状の送達、宿泊料も幕府公用出張とほぼ同等の扱いとなった。特に書状は勘定所の御触書送達経路を利用することが許されたらしく、以後は測量先から随時書簡が発信されるようになった。第三次以降の御用書簡が現在まで残されているのはその恩恵であろう。伊能測量が正式な幕府事業となるのは忠敬が幕臣の身分を得た第五次以降であるが、待遇面では第三次ですでに公用並みに昇格を遂げていたといえる。『伊能忠敬』の著者大谷亮吉はこの変貌を「一種異様なもの」と評している。待遇激変の理由を辞令に探ると、本文に至時が「自分勘弁を以」、すなわち、自分の考えで堀田摂津守にお伺いをたてたところ許されたとある。天文方・至時自身が申請し、それに対して許可が出た、つまり今回は忠敬の申請ではなく、天文方の事業だから幕府が全額支給することになったということのようである。



第三次測量行程

思うに、至時は近づいている日食観測が気になっていたのではないか。書状送達の便宜も、日食の測量結果が早急に欲しかったような気配を感じる。そのあたりの事情についても、書簡と日記の記載から推測することができるのではないかと思う。

精度追求　第十九書簡以外の他の三通の書簡は測量先からの状況報告書である。岩船からの第二十書簡、高田城下からの第五書簡とも、難所を測量した際の苦労を報告したあと、見込測量や機材の工夫について語っている。測量行も第三次となり、測量作業を遂行しながら精度向上の実践をする余裕が出てきたことが読み取れる。

今回も参考として『測量日記』の関係部分を抄出して掲載した。併せてお読みいただきたい。

第十九

奉請取御手當金之事

一金六十兩也

右は私儀北國筋海邊測量御用被仰付當戌年分御手當金御渡被下置書面の通奉請取候處仍如件

享和二戌年六月　　伊能勘解由印

高橋作左衛門様

御役所

差上申一札之事

北國筋其外海邊爲測量御用被差遣候に付當戌年分爲御手當金六十兩被下竝道中人足五人馬三匹長持一棹持人被下候

右之通被仰渡難有奉畏候仍而御請證文差上申候處仍如件

享和二戌年六月　　伊能勘解由

高橋作左衛門様

御役所

覺

一　私儀今日五ッ頃上下七人にて出立仕候右の段御屆申上候以上

戌六月十一日　　伊能勘解由

高橋作左衛門様

御役所

現代語訳（大意）前田幸子

第十九

請け取り奉る御手当金の事（手当金受領証）

一　金六十両也

右は、私こと北国筋海辺測量御用を命じられ、当戌年（享和二年）分として渡された手当金を書面の通り受け取りました。右記載の通りです。

享和二戌年六月　　伊能勘解由㊞

高橋作左衛門様

御役所

差上げ申す一札の事（請書）

北国筋そのほか海辺測量御用として派遣するにつき、当戌年分の手当金として六十両、並びに道中の人足五人、馬三匹、長持一棹の運搬人を支給する。

右の通りご命令いただきまして、有難く恐れ多く存じます。つきましては承諾した旨の請け証文を差し上げます。右記載の通りです。

享和二戌年六月　　伊能勘解由

高橋作左衛門様

御役所

覚（出立届）

一　私こと、今日五ツ頃、上下七人で出立いたします。右のことについて、お届け申し上げます。以上

戌六月十一日　　伊能勘解由

高橋作左衛門様

御役所

解　説

書簡の内容

【第十九書簡】受領証・請書・出立届

書簡の概要　この書簡は第三次測量に係る三通の書類を並記したものである。「奉請取御手当金之事」は手当金受領証、「差上申一札之事」は出張条件に対する承諾書、三通目の「覚」は出立届である。これらは幕府からの「仰せ渡し（辞令）」に応えたものである。「仰せ渡し」原本は伊能家に伝存し、『測量日記』にも記載がある。

辞令の内容　「主文」で若年寄・堀田摂津守の出張命令を伝達、「追伸」で出張条件を通達する。堀田摂津守は「東方諸国全体の地図作成を目的とする沿岸測量のため其方を派遣する」と命じ、至時はこれに基づいて諸条件を忠敬に通達した。その内容は以下の通りである。

①八月の日食測量については心して勤めること。
②手当金として六十両、並びに人足五人・馬三疋・長持一棹・持人足を支給する。
③入念に測量して地図を仕立てること。各地で緯度と道路の里数を記録すること。なお、道筋へは道中奉行・御勘定奉行からお達しがあるはず。
④測量中に私に差し出す書状は現地の代官・領主・地頭等（の幕府の）役人へついでの便で私の役所に届けるよう頼むこと。そのことは勘定所がお達しするはず。但し、代官や地頭が難渋する場合は領主（現地の大名）に頼んでもよい。いずれ偉ぶった態度をすることのないよう頼むこと。弟子や従者たちも偉そうにしないようくれぐれも気を付けること。⑤宿泊料は所定の額を支払うよう心得ること。
⑥病気の場合は、届書を出して帰府してよい。

出立届

一行は朝五ツ（午前六時半頃）前に富岡八幡宮へ参詣し、五ツ半頃（午前七時四十五分頃）上下七人（伊能忠敬、平山郡蔵、伊能秀蔵、尾形慶助、大平雄助、久兵衛、兵助）で出立した。日記に「暦局へ立寄、宴別あり」とあるので、その際に提出したと思われる。

参考資料『測量日記』

享和二壬戌六月　測量御用被　**仰渡**

其許一昨年、昨酉年蝦夷地為測量御用被差遣、伊豆より蝦夷まで海辺地図仕立被差出候之所、右は陸奥・出羽等全体形象不相備候故、迚之儀陸奥三馬屋より西之方北海通出羽・越後・越中・能登・加賀・越前までの海辺、それより陸地通南之方尾張へ出、尾張・三河・遠江・駿河之間、海辺致測量、以前之地図相補い、尾張・越前より**東之方諸国全体海辺地図**出来候様致し度、**自分勘弁を以**相伺候所、即右国々海辺為**測量其許被差し遣候**旨、堀田摂津守殿被仰渡候付、此段申渡候。早々致支度出立、入念御用相勤候様可被相心得候。以上。

戌六月三日　　高橋作左衛門

伊能勘解由殿

追而道中に而　当八月**日食測量**有之申越候積可被相心得候事。

北国筋其の外海辺為測量御用被差し遣候付、為**御手当金六拾両**被下、並道中**人足五人・馬三疋・長持壱棹・持人足**被下候事。

当年勤方之儀、昨年迄之通被相心得、都而入念測量有之、**地図相仕立**、所々**北極出地**並全体**道路里数**等可被書出候事。

一、往来道筋へは、**道中御奉行・御勘定奉行**より達し有之候筈に候事。
一、御用の途中より**日食測量**、其外御用向に付自分へ被差越候**書状之儀**、其所御代官・領主・地頭等之役人へ相頼、幸便に自分役所へ相達候様申談候様可被致候。尤**御勘定所**より其段相達置候筈に有之候事。
但　御代官並地頭之儀は、所により人少に而書状達方等之儀難渋之可有之候。左様之節は、差斗い領主之所まで持参相頼候様にも可致候。何れいかつがましき儀無之様申談候様可被致候。
一、被召連候弟子小者等、都而いかつがましき儀無之様精々申含可被置候事。
一、道中**宿賃之儀、御定之木銭米代**相払候積り、可被相心得候事。
一、此度御用之途中、其許万一病気差発療養相加候而も、御用向難相勤体有之候はば、其趣自分迄届書差出し置、**勝手次第帰府**可有之候。若右届書差出候後、病気快気候ば、其段又々届書差出置、直様御用先へ出立可有之候事。

右為心得申達置候。

戌六月

＊　＊　＊

六月十一日　朝五ツ前　富岡八幡宮へ参詣し、直に出立。上下七人なり。平山郡蔵、伊能秀蔵、尾形慶助、大平雄助と久兵衛、兵助随へり。**暦局へ立寄、宴別あり。**伊能三郎右衛門、同七左衛門、大川治兵衛、大野弥三郎、樽屋喜兵衛、大工長兵衛等千住宿まで送別しける。

第二十　此書翰前文切レ失フ

・・・・・を經て越後海岸海浦越九里程大難所を日數三日に越今日同國村上領岩船町え安著仕候乍恐御安慮被遊可被下候二十四日迄に同國新潟港え罷出十月二日頃高田城下著十月三日高田村出立善光寺通御地へ七十二三里道中十五日掛と積り大凡十月十七日頃歸府と奉存候所々山峯嶮岨海岸岩石難所も數多御座候得共是迄は津輕弘前邊より山島の見込も不絶大難所迚も杖先象限儀にて上下三度數も測日食後野代湊出立後は新製鐵鎖二組にて道程も悉相量り海邊長途は羅鍼へ中小方位を入交測量仕候北極高度の比例地圖仕立にも可宜哉と奉存候高田城下より善光寺へ十六里は少々難所の樣子に承候山々見込連續仕兼可申奉存候道路測量の義も高田城下より所々城下の外は成たけ鐵鎖を相用可申奉存候猶又高田城下より先觸れ道中よと泊觸にて著府日限可奉申上候恐惶頓首

九月二十一日　　伊能勘解由

從越後國岩船郡村上領岩船町

高橋尊師

玉床下

再白當月は兎角不天氣にて夜分の測量も少山島の見込も相分り兼殘念奉存候自今何卒天氣續候樣と奉願上候　已上

第二十　この書簡は紙が破れて前の文章が無くなっている。

・・・・を経て越後の海岸の海浜を越えること九里ほど、大難所を日数三日で越え、今日、同国村上領岩船町へ無事到着いたしました。恐れながらご安心下さい。二十四日までに同国の新潟港へ出て、十月二日頃に高田城下に着き」十月三日に高田村を出立、善光寺道を通って御地（江戸）まで七十二、三里ですので、旅行日数が十五日かかると見積もり、大体十月十七日頃に江戸に帰着すると存じます。あちらこちらに険阻な山や峰、岩石だらけの海岸などの難所も数多くございますが、これまでは津軽の弘前辺りから山島の見込測量も絶えず行い、大難所であっても杖先象限儀で上り下りの勾配の度数も測り、日食観測後に能代湊を出立したあとは、新しく製作した鉄鎖二組を使って道のりもすべて測量し、海岸沿いの長いみちのりは、羅針（磁石）と中方位盤、小方位盤を取り交ぜて使用して測量いたしました。（そのようにして精密に測量しましたので）北極高度（緯度）の比例計算や地図仕立に際しましても（正確な数値が得られて）よろしいのではないかと存じます。高田城下から善光寺へ至るまでの十六里の行程は少々難所のように聞いております。山々の見込測量を連続してはできかねると存じます。道路の測量につきましても高田城下から所々で鉄鎖を用い、城下町の外ではできるだけ鉄鎖を用いて測量したいと存じます。なお、また高田城下より先触は道中より泊触にて江戸到着の日にちを申し上げます。恐惶謹言

九月二十一日　　伊能勘解由

越後国岩船郡村上領岩船町より

高橋尊師

玉床下

再白　今月はとかく天気が悪く、夜分の天測の回数も少なく、見込測量の際の山島の目標物もはっきり見分けることができず、残念に思っています。今後は何卒晴天が続きますようにと願っております。以上

解　説

書簡の内容

【第二十書簡】越後国岩船町からの報告

書簡の概要　この書簡は九月二十一日付で出されたものだが、書簡の前の部分が切れていて到達日等の情報は不明である。書簡の内容は、伊能隊一行が大難所を三日がかりで越えて岩船町に無事着いたこと、および今後の行程と江戸帰着日の予告である。それに続き、難所で苦労している中でも測量の精度を上げる工夫と努力を実践しつつ測量していることを報告している。

大難所　地図では平坦な海岸線が延々と続いているように見える越後の海岸だが、実際は勾配がきつく、また岩石だらけで通行困難な場所も多く、測量隊は大いに苦労した。高齢の忠敬は特に険阻な所は駕籠や船で通行したようである。『測量日記』には当時まだ海だった象潟の様子が書き留められている。海岸は険阻であるとともに風光明媚な箇所や歴史的旧跡も多く、それらを見物しながら通行している様子がうかがえる。なお、会報第四十三号から第四十六号に風間広吉氏の「越後岩船郡内沿海測量について」が掲載されている。併せてお読みいただければと思う。

精密測量　忠敬は測量作業の道中、山島の見込測量を絶えず行い、常に測量方法に工夫をこらした。たとえ大難所であっても「杖先象限儀」を用いて測ったという。これは傾斜を測る器械で、第一書簡（能代）には「大工と鍛冶屋に土台を作らせ、郡蔵に仕上げさせた」とある。「彎窠羅針」と同様、忠敬の工夫によるものである。

測量日記

九月九日　朝六ツ頃本庄城下出立。塩越村。

同　十日　逗留　五ツ後船に乗。**象潟諸島**を測る。**蚶満寺**へ立寄一覧す。

同　十一日　象潟海辺本道迄不残測る。

同　十二日　朝より晴天。六ツ前　塩越出立。海辺関村。此所　**ウヤムヤの関古跡**なり。小砂川村、此所休。是より由利郡なり。此村より村外迄五七丁は道も上下少よし。（長持は小砂川より女鹿村迄**舟廻にす**。馬荷も亦同じ）。それより**道途曲々、且狭く、其上丸石岩石おほく、上下度々ありて甚行路難し。駕篭も人歩大勢に而捧げて通るなり。馬・駕篭に乗ることならざる所なり。**海へ出岬を大師崎と云。又三崎共云。大師崎の上に**大師堂**（慈覚大師）あり。

同　十三日　六ツ頃吹浦出立。無程吹浦川。**舟に而渡て**、則川を右に海に出て行。それより海岸へ出。小湊村。舟渡し川あり。浅して**歩行渡り**にす。酒田町八ツ頃に着。**止宿不宜**。

同　十四日　六ツ頃酒田町出立。**渡船差支**、測量前後手分両組、我等一同待合、**時刻遅引**、大川を渡て、田川郡宮野浦。・・湯の浜村（此所温泉あり。故に湯浜と云）。加茂村、八ツ後に着。（**御用宿甚狭小、測量難相成に付宿替**）止宿。

同　十五日　朝六ツ過加茂村出立。今泉村、油戸村、由良村。今泉より此所迄**大難所**。村外寄り・・**山へ上る**。則出岬なり。・・温海村（温泉あり）、八ツ半後に着。此日**測量夜分にかかり**、暮坪村迄に而残る。

同　十六日　温海村出立。・・釜屋村（海辺奇岩おほし）・・大川村、八ツ頃に着。

同　十七日　逗留　沢郡方下役・栗原清右衛門見廻に来る。**是より海辺通行難所之相談に及。**

同　十八日　朝六ツ半前大川村出立。此浜辺は白砂、左は高山、十六七丁。それより**坂を上り下りて**、碁石村。根屋村、**此村より大難所**にて、**数度山坂を上下す。海岸奇岩おほし**。予は**乗船**して芦谷に至る。・・寒川村着。

同　十九日　朝六ツ半頃寒川町出立。海辺白砂七八丁に而、海岸**岩山を上るに甚嶮岨なり**。・・今川村。予と郡蔵は此所より**乗船**。此間板貝峠あり。板貝村。海岸、**岩石大難所**。舟に而て海岸海中を望めば、奇岩奇石おほく、山麓岩上の奇松、**絶景無類**なり。**山越の難所**もみゆ。笹川村、此村へ船より上る。・・新保村着。

同　二十日　六ツ半頃新保出立。海岸白砂。それより鳥越と云岩海へ出る。**卑を上下す**。それより又**馬下の大峠を上下し**、又**岩石の上を通る**。**無類の大難所なり**。柏尾村、九ツ頃に着。

（※以下、海府の村々の人の貞実さについて記す。人品古風にして敦朴。測量御用のお触に際し山坂の難所の道路を普請し、あるいは新しい道を造ったという話、また荷送に誠心誠意尽力する村人たちに忠敬はいたく感心した。）

同　二十一日　六ツ半頃柏尾出立。・・それより**岩船町**。此所繁昌に見ゆ。同十五日　**此所大難所**

第五

壬戌年北國筋海邊測量御用中十月五日認
越後國高田ヨリ書狀先觸ニ一所ニ十月十五日夜板橋宿問屋ヨリ爲持越ス
伊能ヨリ外ニ佐原ヘノ狀一通添翌十三日朝深川宅ヘ先觸ト一所ニ爲持遣ス

一筆啓上仕候愈御安泰可被遊御座奉恐喜候下拙共一同無難に昨四日高田城下迄安著仕候乍恐御安意被遊度候然は先月二十一日越後國岩船郡岩船町則村上城内藤御領分より懸簡差出申候御高覽被成下候儀と奉存候當月二日高田町著と都合仕候て歸府十六七日頃と申上候處岩船出立後も存之外難所も有之殊に曇天日々時雨等にて里數も測量仕兼延日に罷成候昨午前海邊測量之儀は今町迄に仕り則測量留杭建置當城下へ連測仕候先觸並夜分測量も仕度候間今日逗留明六日當城下出立十九日歸府と奉存候尤大風雨も御座候得は二十一日歸府と奉存候當所より善光寺迄山坂難所も有之よし臼井峠等も候へは著府定日は道中宿場より泊觸にて追々可奉申上候

恐惶頓首再拜

十月五日　伊能勘解由

高尊師

机下

再白先日も奉申上候通是迄は山島の見込一切絶申不候へ共當所より善光寺の山々見込連測無覺束奉存候成たけ無名の山へ甲、乙、丙、丁の符印仕候ても御府内迄取續候樣仕度奉存候猶歸府尊顔可奉申上候以上

一大工町へ此度は出狀遣し不申候深川より申通候樣に仕候へ共若し御出會も被遊候はゝ宜敷奉願上候深川へ書狀遣し申候間毎度恐入候へ共御屆可被成下候樣奉願上候

第五

壬戌年（享和二年　１８０２）北国筋海辺測量御用中の十月五日に書いた越後国高田から書状を先触と一緒に十月十五日夜板橋宿問屋より持ち越させる。伊能から外に佐原への書状一通を添えて翌十三日朝、深川の留守宅へ先触れと一緒に届けさせた。

※〔　〕内は原文の割注　（　）内は筆者の注

一筆啓上いたします。ますますご安泰にお過ごしのこととお喜び申し上げます。私共一行は無事に昨四日、高田城下まで無事到着いたしました。どうぞご安心下さい。さて、先月二十一日、越後国岩船郡岩船町の村上城主内藤豊前守のご領分から私の書簡を差し出しました。ご覧になって下さったことと存じます。当月二日、高田町に到着の予定で帰府は十六、七日頃と申し上げましたが、岩船出立後も思いの外、難所も有り、殊に曇天の日々や時雨等のため里数も測量しかねて日延になりました。昨日の午前中、沿岸測量については今町まで行い、測量の留め杭を立て置いて、当城下へ連測いたしました。先触れ、並びに夜間測量も行いたいと思いますので、今日は逗留し、明日六日にこの城下を出立して十九日に帰府したいと存じます。ただし、大風雨などがあった場合には、二十一日帰府としたいと存じます。当所から善光寺までは山坂で難所も有るとのこと。碓氷峠等もありますので、江戸到着の確定日は、道中の宿場から泊まり触れにて追々申し上げます。

恐惶頓首再拜

十月五日　伊能勘解由

高尊師

机下

追伸　先日も申し上げました通り、これまでは途切れなく山島の見込測量をしてきましたが、当地から先、善光寺の山々の見込測量を連続して行うのは覚束ないと存じます。なるべく無名の山に甲、乙、丙、丁と符合をつけてでも江戸府内まで連続させたく存じております。なお、帰府しましたらお目にかかって申し上げます。以上

一　大工町へこの度は手紙を出しません。深川（の隠宅）から伝言するようにいたしますが、もし桑原翁に会われることがありましたら、どうぞよろしく仰って下さるようお願いいたします。深川（の隠宅）あてに書状を出しますので、毎度恐れ入りますがお届けくださいますようお願いいたします。

解　説

書簡の内容

日程遅延　この書簡は高田城下安着の報告と、今後の日程の予告である。岩船町から高田城下までは難所と悪天候のため日程が遅延した。江戸に帰着する日程は、順調ならば十月十九日、荒天で遅延する場合は二十一日に帰着の予定、ただし帰路も碓氷峠等の難所があるので、確実な日程は途中の宿場から泊触で連絡するとある。実際には日程はさらに遅れ、一行が江戸に帰着したのは十月二十三日だった。

精度追求の執念　忠敬は前便で「高田城下から善光寺へ十六里は少々難所の様子なので見込を連続しかねる」と書いた。今回の書簡でも「高田城下から善光寺への道筋は山々の見込測量が覚束ない」と言う。それでも「無名の山に甲乙丙丁と符号をつけてでも江戸府内まで連続させたい」と見込測量への執念を語っている。忠敬の書簡は、測量精度を追求して、その意欲を語ることが多い。これは忠敬が自分自身に課した努力目標でもあり、師への決意表明でもあったと思われる。

深川の隠宅　冒頭の至時による付記、および書簡の結びの部分に「深川宅」が登場している。当時、留守宅で手紙を受け取ったり、大工町に伝言していたのは内妻お栄だったのではないだろうか。

鉢崎関所事件　十月二日、鉢崎の関所を通過する際に「長持改め」をめぐってもめごとが起きた。『測量日記』第三次測量の項の末尾には「越後国鉢崎御関所之事」として特記しているが、書簡の本文では全く触れていない。ただし、再白（追伸）で「あとは対顔して申し上げます」と言っている。この鉢崎関所の件を申し上げたのではないだろうか。下欄の末尾にその概略を付記した。

名所旧跡　『測量日記』に西生寺の広智法印について記述がある。日本最古の即身仏として現存している広智法印は下総匝瑳郡大浦の人。大浦は忠敬の故郷小堤から数キロ程度の所である。翌日は良寛の実家・橘左衛門方に止宿、天測をした。

測量日記

※関係部分の抄訳（太字筆者）

九月二十二日　朝六ツ**岩船町出立。**

同　二十四日　新潟町

同　二十五日　逗留

同　二十六日　六ツ前新潟町出立。

同　二十七日　朝小雨、**海岸難所、波濤漲りて通行難成**に付、見届を遣す所、押而通行可成と云に付、五ツ頃角田村出立。郡蔵、秀蔵、慶助、雄助、久兵衛を海岸へ遣。予は兵助を供とし、荷物と共に岡道を通る。

同　二十八日　朝五ツ後出立。野積村、**広智法印古跡**（貞治二癸卯年十月二日、七十五歳命終すと）。**海雲山西生寺**と云。当年迄四百七十年に成と云。（広智法印は**下総匝瑳郡大浦村の人**なり）。寺泊町、七ツ頃に着。止宿、五十嵐武兵衛。旧家に而家作よく、屏風・腰張、・かけ物等名画・名筆を所持なせり。**順徳院**佐渡へ遷され給ひし時、渡海の風波を待て、三十余日御逗留あり。**源義経**奥州へ落給ひし時も、主従此家に逗留ありしと。

同　二十九日　朝より曇る。五ツ後寺泊出立。出雲崎町、止宿　**橘左衛門**。旧家にて家作よし。此夜晴天、測量。

十月二日　朝六ツ半頃柏崎町出立。**鉢崎村**（宿と号、同領、家百九十四軒）此所関所あり。高田預り。**通行之節、長持改之事あり。測量察当の事あり。**柏崎より鉢崎迄は米山裾に当、小坂山越、海岸通行、少難所なり。八ツ半頃着。止宿十兵衛。此夜宵大曇天。九ツ頃小晴て測量。同四日　朝少晴。六ツ後黒井宿出立。海道直道白砂。今町。休宿。此所に而、去酉八月奥州磐前郡小名浜に而、面話せし、寺西重治郎御代官手代**稲垣直左衛門**と云人に逢。此人は当所の産なるよし。それより砂山村、・・右塩屋新田飛地、左林泉寺村。・・小橋を渡、**高田城下**。榊原式部大輔居城。呉服町八ツ頃に着。止宿　三国屋八郎左衛門。本陣なり。松平出雲守泊札あり。此夜晴天、測量。

同　五日　当所より先触、泊触並に**鉢崎御関所**一件の掛合をなし、猶**関川御関所通行尋問等**に付逗留。午前に先触、泊触、**暦局へ書状**を添出す。此夜も晴天、測量。

○『越後国鉢崎御関所之事』の概略

一行は、鉢崎の関所で長持の蓋を開けることを要求された。忠敬は、当方は測量御用であり道中奉行と勘定奉行からのお触れもある、他の関所でも改めはなかった、と主張したが関所側も譲らず、交渉の末、形式的に鍵を差し込むだけで良いことになった。また、一行が関所の周囲を測量するのを、関所役人が咎めたので、忠敬はこれにも反論した。結局、紛争に発展することもなく済んだ。

第六　壬戌年北國筋海邊測量御用中十月九日付ケ善光寺ニテ認之狀也同十四日夕方板橋宿ヨリ達ス外ニ泊リ觸添井佐原ヘノ狀共入有即刻深川ヘ爲持遣ス

一筆啓上仕候愈御安泰可被遊御座奉恐喜候下拙共一同無難に昨八日信州善光寺町迄安著仕候今日逗留明十日出立別紙泊觸の通來二十一日歸府可仕候右之段申上度如斯に御座候　恐惶頓首

十月九日　伊能勘解由

高尊師

机下

再白深川隱宅え書狀遣候間恐入候得共御屆被下置候樣奉願上候猶拜顏可申上候　以上

第六　壬戌年　北陸道沿海測量中の十月九日付で善光寺で書いた書状である。同月十四日夕方に板橋宿から到達した。この書状のほかに泊触添、佐原への書状が同封されていた。即刻深川へ持って行かせた。

一筆申し上げます。いよいよご安泰でいらして喜ばしく存じます。さて私ども一同は、昨日八日、無事に信州善光寺町まで到着いたしました。今日は逗留し、明日十日に出立して、別紙泊触の通り、来たる二十一日に江戸に帰る予定です。以上、このように申し上げたく存じます。恐惶頓首

十月九日　伊能勘解由

高尊師

机下

再白　深川の隱宅へ書状を書きましたので、恐れ入りますがお届け下さいますようお願いいたします。なお、お目にかかってお話を申し上げます。以上

****

書簡の内容

【第六書簡】善光寺町からの報告

この書簡は享和二年（１８０２）十月九日付で信州善光寺町で書いたもので、十月十四日に暦局に届いた。第三次測量行の最後の書簡で、内容は善光寺町到着の報告と帰府の日程予告の簡略なものである。善光寺での止宿は大門町の商人宿藤屋平左衛門。当日は雲間に天測し、翌日は善光寺に参詣した。このあと測量隊は道々富士山などを測りながら江戸まで順調に測進した。途中の高崎城下で、止宿先に板鼻の捨五郎が訪ねて来たことが日記に記されている。捨五郎は四か月後の第四次測量に上州板鼻宿小野良助として参加した。関流和算家・小野栄重として知られる。

****

測量日記

※関係部分のみ抄出（太字筆者）

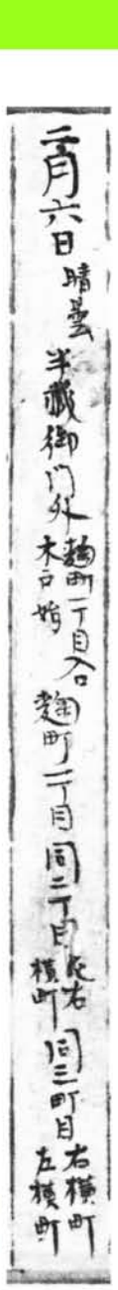
十月六日　六ツ頃高田城下出立。
同　八日　五ツ前　**善光寺大門町**・八ツ後に着。止宿**藤屋平左衛門**（高野氏なり）此夜雲間測る。
同　九日　朝より雨。逗留。（此朝**善光寺へ参詣**す）。
同　十一日　善光寺大門町出立。
同　十三日　六ツ頃上田城下海野宿出立。小諸城下前、富士見坂にて**富士山を測る**。
同　十五日　六ツ半頃軽井沢出立。**碓氷峠**を上て熊野三社権現の社前に至て**諸山を測量す**。此所則信州・上野州の堺。信州佐久郡の終。上毛は碓井郡の初なり。
同　十六日　六ツ頃松井田出立。・安中城下、・板鼻宿・・**高崎城下**・・**止宿（板鼻宿捨五郎来る。）**
同　二十一日　朝五ツ半頃熊谷宿出立。出口にて**富士山・筑波山・日光山・浅間山、其外諸山を測る**。
同　二十三日　六ツ後蕨宿出立。巣鴨町、それより本郷追分（予は是より**暦局へ相廻**、高橋先生に謁後）。七ッ頃**深川隱宅へ着**

江戸府内第一次測量の記録（三）
―文化十二年二月六日・七日の『日記』―

玉造　功

二月六日の測量は、図1のように、江戸城内濠の半蔵門外の麹町一町目の木戸から、外濠の四ッ谷御門外の㋝印を経て、甲州道中の出入り口である四ッ谷大木戸に繋ぎ、また㋝印に戻り、外濠沿いに市ヶ谷御門外の㋛印まで北上するものであった。

図2に描かれた半蔵御門から四ッ谷御門にかけての一帯は、幕府編纂の江戸地誌資料集『御府内備考』において御曲輪内と規定した地域であり、大名や旗本の屋敷地で占められていた。町人地としては半蔵御門外から四谷御門へと続く甲州道中の両側に麹町が続いている。麹町と武家屋敷の間に火除けの明地が広がり、大的場や騎射馬場が設けられていた。



二月六日　晴曇　**半蔵御門外**麹町一丁目入口木戸始め　麹町一丁目、同二丁目左右横町　同三町目　右横町　左横町

右横町同四町目　右横町　左横町　同五町目左横町　同六町目　右横善谷寺谷という　左横町　同七町目　右横町　左**阿部**

三十郎屋敷　同八町目　左**稲垣若狭守屋鋪**　左横町　右栖岸院前　同九町目　右**薬師横町**　左横町、左尾張殿屋鋪　同十町目　右心法寺

右横町　又右横町　四ッ谷御門　左番所　冠木御門　板橋渡巾五間　同十一町目　御堀端廻り之残し　㋛印　一十二町五十間　同十二町目　真直ハ　筆筒町

右横町又右横町、**四ッ谷御門**左に番所、冠木御門、板橋渡巾五間　**同十一町目**（御堀端廻りの残し㋛印一十二町五十四間　**同十二町目**真直は筆筒町

図1　『大日本沿海輿地全図』第90図に測量経路などを加筆

・**半蔵御門**…『御府内備考』によると、古くは麹町御門といったが、服部半蔵の組屋敷があったことからこの名が付いた。

・**阿部三十郎**…三十郎は彰（さん）十郎の誤記。阿部彰十郎正行は六千石の旗本で寄合衆。江戸府内測量後に代替わりがあったため、図2では阿部大学と新しいデータに更新され記載されている。

・**稲垣若狭守屋鋪**…伊勢鳥羽藩稲垣信濃守長継の上屋敷である。「若狭守」は誤記で、図2の「信濃守」が正しい。

図２　江戸実測図（南）に測量経路などを加筆

・**薬師横町**　…　『江戸名所図会』によると、常仙寺の寅薬師は薬師如来の縁日である毎月八日（寅の日）と十二日には多く参拝者を集めたことから、常仙寺前の横町を薬師横町と呼んだ。図３には麹町八丁目と九丁目の境や薬師横町の入口に木戸が描かれている。

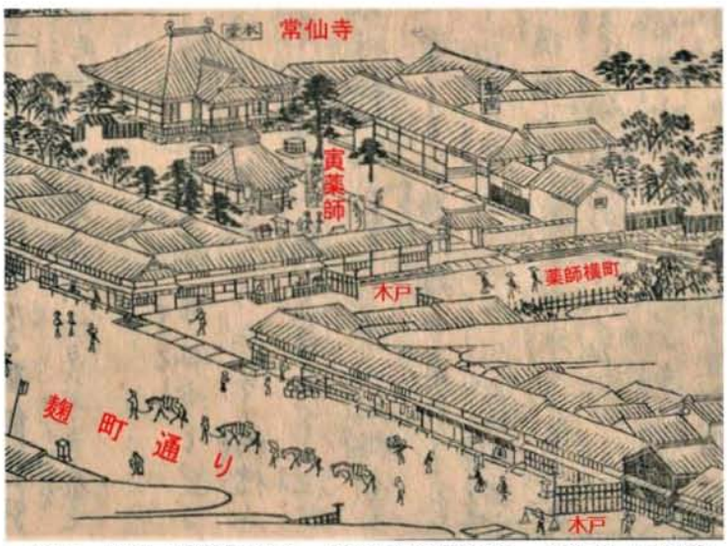


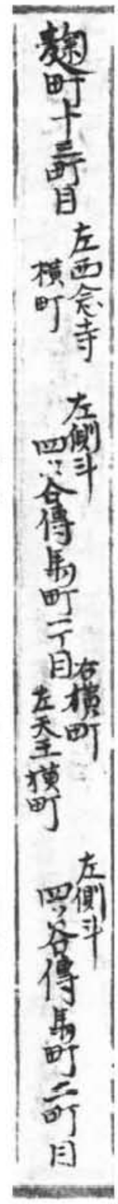
図３　『江戸名所図会』　常仙寺寅薬師堂・心法寺　に加筆

・**四ッ谷御門**　…　江戸城の外曲輪に置かれた城門（見附といい見張り番所がある）の一つで、甲州道中が御曲輪内に入る要地であった。麹町通りから外濠に突きあたると、『日記』に「左に番所」とあるように城門警備の詰所である大番所が置かれていた。測線は右折して渡櫓（わたりやぐら）門をくぐっている。渡櫓門は幅四間、長さ十七間あり、武器、弾薬、食糧を蓄え、戦時には石垣に囲まれた枡形に侵入した外敵を、上から矢や鉄砲で攻撃できる。測線は枡形内を左折し、冠木門から堀を横断する堤の中央の板橋を経て、麹町十一丁目へと続いている。江戸実測図（南）では各御門の渡櫓門と冠木門を描き分けている。

図４　『旧江戸城写真帖』から　「四谷見附図」に加筆

・**麹町十一町目、十二町目**　…『四谷御門外麹町書上』によると、両町は外濠の開削と四ッ谷御門の設置に伴って寛永十一年頃に四ッ谷側に移転させられた。そのため麹町といいながら『御府内備考』では四ッ谷の付録として掲載されている。なお、麹町を初めとして、御曲輪内に位置する日本橋、築地、内神田などの町々の『町方書上』は現存しない。『御府内備考』も御曲輪内については町名と里俗名を列記するだけであるので、『町方書上』の提出対象地域とされなかったのであろう。

（右横町
塩町という）　左側ばかり
四ッ谷伝馬町一町目（右横町
麹町十二町目）（左横町
伝馬町一丁目）（**左側ばかり**
伝馬町二丁目）右側
ばかり



麹町十三町目　左西念寺
横町　左側ばかり
四ッ谷伝馬町一丁目　右横町
左天王横町　左側ばかり
四ッ谷伝馬町二町目

左右共
伝馬町二町目　右御仮屋横町という
左　**石切横町**　右側ばかり
伝馬町三町目（左横町宝蔵寺
横町という）　左
右共伝馬町

三町目（右車力門横町
左**押原横町**　**恩町**）左側ばかり
（右三町ばかり引込全勝寺
古舟場横町、左左内横町）右側ばかり
塩町二町目（右横町を
蕎麦屋横町という）

（**左浄雲寺横町**
左横町を**馬殿横町**という右　左
共塩町二丁目　右**鍋屋**
横町　塩町三町目（左笹寺、右竜昌寺横町
左大番町横町、右田安殿屋鋪）

大木戸（**未年五月八日**残し
左石台に繋ぐ）　一十二町三十七間一尺　通計二ロ〆二十五町三十一間一尺（此所左横町
大番横町という）

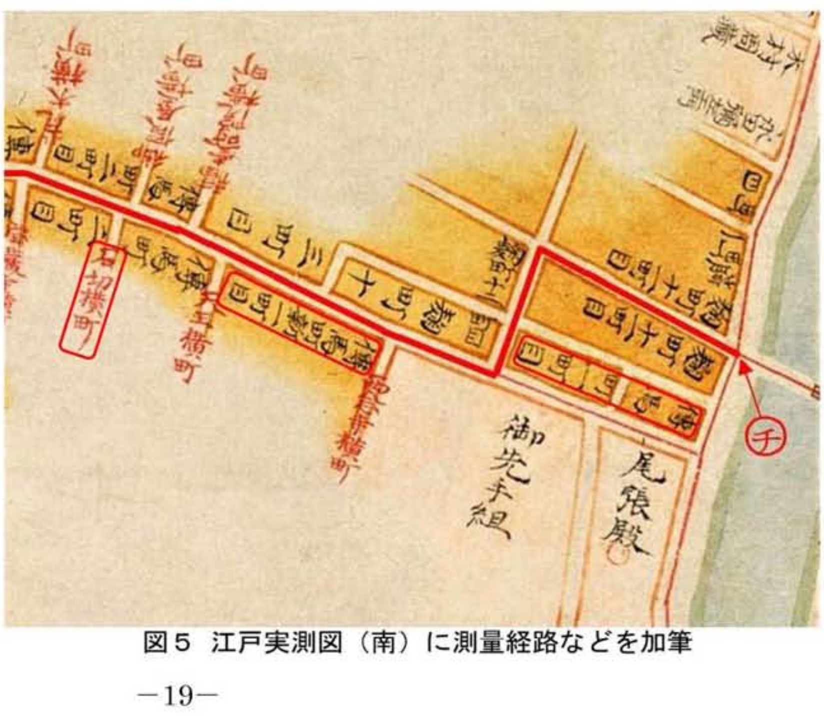


図5　江戸実測図（南）に測量経路などを加筆

・四ッ谷伝馬町と四ッ谷塩町 … 日本橋の大伝馬町の名主の馬込勘解由らは、伝馬役負担の褒賞として、四ッ谷御門前の明地に一括して土地が与えられ、大伝馬町の家持に地割りして四ッ谷伝馬町一～三町目、四ッ谷塩町一～三町目が成立した。四ッ谷塩町は大伝馬塩町になぞらえて町名とした。

・左側ばかり伝馬町二丁目 … 伝馬町二丁目は、麹町十三町目や伝馬町新一町目の西側に位置しているので誤記か。四ッ谷御門外西側の測量路の表記が混乱しているようである。

・**四ッ谷伝馬町一丁目** … 二行目の「四ッ谷伝馬町一丁目」は、『日記』には西念寺横町と天王横町の間に記載されており、図5の伝馬町新一町目を誤記したものと思われる。伝馬町一町目と二町目の間に後から町家となったことから伝馬町新一町目と称した。

・**石切横町** … 甲州道中に玉川上水の暗渠「万年石樋」を埋設した際に、石材置き場となり、石工が切り出したことによる。

・**恩町** … 図6の忍（おし）町を誤記したものである。忍（現在の埼玉県行田市、『のぼうの城』で有名になった）の城代となった高木氏の家来の大縄屋敷地が町屋となり忍町となった。「押原横町」も「忍原横町」の誤記。

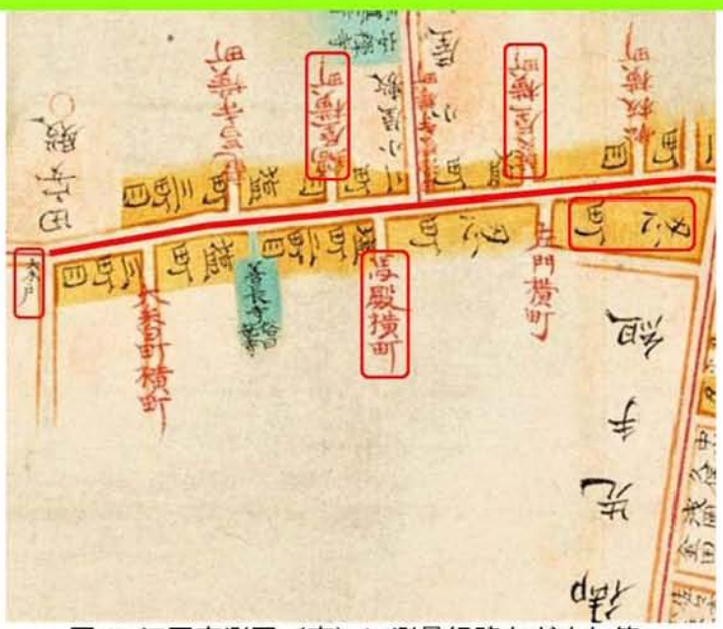


図6 江戸実測図（南）に測量経路などを加筆

・**蕎麦屋横町と鍋屋横町** …『四谷町方書上』などには「蕎麦屋横町」の記載は無く、位置的には図6の「菱屋横町」の誤記と思われる。『日記』と図6に「鍋屋横町」とあるが、これも同様に「湯屋横町」の誤記と思われる。「左浄雲寺横町」とあるが「右」の誤り。

・**馬殿横町** … 『四谷町方書上』や『江戸切絵図』などでは「右馬殿横町」としている。辻右馬之助という旗本の屋敷があったことから右馬殿横町と呼ばれたとある。

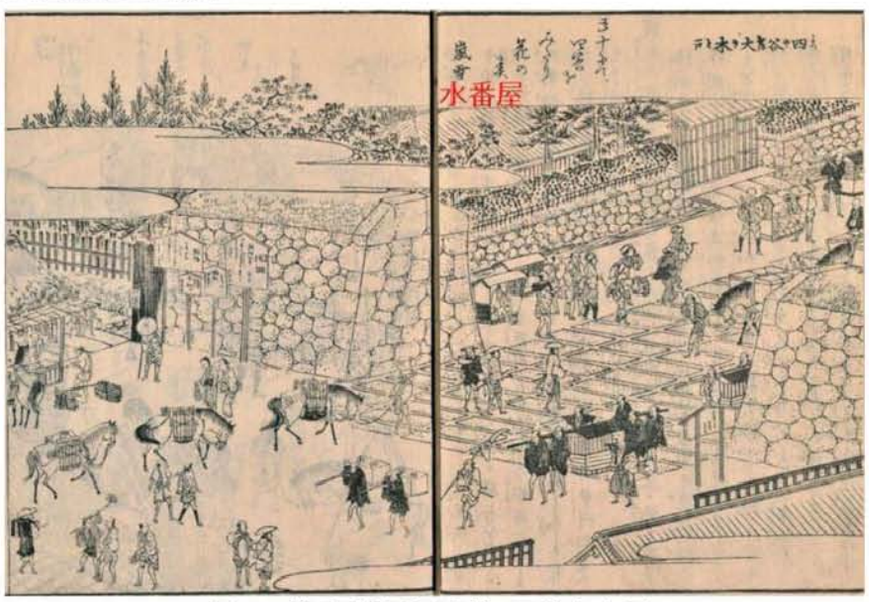


図7 『江戸名所図会』 四谷大木戸

・**大木戸** … 甲州道中の江戸への出入り口として四ッ谷大木戸が設けられた。寛政四年には図7に描かれた、左右の長さ七尺、幅五尺三寸、高さ五尺三寸、土手の高さ一尺二寸の「永代不朽の石垣」を設けて木戸は撤去した。

四ッ谷大木戸の横には図8のように玉川上水の水番屋が置かれていた。玉川上水は水源地から開渠であったが、ここから巾六尺の「万年石樋」を街道の地中九尺程に埋設して暗渠となり四ッ谷御門へ向かい、石樋や木樋で江戸城内と江戸市中へ配水した。『上水記』は普請奉行上水方が作成し、寛政三年に将軍家斉に献上したもので、石垣はまだ無い。

・**未年五月八日** … 文化八年五月八日、第七次（第一次九州）測量から内藤新宿に帰着し、さらに四ッ谷大木戸まで測線を繋いだ。娘の妙薫、嫡孫の三治郎（忠誨）らが出迎えた。

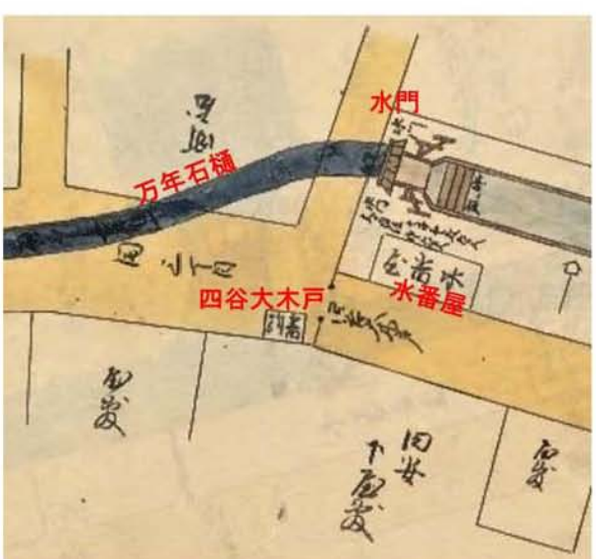


図8 『上水記』 玉川上水の四谷大木戸水番屋

（四ツ谷御門外に帰り　又四ツ谷御門外　（前に残す㋚印始め　（左側ばかり四ツ谷塩町一丁目という
昼飯（飯）自身番所　御堀端測量　人家続

武家屋鋪　（左横町　左**永田弥右衛（門）**屋鋪　左横町
（右辻番所　左**高力式部**屋鋪　左浅野大学屋鋪　**市ヶ谷田町**四町目

（右辻番、是より左町家続き　（左一町ばかり引込坂の上に　右市ヶ谷御門前
（左横町二丁ばかり引込尾張殿屋敷　**市ヶ谷八幡町**　（市谷八幡宮有り

田町一丁目　入口の木戸右柱に繋ぎ畢る　（惣測数
㋥印　七町五十二間三尺　（三十三町三十三間四尺　八ツ時頃帰宿

・昼飯自身番所　…　麹町十一丁目の『町方書上』によると、東方の北角に自身番所があり、間口九尺、奥行四間半で、屋根の上には高さ八尺の火の見があった。

・永田弥右衛（門）…　図9の永田弥左衛門を誤記。永田弥左衛門直庸は千二百石の中奥御番衆。

・高力式部　…　高力式部は三千石の寄合衆の高力式部長民のことであるが、武鑑等で確認すると文化四年にはすでに高力右近忠直に代替わりしており、図9の記載が正しい。

・市ヶ谷田町　…　市ヶ谷堀沿いの田地を埋め立てて町家としたことから市ヶ谷田町という町名になった。

・市ヶ谷八幡町　…　市ヶ谷八幡社境内の門前町家。茶屋が並び、『江戸名所図会』は劇場や楊弓場（矢場）もあり賑わっていたと記している。

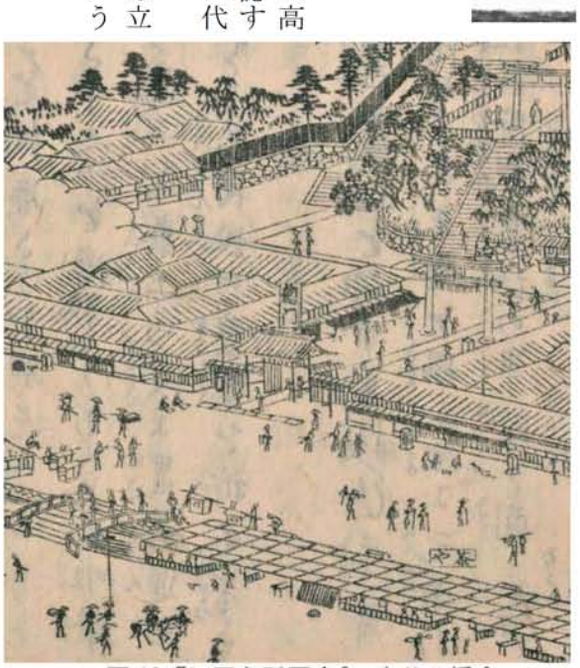


図10『江戸名所図会』　市谷八幡宮

図9　江戸実測図（南）に測量経路などを加筆

― 文化十二年二月七日の『日記』―

二月七日の測量は、前日の最後に残した図11の㋬印から始めて、外濠沿いに筋違御門外の㋲印まで、そこから中山道・日光御成道を湯島、本郷へ、駒込追分（本郷追分）㋕印から右手の日光御成道を進み、㋳印から横切測量を行い、中山道に㋟印を残して終わった。

図11の市ヶ谷、牛込、小石川にかけての地域は、町人地は御堀端の細長く狭い範囲であり、その北西側には伊能図では空白であるが尾張藩や水戸藩などの大名屋敷や旗本屋敷などの武家地と寺社地が広がっている。江戸は武家地が三分の二、寺社地が六分の一を占め、人口の半分を占める町人は面積的には六分の一程度であることが実感出来る。

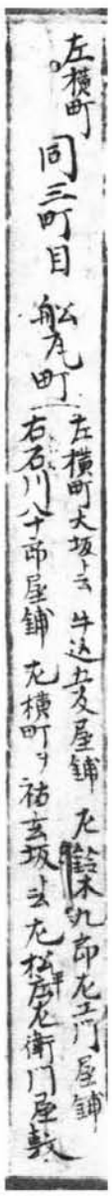
図11 『大日本沿海輿地全図』第90図に加筆

二月七日 晴曇 風烈 市谷御門外木戸 昨日打止め幟 ㋬印始め 右御堀端添測量 田町一丁目

二月七日　晴曇　風烈　市ヶ谷御門外　木戸（昨日打止め幟）㋬印始め　右御堀端添測量　田町一丁目

左横町字左内坂ト云 左火消屋敷 田町上二町目 左横町火之番町ト云 田町下二町目 左横町 又左横町有り

（左横町字**左内坂**という、左**火消屋敷**　田町上二町目　左横町、**火之番町**という　田町下二町目　左横町、又左横町有り


左横町 同三町目 船瓦町 左横町大坂ト云 牛込五反屋舗 左鈴木九郎左衛門屋舗 右石川八十郎屋舗 左横町ヶ祐玄坂ト云 左松平庄左衛門屋敷

左横町　同三町目　**船瓦町**（左横町大坂という、牛込五反屋舗、左鈴木九郎左衛門屋舗、右石川八十郎屋舗、左横町を**祐玄坂**という、左松平庄左衛門屋敷

- **左内坂** … 田町一丁目の角屋敷に住んでいた名主の島田左内が坂上近くまでの傾斜地に町家を開いたことから左内坂、左内坂町と呼ばれるようになった。
- **火消屋敷** … 市ヶ谷左内坂にあった火消屋敷で、測量当時は六千石の旗本牧野半右衛門忠寛が定火消御役として担当した。
- **火之番町** … 田町下二町目の『町方書上』では、南の方の横町の武家屋敷を火之番町と呼んでいるが、その由来は不明としている。表火之番や奥火之番の屋敷地があったのであろうか。
- **船瓦町** … 船河原町の誤記。図12の表記が正しい。
- **祐玄坂** … 図12では幽玄坂としている。『御府内備考』でも、二代将軍秀忠が中国の梅の名所にちなんでつけたという庚嶺坂から、ゆう玄坂、ゆうれい坂、ゆう念坂、行人坂という異名をあげている。

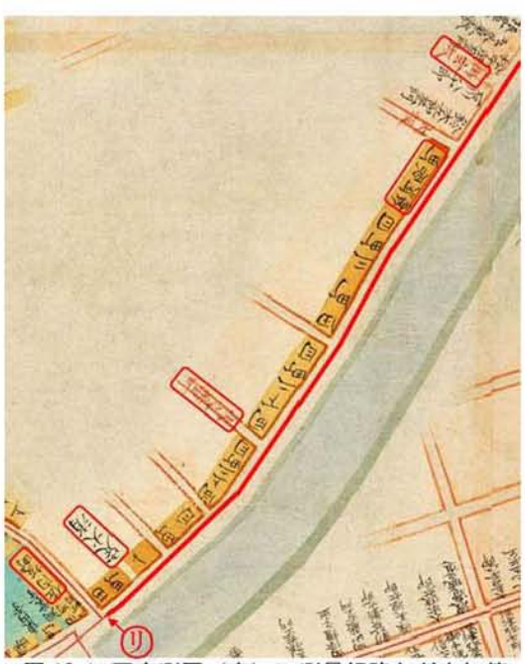


図12 江戸実測図（南）に測量経路などを加筆

左中根平左衛門屋鋪　左西尾小左衛門屋敷　左佐原勘左衛門屋鋪　**牡丹屋鋪**　右牛込御門外　御門迄一町ばかり　左横町を

神楽坂ト云　是より町家　左片桐長門守屋敷　左土岐藤兵衛屋鋪　**揚場町**　左蜂屋甚之助屋鋪　左横通り水野因幡守屋敷

左久世丹後守屋鋪　左横町　江戸川　舟河原橋　渡長一十三間　俗ニドンド橋ト云　是より小石川　左山崎又三郎屋鋪　左内藤忠左衛門屋敷　左横町　阿部八之亟屋敷

左横町　是より左永見伊豫守屋鋪　左土井左門屋敷　右小石川御門外　左者　左舟越七之助屋鋪　山崎傳次郎屋敷　石橋

左横町、　是より左永見伊予守屋鋪、　左土井左門屋敷　右小石川御門外　左は　左舟越七之助屋鋪、山崎伝次郎屋敷、石橋

水戸殿屋鋪添　左横町　右水道橋前　左石丸定七郎屋鋪　左建部六右衛門屋敷　左石川　靭負屋鋪

（水戸殿屋鋪添、左横町、　右水道橋前　（左石丸定七郎屋鋪、　左建部六右衛門屋敷、左横町、左宇田川平七郎屋鋪　左石川　靭負屋鋪

左園部鱗之助屋鋪　左近藤七郎右衛門屋鋪　左横町　左稲垣藤四郎屋鋪　左前田繁之助屋敷　左横町　左酒井亀之助屋敷　左横町　左岸彦十郎屋敷　左横町

（左園部鱗之助屋鋪、　左近藤七郎右衛門屋鋪、　左横町、　左稲垣藤四郎屋鋪　（左前田繁之助屋敷、　左横町、　左酒井亀之助屋敷、　左岸彦十郎屋敷、　左横町

図13 江戸実測図（南）に測量経路などを加筆

・**牡丹屋敷**…岡本彦右衛門の屋敷で牡丹を作り献上していたことから牡丹屋敷と呼ばれていた。後に上地され、大奥の有力者三名の拝領町屋敷となった。江戸府内測量の頃は本丸大奥年寄の歌橋と花町、西丸表使の三坂が拝領し、賃貸収入を得ていた。

・**神楽坂** … 毘沙門天で有名な善国寺が麹町から移転してきたことにより、「月ごとの寅の日には参詣夥しく、植木等の諸商人、市をなして賑はへり」（江戸名所図会）となった。但し、図14にも描き分けられているように、坂の南側は繁華な町家、北側は武家屋敷と、坂の左右で雰囲気が異なっていた。図14の正面には牛込御門と外濠が描かれている。

図 14 広重 東都坂尽 牛込神楽坂之図

・**片桐長門守** … 片桐長門守信憑は一千石の旗本で御使番衆。代替わりにより図13では寄合衆の片桐長兵衛となった。

・**揚場町** … 牛込揚場町の提出した『町方書上』には「山之手諸色運送之揚場」（山の手方面の諸物資の荷揚場）であったことから町名となったとある。吉田伸之（２０１５）によると、牛込揚場町は神田川を遡行してきた艀下船が到達できる最終地点であり、江戸城から見て郭外の北西部に分布する武家屋敷や町人地に多様な物資を供給するこの地区で最大規模の河岸であった。その中央部には尾張徳川家上屋敷用の尾州様揚場があったという。

図13には揚場町に隣接して軽子坂と記されている。『御府内備考』によると、揚場から船荷を運ぶ軽子（運搬人足）が山の手への通路としたことから軽子坂となったという。

・**久世丹後守** … 三千五百石の新番頭久世**丹波守**広才を丹後守と誤記。代替わりがあり図13では西丸小納戸の久世政吉広正となる。

・**ドンド橋** … 船河原橋のすぐ下に堰があり、流れ落ちるどんどんという水音がしたということから「とんど橋」「どんど橋」「どんどんノ橋」「船河原のどんどん」などと呼ばれた。図13の船河原橋にも「俗曰ドンドバシ」と注記されている。

・**山崎又三郎** … 廩米（切米、蔵米とも）三百俵の旗本で大番衆の山崎又**次**郎春方を誤記。

・**土井左門** … 土井左門利豊は五千石の旗本で百人組の頭であったが、代替わりがあり図13では寄合衆の土井銈之允となった。

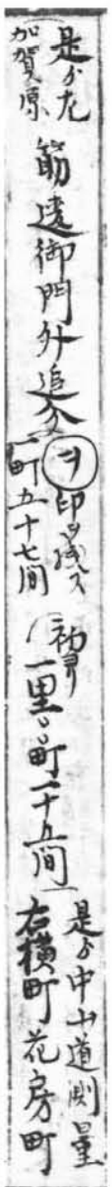
・**前田繁之助** … 図15には前田繁之亟とあるが、寛政重修諸家譜や武鑑等で確認したところでは『日記』の記載が正しい。前田繁之助長皓は千四百石の旗本で表高家衆である。江戸府内図上呈までに代替わりもない。

図 15 江戸実測図（南）に測量経路などを加筆

（左火消屋鋪　左横町、是より桜の馬場添　左聖堂　此辺昌平坂という（左聖堂通用門、同御成門、同御門、左横町、是より町家　湯島

横町　㋝印　三十四町一十八間（是より木曽街道へ一支横切、右横町湯島横町という　湯嶋本通りに出て横切畢る、㋛印を残す、此横切四十五間

又湯島横町　㋝　印始め　右御堀添を行く　左横町也　右湯島一丁目代地　左湯島横町　右昌平橋



（是より左加賀原　筋違御門外追分（㋕印を残す　一町五十七間（初より一里〇〇町一十五間（是より中山道測量　右横町花房町

・**火消屋敷**　…　十組あった定火消のうち、御茶ノ水の火消屋敷は五千石の旗本鍋島帯刀が定火消御役を務めていた。

・**聖堂**　…　『御府内備考』には「聖堂は古来の旧称なり。…寛政御再建の後、改て昌平阪学問所と号せらる」とある。五代将軍綱吉が儒学振興のため、元禄三年に上野忍岡の林家私邸の廟殿と家塾を湯島に移設して聖堂と総称した。寛政九年には幕府直轄の教学施設となり昌平坂学問所と称した。

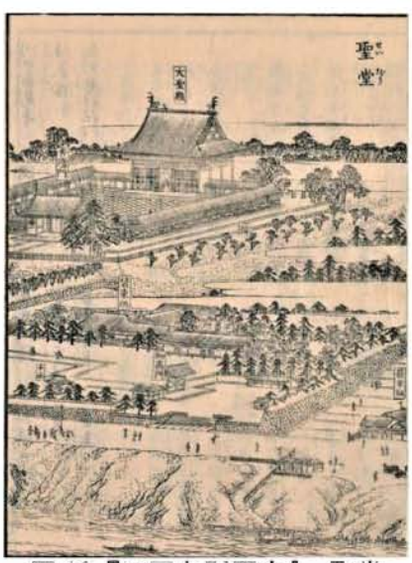


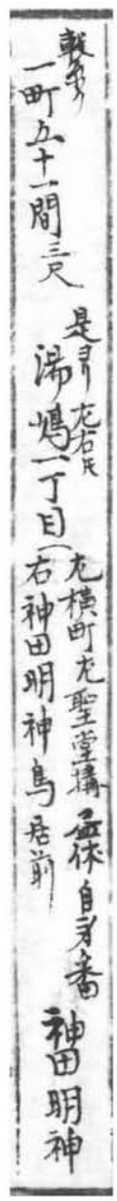
図16『江戸名所図会』　聖堂

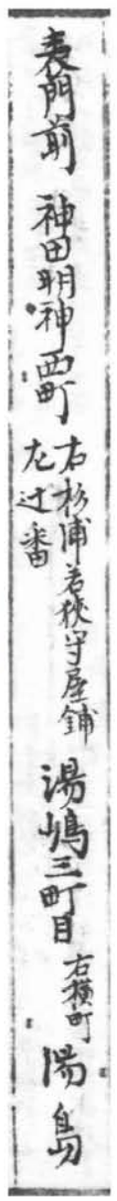
昌平坂、昌平橋の「昌平」は孔子の生地である曲阜の昌平郷による。

・**木曽街道**　…　中山道の俗称。

・**筋違御門**　…　日本橋を基点とする中山道や日光街道（日光道中）と、江戸城から出発する将軍の上野寛永寺への参詣路（御成道）や日光東照宮への参詣路（日光御成道、日光御成街道）は筋違御門で一旦合流し、図17の筋違御門外追分の㋕印を経て北上した。

図17 江戸実測図（南）に測量経路などを加筆





・**千住通日光御成道、中山道追分** … 図18のワ印で測量隊は中山道と日光御成道に沿って左手へ向かった。右折すると日光街道と上野寛永寺への御成道となる。『日記』では「千住通日光御成道」と記しているが、五街道の一つである日光街道は千住宿を最初の宿場としたが、脇往還である日光御成道は川口を経て幸手で日光街道に合流するので千住は通らない。千住通日光街道と寛永寺への御成道を一つに表記したのかもしれない。

・**昼休自身番** … 湯島一町目の『町方書上』によれば、間口九尺裏行四間半で火見櫓と半鐘があり、往還横町入口に所在した。

・**神田明神** … 神田明神の『神社書上』には「江戸総鎮守」と記され広く崇敬を集めるとともに、社地に楊弓場六軒、水茶屋十五軒とも記されており、繁華な場でもあった。

・**杉浦若狭守** … 杉浦若狭守正直は八千石の旗本で中奥御小性衆。代替わりがあり、図18では寄合衆の杉浦房次郎となった。

図18 江戸実測図（南）に測量経路などを加筆

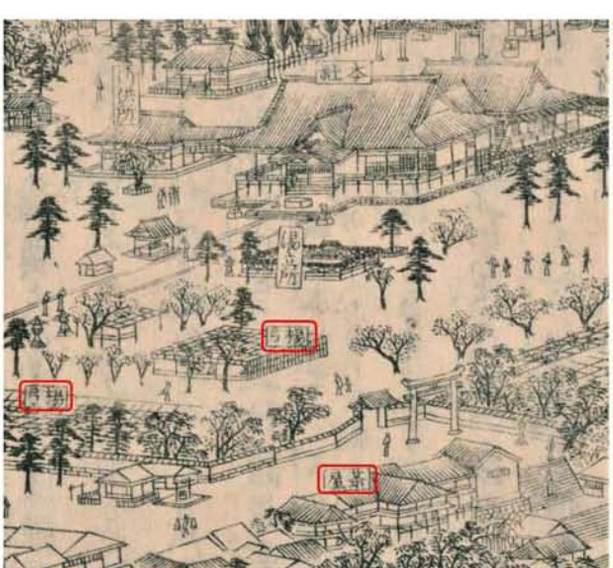


図19 『江戸名所図会』 神田明神社

図 20　江戸実測図（南）
測量経路などを加筆

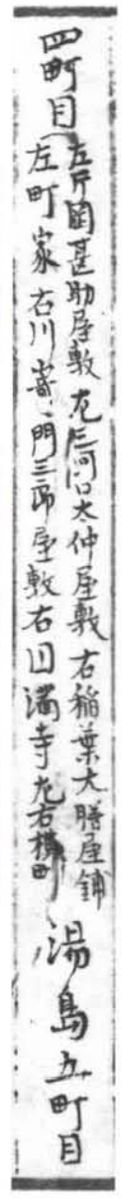


図 21　広重画帳　本郷

・**三河口太仲** …　三河口太忠輝昌の誤記。百俵四人扶持で各地の代官を務め、九州の天領十六万石余を管轄する西国郡代となった。代替わりがあり図20では三河口八蔵となった。

・**松平加賀守上屋鋪** …　加賀藩前田家の上屋敷。文政十年に将軍徳川家斉の娘溶姫を正室に迎えるため図21に描かれた御守殿を普請した。その際に火除地として本郷五、六町目の東側の町家を撤去した。図20では本郷通りの東側にも町家があるが、図21では御守殿門（赤門）の前に町家は見えない。

図 22 江戸切絵図 本郷湯島 に加筆
（嘉永 6 年尾張屋版）

左本多中務太輔下屋鋪（右御先手組屋敷、右加賀屋敷辻番所）

追分（右川口通日光御成街道 左中仙道、即木曽道中也）㋕印を残す、字追分という二十〇町二十一間

是より日光御成街道（仕越なり）

右ばかり追分町 右水戸殿中屋敷 左ばかり片町という 左共追分町

大番町 左右大番組屋鋪 左横町西善寺横町という（大番町左右大番組屋鋪 左横町西善寺横町という）

三ッ屋町（右伊東播摩守下屋敷、左西善寺 右光明寺、左照行寺、右勝林寺）

苗木縄手（左御先手組屋鋪、右法輪寺、右田沼玄蕃頭屋鋪、右永源寺、右浄心寺門前、右大林寺、右専西寺）

肴町 左組屋鋪 右町家

・**本多中務太輔下屋鋪** …『江戸実測図（南）』に描かれた範囲は図 20 の三河岡崎藩本多中務太輔忠顕の下屋敷までである。その先は、図 22 の『江戸切絵図 本郷湯島』に測量経路などを示した。

・**追分** … 駒込片町の『町方書上』によると、日本橋から一里の場所で、ここで中山道と日光御成道が分岐するため、里俗で追分と呼ぶ。駒込追分あるいは本郷追分ともいう。

・**是より日光御成街道仕越なり** … 翌八日は王子村から日光御成街道を江戸方面に南下して駒込追分までを、駒込追分からは中山道を北上して板橋宿までを測量する予定であった。図 22 の駒込追分㋕印から日光御成街道の㋖印を経て中山道の㋗印までの仕越測量は翌日の測量予定分を前日に済ませるものであった。

・**三ッ屋町、苗木縄手** … この地域は寺町を形成しており、『日記』にも寺院名が列記されているが誤記も多い。各寺院の住職が幕府に提出した駒込の『寺院書上』で確認したところでは、光明寺は浩妙寺、照行寺は正行寺、法輪寺は法林寺、永源寺は長元寺を誤記したものである。なお『江戸切絵図』の寺院名も誤記が多い。

・**苗木縄手** … 図 22 に「ウナキナワテ」という里俗名が記されている。『御府内備考』では駒込の総説で「鰻縄手」という項を立てその由来について諸説を検討している。植木屋が多かったので「植木縄手」が訛ったという説、道がなめにうねっているので「鰻縄手」となったという説等々を紹介し、「御苗木」と書くのが宜しいとしている。

（右十方寺　左右町家）　日光御成街道打止め㊐印を残す　八町〇九間

（是より中山道へ一支横切横町を行く　右横町四軒寺町という、左肴町、右

（浅嘉町、惣名俗に牧町という、中仙道に出て　㋟印を残す、此横切一町一十三間

図23に拡大

通計〆一里三十二町一十九間三尺　〆外合二町一十二間五尺

惣測〆一里三十四町三十二間二尺　八ッ半時廻帰宿

図23　『日記』拡大

図24　中山道分間延絵図

・**四軒寺町**　…　図22の四軒寺町に隣接して坂部貞兵衛と青木勝次郎の住む組屋敷があった。二人は御先手鉄砲組同心で暦局に出役。

・**㋟印**　…　図24は「中山道分間延絵図」から、この日の測量の終着点付近を拡大したものである。これは幕府の道中奉行所が五街道と脇街道の実態を把握するために、寛政十二年から七年をかけて作製し上呈した「五海道其外分間延絵図」の一部である。

【図版の出典】

・『日記』の図版は香取市立伊能忠敬記念館に架蔵されている写真帳による。

・『江戸実測図（南）』は国土地理院ウェブサイトの古地図コレクションによる。

・図1、3、7、10、11、14、16、19、21、22は国会図書館デジタルコレクションによる。

・図4、24は東京国立博物館デジタルコンテンツによる。

・図8は国立公文書館デジタルアーカイブによる。

【参考史料】

・『町方書上』『寺社書上』（文政八～十二年）
・『御府内備考』（文政十二年）
・『寛政重修諸家譜』（寛政十一年～文化九年）
・『江戸城御外郭御門絵図』（享保二年）
・『上水記』（寛政三年）
・『御府内往還其外沿革図書』『御府内場末往還其外沿革図書』（文化四年～安政五年）
・『中山道分間延絵図』（文化三年）
・『文化武鑑』（文化十一年・十三年）
・『江戸名所図会』（天保八年～）
・『江戸切絵図　本郷湯島』（嘉永六年）

【参考文献】

・『麹町区史』（１９３５）・『四谷区史』（１９３４）
・『牛込区史』（１９３０）・『本郷区史』（１９３７）
・『文京区史』（１９８１）
・『江戸建築叢話』大熊喜邦（１９４７）
・『都市　江戸に生きる』吉田伸之（２０１５）
岩波新書　日本近世史④
・『加賀殿再訪』東京大学総合研究博物館ＨＰ
・『歴史の道調査報告書　中山道』東京都教育庁生涯学習部文化課（１９９４）

伊能忠敬　周辺の人⑨

渡辺啓次郎慎　尾形慶助

前田　幸子

はじめに

『量地伝習録』の編著者渡辺慎（一七八六～一八三六）は忠敬の一番弟子であり忠敬の学統の承継者と目される人物である。会報第四九号から五四号安藤由紀子氏『和算の人脈』では書簡を通してその人生と人間性に光が当てられた。今回は『測量日記』の記述を加味して渡辺慎の経歴と業績を追ってみたいと思う。なお渡辺慎は多くの名前を持っていたが、本稿では便宜上、内弟子時代までは「尾形慶助」、幕臣となって以後は「渡辺慎」と表記する。また、名前については最後の頁の下欄にまとめたので参照いただきたい。

おいたち

○実父は会田算左衛門

尾形慶助は天明六年（一七八六）に生まれ、下総国香取神宮の神職で権介の職にあった尾形平馬の次男として育った。母は大川氏で、伊能家の経営監理者・大川治兵衛の親族（姉か妹）とみられている。ただし、実は慶助の実父は和算家として著名な会田算左衛門安明であった。このへんの事情は諸説あるが、慶助が生まれた翌年、幕府御普請役だった会田安明は「お代替り」（将軍交代を名目とするリストラ）により失職した。安明は四十一歳になっていたが、むしろそれを好機として幕臣をやめ、数学者として学問に専念することになったという。この時に母は慶助を連れて尾形平馬に嫁いだのか、あるいは慶助を平馬の養子として託したのかは不明である。慶助は尾形家の系譜（焼失）に養子ではなく実子のように記載されていたというから、尾形平馬とは単に名目だけの親子関係ではなかったと思われる。会田は利根川等の見分でたびたび佐原を訪れていたことが自伝『自在物談』に記されている。失職によって収入も佐原に行く機会もなくなったことが縁の切れ目になったのであろうか。会田安明には他に子供がなく、甥を養子にして跡継にしており、慶助は唯一人の実子だった。

以上、出生にまつわる事情が慶助の生涯に大きな影響をもっているので少し詳しく述べた。

○多重の縁故

忠敬と会田はおそらく利根川流域の堰普請で知り合ったとみられ、お互いに尊敬しあいながら相親しむ仲だった。また慶助は久保木清渕に就いて漢学を学んだと言われる。清渕は忠敬の漢学の師だったが、清渕は尾形平馬と幼友達であった。母方の大川治兵衛家は津宮に在り、久保木家と隣組だったという。いずれ慶助と忠敬は幾重にも縁故関係による絆と信頼関係で結ばれていた。忠敬が有能な若者を求め、実家の親は次男を江戸に出したいと思い、実父は実子を江戸に呼び寄せたいと思ったのではないだろうか。いずれ忠敬はこの優秀な少年を内弟子として預かることになった。

ちなみに『房総郷土研究』に会田算左衛門の門人として粟生の飯高惣兵衛金持の名がある。忠敬の畏友として知られる飯高惣兵衛尚寛との関係は不明だが、会田の人脈として記しておく。

香取神宮（上）楼門（下）本殿
寛永年間造営　香取神宮HP

第二次測量

（慶助十六歳）※年齢は数え年

享和元年（１８０１）四月二日、大川治兵衛らに見送られて第二次測量出立。慶助最初の測量行である。はじめは伊豆方面を測量、いったん江戸に戻り、六月十九日、房総半島へ向けて再出発した。

○慶助「覚」を発する

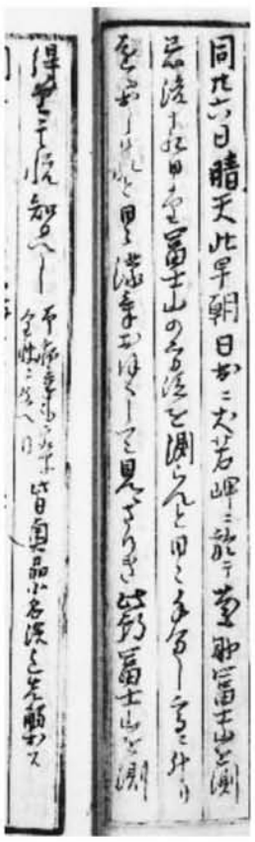
慶助を預かった忠敬は、慶助の関係者に配慮したようである。『九十九里の研究』所載の飯高惣兵衛尚寛の『日記』に忠敬が第二次測量で七月十五日に銚子浦まで出した先触が書き留められている。その触書には「測器、長持等を片貝村へ継送せよ」という内容の「覚」が付いているが、その発信者が「伊能勘解由内　尾形慶助」である、十六歳の若者の触書は異例であろう。しかもまだ測量経験三か月の見習いの身である。受け取った粟生の名主飯高惣兵衛は驚いたに違いない。そのせいかどうか測器は延着し、その夜は測量が出来なかった。『測量日記』には「測器村々継走延引、夜に入着に付不測量」とある。

○銚子で富士山を測る

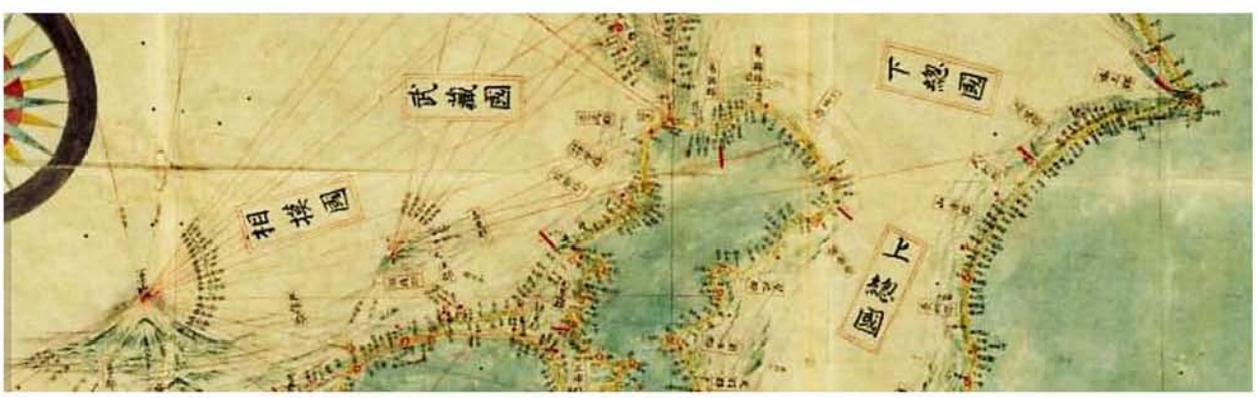
七月二十六日　この日の早朝、日の出の時刻に犬若岬で慶助が富士山の方位を測った。忠敬らは十九日に銚子に到着後、毎日手分けして高所に上り、遠出もしたが、濛気が多く富士は見えなかった。八日目のこの朝、やっと慶助が富士山の測量に成功した。「其悦知るべし」（慶助は―私も―どんなに嬉しいことか）と、慶助の手柄をわがことのように喜び、さらに「予が病気も最早全快に及べり」と注記した。忠敬は二十日からずっと病気だったが、その病気ももう治ったと言う。慶助への愛情がにじみ出ている一行である。富士山の方位観測も出来たし病気も快復したのでもはや逗留の必要はない。早速奥州小名浜まで先触を出し、翌朝出立した。

【測量日記】 享和元年（1801）七月二十六日

同　廿六日　晴天　此早朝、日出ニ犬若岬ニ於テ、慶助　富士山を測。着後、十九日より富士山の方位を測らんと日々手分し、高ニ昇り遠くへ出しけれど日々濛気おほくして見へざりき。此朝富士山を測得たり。その悦知るべし（予病気も最早全快に及べり）　此日奥州小名浜迄先触出ス。



『日本沿海分間図』　伊能勘解由　文化元年（1804）
国立国会図書館蔵



○雪中、下北の大難所を測る

十月下旬、下北はすでに厳冬。伊能隊は時に駕籠の戸障子が吹き飛ぶほどの大吹雪の中を進んだ。

十月二十一日、佐井村から手分けして慶助は宗平とともに大難所の西海岸を測った。長後村、牛滝村、脇沢村、と下北半島の西岸「まさかりの刃」をぐるりと廻り、柄の付け根あたりに位置する田名部町へと至る経路であった。

案内役の人足たちは若者二人が見慣れない測量機器を使い、雪を踏み分けて測量するのを驚きの目で見ていたのではないだろうか。佐井は蝦夷地への渡航地で、文化四年の蝦夷地巡察の際には堀田摂津守もここから渡海した。

『大日本國東山道奥州驛路圖』第五巻　「佐井湊」戸百四十五
秦檍麻呂（村上嶋之允）寛政十二年(1800)　国立国会図書館蔵

第三次測量　（十七歳）享和二年（１８０２）

○松野茂右衛門へ書状を出す

慶助の二回目の測量行である。『測量日記』は例によって淡々と事務的な内容が綴られている。その中で少々目を引く記述があるので紹介したい。八月十一日の項に「青森迄測ル。郡蔵、秀蔵、慶助、松野茂右衛門へ書状を遣ス」「松野茂右衛門来ル」とあり、慶助ら若者三人が津軽藩士・松野茂右衛門に手紙を出しているのである。この部分は『千葉縣史料　伊能忠敬測量日記』では「午後、松野茂右衛門殿油川旅先へ来ル。一同ニ馬ニ而青森へ行、山鹿氏を尋問、暮ニ帰ル」とより詳細な記述になっている。両者を併せると、「慶助らが松野に手紙を出した。止宿にやって来た松野に同伴して一同馬に乗って青森の山鹿八郎左衛門を訪ね、日暮れに帰宿した」ということのようである。日記の後段に「測量の者」も一緒に青森へ来るように、という山鹿の仰せがあった旨の記述がある。また、渋川家に遺された忠敬の書簡では、青森で山鹿、松野との対顔が期待されていた。しかし実際には事情により伊能隊は油川泊まりとなってしまった。周知のとおり松野は旧知の津軽藩士、同じく山鹿八郎左衛門は軍学者として著名な山鹿素行の子孫である。慶助らは楽しみにしていた山鹿との対面を叶えるべく、松野あてに取次依頼の書状を出したのだろうか。事情は不明だが、測量行中の珍しい逸話である。

『測量日記』八月十一日

第四次測量　（十八歳）享和三年（１８０３）

○修業の日々

慶助の三回目の測量行である。この回では駿府城下や名古屋城下で量程車を使い、渥美湾、敦賀湾、七尾湾などでは引縄測量を行っている。

逗留時には旅宿で地図を仕立てる場面がしばしば日記に現れる。慶助はこれらの経験を通して場所に適合した各種の測量技法や地図仕立の技術を日々磨いていたようである。

○慶助、麻疹重篤

第四次の測量行中、伊能隊は沿道で流行中の麻疹（はしか）禍に遭遇した。五月十六日、大垣のあたりから次々感染、六月十二日に慶助も罹患した。若い隊員たちはみな感染したが、なかでも慶助が最も重かったとみられる。麻疹禍はひと月以上続いて、六月二十三日にようやく全員快復し、手分測量が復活した。

○暦局へ出頭する

八月九日、糸魚川で事件が起き、内弟子たちに「がさつ又は賄賂等の儀」があったのではないかという疑いがかけられた。帰途の道中で忠敬は弁明書を書き、帰府後の十月七日、平山郡蔵、村津大兄、秀蔵、慶助、久兵衛を連れて暦局へ出頭した。弁明書には「郡蔵、秀蔵、慶助儀は兼て御堅知のもの共」とあり、至時と内弟子はかねて面識があったことがわかる。しかし、この出頭がおそらく至時との最後の対面となった。この時期、至時は病身をおして『ラランデ暦書』を解読している最中で、年末までに『ラランデ暦書管見』十余巻を著したが、出頭から三か月後の文化元年正月五日、四十一歳で死去した。学問に殉じた凄絶な人生だった。

○破門され郷里へ帰る

第四次測量のあと、十九歳の慶助は「勘当」されて「失業」し、「浪人」となって郷里の香取に帰っていたようである。忠敬は景保に正式の「破門届」を提出していたともいう。事情は不明だが、後年の忠敬書簡に「顕二郎、子年（文化元年）浪人以来、学問にだけは精を出し」とあるので、学問に熱中して地図業務を怠ったことが原因だったのではないかと推測される。

第五次測量　（二十歳）文化二年（１８０５）～

○勘当免除、測量現場へ駆けつける

第五次測量では周知のように下役の市野金助と門谷清次郎が途中で帰府してしまい、人手不足に陥った。困った忠敬は窮余の一策として下僕の伊兵衛を急遽、侍に仕立て、「佐藤」と称して測量を手伝わせることにした。この「ニセ侍」は結構役に立ったようだが、それでも追いつかず、忠敬は天文方に「増員願い」の書状を書いた。その文面に「勘当差免し圭助一人計ニ仕度候」とあり、慶助の勘当を許して測量に従事させたいと嘆願する内容であった。この願いは聞き届けられ、慶助は瀬戸内の測量現場へ門倉隼太とともにやってきて、測量隊に合流した。呉の郷土資料『浦島測量之圖』には「尾形顕次郎、門倉隼太　此両人、三月十一日夜、三ノ瀬ニ御着。十二日より御一緒ニ御廻浦」とある。一方、『測量日記』には「十二日　未明ニ

『測量日記』三月十二日

門倉隼太、尾形顕次郎着」とある（※『千葉縣史料　伊能忠敬測量日記』は「香取顕治郎（香取在住の顕治郎）着」と記す。いずれ、二人は遠路はるばる駆け付け、真夜中に到着した。この夜は「晴天測量」とあるので、折から天測中の忠敬が二人を出迎えたのかもしれない。二人はその日から早速測量に従事した。

○謹慎と四日後の免除

この測量中、数々の不行跡があったとして、帰府後に内弟子の処分があった。郡蔵、寛平は破門、慶助、秀蔵、門倉は謹慎を命じられた。『江戸日記』文化三年十二月十五日に「郡蔵、寛平、長暇。秀蔵、隼太、顕二慎み」と処分の内容が記されている。しかし十二月十九日には景保から役所へ呼び出され、「謹慎の儀、ご免仰せ付けられ候」と申し渡された。形だけの処分だったらしく、僅か四日間の謹慎だった。

漢学者への道

○学者をめざす（十九歳～二六歳）

慶助はもともと文系で、漢学者を目指していたようである。まだ幼い忠誨に趣味で論語を講義していたという逸話が残っているから、教育者の資質があったのだろう。この頃、儒学者の大田錦城に師事していたことが書簡から知られている。錦城に傾倒して金銭も貢いでいたようである。忠敬は書簡で、慶助が「子年（文化元年）浪人以来、学問にだけは精を出し、夜も寝ないで勉強に明け暮れているが地図の仕事は怠けがち」だと嘆いている。このあと文化五年から文化八年までの三年間余りの期間は、測量従事も断って勉強に専念していた。

○立志伝中の人々（二十二歳）

文化四年八月十九日、永代橋が崩落した日のことについては会報第六八号で紹介した。白木屋の桟敷に祭り見物に集まった顔ぶれは豪華である。佐原の隠居から幕臣になった忠敬をはじめ、関流との数学論争で世間の耳目を集めている会田安明、町人ながら暦局に出仕し大阪で大評判となった間重富、貧しい定番同心から旗本になった亡き高橋至時の子・景保。慶助の周囲には異例の出世を遂げた実例が大勢いた。実力があれば身分を超えて認められる。若い慶助は大いに刺激をうけたであろう。

○尾形退去（二十二歳）

永代橋の祭り見物から二週間ほどたった文化四年九月三日の『江戸日記』に「三日　晴天　尾形退去」と、唐突に尾形が出て行ったことが記されている。慶助はついに忠敬の隠宅を出て、香取の実家に帰ってしまった。その後の第六次の四国測量の誘いも、坂部貞兵衛に自分の一存で「病身」だと言って断ってしまった。それを知った忠敬は「高慢の一刻了見」と評して嘆いている。

第六次測量　不参加（慶助見送り、出迎えする）

第七次測量　不参加

第八次測量（二十六歳）文化八年（１８１１）～

○測量への復帰

数年間の猛勉強のあと、慶助は決断したらしい。学者として身を立てることを諦めて測量の道に戻ることにしたのである。現代の資格試験と同様、どこかの時点で見切りがついてくるのであろう。以後は迷いを捨てて測量に精を出すようになる。測量作業だけでなく、高齢となった忠敬の右腕としても活躍したようだ。

○夜間は助かる

これまで測量事業の世話人を担当していた大川治兵衛が文化七年に亡くなり、代りに伊能家に復帰した妙薫が世話人を務めることになった。その妙薫に宛てた手紙で忠敬は「測量（天測）については尾形が丹精込めて務めてくれ、夜分などは大いに助かる」と、高齢になった自身の代りをつとめてくれることを喜んでいる。

○貞兵衛の代役

また「坂部病死につき、御用向きに支障が出るのではと心配したが、幸い尾形謙治を連れてきたので、坂部の役を申し付けたところ懸命に働き、十分間に合っている」と書いている。非常に有能、なおかつ対人関係の達人で統率力抜群だったらしい坂部貞兵衛の代わりが務まるほど、慶助は成長を遂げていた。

○保木敬蔵をしごく

測量初参加の保木敬蔵は近眼・悪筆・算術不得手という問題児であったが、慶助が遠慮なく厳重に仕込んで一人前になった、と妙薫に報告している。人に教えるのは上手だったようだ。

○薩摩入り大いに恐る

慶助は妙薫に「肥後国から薩摩に入った時は出迎えが、何とも厳重な構えで大変恐ろしく思われた」と書き送った。悩みや愚痴を語る手紙など、世田谷伊能家に伝存する慶助の書簡はすべて妙薫宛である。文政五年七月二十五日、慶助が長崎に出立した一ヶ月後、妙薫は死去した。

第九次測量　不参加　第十次と時期が重複

幕臣・渡辺慎となる

○渡辺氏へ入夫（三十歳）文化十二年（１８１５）

第十次測量（江戸府内）の時期、慶助は実父と同じ御普請役の渡辺氏の養子になった。

『江戸日記』文化十二年七月二十八日「尾形謙次郎義牛込神楽坂御普請役渡辺右衛門方へ養子に取極今十日引越申候」とあり、養子縁組が決まったことが記されている。数日前の二十四日に会田が珍しく忠敬を訪ねてきていることから、この縁談は会田が仲介したのではないかと言われる。

『伊能忠敬関係文書』に文化十二年八月二十四日「渡辺（尾形）啓次郎宛」貴公御養子お祝いという飯高吉太郎（飯高惣兵衛君露）（※忠敬の畏友・飯高惣兵衛尚寛の孫）の書簡がみえることから、八月に養子になったと推定されている。

入夫から半年ほどたった頃、慎は幕臣となる。『江戸日記』文化十三年二月三日「渡辺啓次郎測量御用出役被仰せ付候事　渡辺丈（太ヵ）之助来る。啓次郎召連れ高橋作左衛門殿へ引渡す」とある。慶助は幕臣・渡辺慎となって天文方・高橋役所に出役を仰せ付けられた。養父の渡辺太之助も御普請役として現役なので、渡辺家は収入が二人分となった。持参金については不明である。

第十次測量（三十～三十一歳）文化十二年～

天文方となった慎は、江戸府内測量に従事した。江戸実測図は文化十三年十月に測量を終了、翌十四年九月に作図が完了、『江戸府内実測図』として上呈した。景保の序文には従事者として「伊能忠敬、下河辺、今泉、永井、坂部（弘）、門谷、渡辺慎等」とある。忠敬は実測作業はしなかったが、測量の責任者であり、地図の撰者であった。

近親者との別れ

○文化十四年は大悪年（三十二歳～三十三歳）

文化十四年、慎は「当年は私大悪年と奉存候」と妙薫に書き送った。慎はこの年、次々と身内の死に見舞われ、実母大川氏、養父渡辺太之助、実父会田算左衛門を喪った。養父の死により慎は親を継いで普請役を仰せつけられ、天文方としての地図作業は府内測量の作図の中途で「引取」となり、代わりに内弟子橋口郁三郎が務めることになった。続いて十月には実父会田安明がやはり急な病で死去した。没後、弟子たちによって浅草寺境内に算子塚が建立された。そこには会田の長男の次に渡辺啓次郎慎の名前が刻まれている。なお、会田の蔵書の普請関係の書物が全く見当たらないのは、慎が引き取ったからではないかとみられている。御普請役となった慎は長崎、京都の宇治橋改修、越後と各地に出役している。測量隊員だった時代を含め、旅から旅への人生だった。

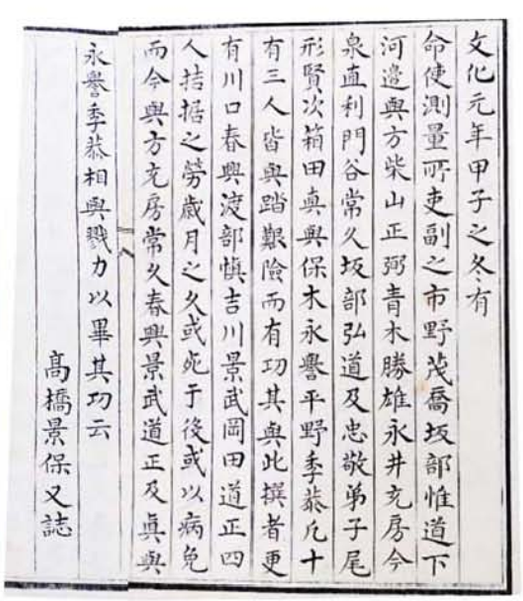
○忠敬の死

明けて文化十五年（文政元年、四月二十二日改元）四月十三日、実父の死から半年後に忠敬が亡くなった。忠敬は死に臨んで慎に伊能流の測量法を伝授することを遺嘱した。その遺意により編述したのが『伊能東河先生流　量地伝習録』である。

浅草寺　算子塚

『大日本沿海輿地全図』完成

文政四年（一八二一）『大日本沿海輿地全図』が完成し、七月十五日、上呈された。寛政十三年（一八〇〇）に第一次測量が開始されてから二〇年余の歳月が経っている。地図の附録『輿地実測録』には測量事業および地図作成作業に携わった人々の名前を挙げて慰労し、功績を讃えた景保の一文が添えられている。計十七人の名前の中で慎は測量従事者としては内弟子時代の尾形賢次の名前で、地図作成者としては幕臣になってからの渡部慎の名前で、重複して記されている。慎は十七人のなかでも長年にわたり測量、作図の両方に主力として携わってきた。測量技術、作図技術の両方に精通した渡辺慎はまさに忠敬の一番弟子というにふさわしい。忠敬が臨終に際し委嘱すべき相手は、子飼いの門人であり、伊能測量事業を知り尽くしたこの人をおいてほかになかったと理解される。



文化元年甲子之冬有
命使測量所吏副之市野茂喬坂部惟道下
河邊與方柴山正弼青木勝雄永井充房今
泉直利門谷常久坂部弘道及忠敬弟子尾
形賢次箱田真與保木永譽平野季恭凡十
有三人皆與踏艱險而有功其與此撰者更
有川口春與渡部慎吉川景武岡田道正四
人拮据之勞歲月之久或死于役或以病免
而今與方充房常久春與景武道正及真與
永譽季恭相與戮力以畢其功云
高橋景保又誌

『輿地実測録』　国立公文書館蔵

おわりに

○幸國寺の墓

渡辺慎の墓は大谷亮吉『伊能忠敬』に「天保七年十月、五十一歳を以て歿し、江戸牛込光國寺（幸國寺なるべし）に葬れり」とある。江戸切絵図「市ヶ谷牛込」で見ると、図の右下、「根来百人組」の右肩に「幸國寺」がある。現在の行きかたは地下鉄「牛込柳町」駅から徒歩二分、寺の門にたどり着いたら切絵図そのままの参道を入る。日蓮宗正定山幸國寺は慶長七年創建の古刹。樹齢五百年以上という二本の大銀杏は加藤清正公お手植えとも伝わる。境内を回ると、「丸に渡辺星」の家紋が彫られた渡辺家の墓が目につく。江戸時代の墓石群もあるが、渡辺慎の墓かどうか分からない。お寺の話では「戦災で寺は墓石もろとも焼け、過去帳も焼失しました。境内の樹齢六百年の大銀杏とその周辺の墓だけが残りました。昔は個人墓だったのでもとのように復元するのは困難です」とのことだった。銀杏が火を防ぐというのは本当なのだなと感心し、渡辺慎も見たであろう大銀杏を見上げて帰ってきた。

幸國寺墓地　　大銀杏付近

○御普請役の系譜

渡辺慎について調べていると「御普請役　渡辺啓之助」という人物に行き当たった。安政元年三月、日米和親条約により函館開港が決まった直後、御勘定吟味役村垣範正、蘭学者武田斐三郎らと共に松前に派遣されている。また同年十二月には同名の人物が「ヘダ号」建造に関し、南伊豆の戸田に派遣されている。「渡辺啓之助」は御普請役として重要な現場で活躍しているようである。この人物の詳細は不明だが、名前から推察して渡辺啓次郎の継嗣である可能性がある。もしそうならば、会田安明、渡辺太之助以来、三代にわたる御普請役として近世日本の土木建築をはじめ、実測地図、和算にも多大な寄与をした科学技術者の系譜ということになる。いずれコロナ禍が終息したら、図書館に出かけて調べてみたい。（了）

【参考文献】

『伊能忠敬』　大谷亮吉　岩波書店
『伊能忠敬書状　千葉県史料　近世篇』　千葉県
『九十九里の研究』　古川　力　崙書房
『江戸幕府編纂物』　福井　保　雄松堂
『自在物談』　会田安明著　平山諦・松岡元久
『房総郷土研究』　三上義夫　複製版　青史社
『館報　入船山』第七号　呉市入船山記念館
『伊能忠敬研究』第49号～54号　安藤由紀子
『伊能忠敬研究』第89号　戸村茂昭・河崎倫代

【画像】『測量日記』　香取市伊能忠敬記念館蔵

◇渡辺慎／尾形慶助の名前について◇

渡辺慎はたくさんの名前を持つ、不思議な人とされてきた。しかし諸史料にみえる名前を時系列で並べてみると、意外にも整然とした秩序がみられる。つまり年齢によって改名しているのである。『測量日記』『江戸日記』や書簡類も、原則的にその時々の改名に従っている。姓は入夫前は尾形、入夫後は渡辺。武士となって以後は一貫して、通り名（通称）は啓次郎、諱（実名）は慎、字（あざな）は子言と名乗っている。

『測量日記』は、第二次測量から第四次測量は全て「慶助」と名前のみで表記し、第五次で測量が幕府事業となって以降は「尾形」と姓のみで表記している。

忠敬は公式文書には本名の「尾形顕次郎」等の名を記すので、測量先の地域文書には本名で記録されていることが多い。しかし日常的には「顕治」「顕二」等の略称を多用している。特に呼び名の「ケイスケ」には様々な字があてられ、混乱のもととなっている。

	（年　齢）	（本名）	（略称・通称）
◇	～十九歳	慶助（啓助、圭助、敬助）	
◇二〇～二十九歳		顕次郎（顕治、顕次、顕二）	
◇二十九～三〇歳		謙次郎（謙治、謙次）	
◇三〇歳～（渡辺）		啓次郎（啓次、啓二）	

※「次」と「二」は互用される。慶助は次男。

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第二十七回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修　渡辺一郎　　編著　井上辰男

【第八次測量】（九州第二次）平戸～壱岐～対馬　自　文化10年3月29日　至　文化10年5月23日

【本隊】

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
文化10年3月	（1813）					
29	（29）	対馬府中城下横町	長崎県対馬市	塩津庄右衛門 八木喜右衛門 竜井与八郎	江戸行書状を平戸迄遣す。府中城下逗留測。【坂部他四名】府中城下浜町番所脇より右山沿海測、波戸に繋、恵比須町大筒番所、番所脇、泊船庵道、有明山行小路を歴て、久田村、久田川尻、延命寺鼻、虎崎、四ッ穴鼻を歴て字下ノ口鼻に打止。【伊能他四名】浜町番所脇より左山沿海測、字三軒屋、湊波戸三筋、本川尻、字浜蔵、名所立亀岩、字矢良崎、字遠見崎、遠見番所並に塩硝蔵あり。相島渡口、字小阿津、字大阿津浦、阿津川尻、南室村、南室島渡口、小浦村、小浦島渡口を歴て小浦島一周測。外に相島片測、南室島一周測。	一九二
30	（30）	同	同	同	逗留測。【伊能他四名】小浦村小浦島渡口より字曲崎、波戸崎、琴頼浦、ヤブサメ浦、大梶鼻、根緒村、薬研ヶ浦、大梶浦、赤崎鼻、烏帽子岩を歴て根緒村人家前迄測。下ノ根緒島一周測。それより乗船帰宿。【坂部他四名】久田村字下ノ口鼻より字長崎、字升形、左烏帽子岩（周十間計）、字大崎、字洲鼻岩、尾浦村、字梶ノ穴、字雨ヶ崎、安神村、輪島渡口を歴て字竜尾崎にて沿海打止。輪島一周。それより乗船帰宿。	一九二
文化10年4月	（1813）					
1	（5．1）	小休 対馬府中城下横町	長崎県対馬市	朝鮮館 塩津庄右衛門 八木喜右衛門 竜井与八郎	府中城下市中測。浜町海辺番所脇より左に以酊庵あり。大町、国分町、大名小路、横町を歴て測所へ繋ぐ。横町より本町通大手橋を渡、下ノ町、片側右本川添、左裏町小路、左浜蔵横町を歴て字浜蔵に繋。又大名小路より黒門通古館へ打上。黒門通、古館、黒門あり。大手本門、三階なり。左奥里通と云門あり、厩橋、金石川上也。左厩あり、右古館を金石館と云。万松院橋、右に角蔵門、左に東照宮御宮あり。別当天台宗鐘碧山万松院門前打止。又大名小路より左右に家老屋敷、右今屋敷通、右に学校、右横町山下通を歴て朝鮮客館へ打上。本川遊月橋、左右川添片側町、右今屋敷小路、左大手橋町、左馬繋場天道茂町、左は片側町、右は両側町。左醴泉院町、右田渕町、朝鮮館、冠木門、中門前打止。又大名小路より中式内宇努刀神社へ打上げ華又大名小路より左宮ノ下横町、右一ノ川横町、右一ノ川裏通、右中村横町、左宮ノ下通、右横町本戸小路、行当て中笠渕町、右荒神橋通、左宮谷通、宮谷橋、右に横町、右に番所、左横町、右横町、下中桁通、左氏江小路、左下裏町、小学橋、左下宮谷通、右小学裏通、左横町、宮谷町、馬場崎橋、字桜ノ馬場、左右屋敷、街道中に桜並木多、本川の流あり。大手前を一ノ門と云。桜並木終て木戸あり、右不開門なり、外構石垣下を歩行、左佐須道、右阿津道追分、出張番所脇打止。	一九二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
2 *	（　2）	鶏知村	同　対馬市	神宮直右衛門 新具松五郎	府中城下出立、大手分。【坂部他四名】西ノ海辺を測。【伊能他四名】左須・阿津追分より阿津道を測る。右に冠木門、左字下屋敷、城山に添、右に裏門、字滝ケサヘ（当国にては谷をサヘと云）、阿津川を渡り字阿津迄測る。それより阿津川尻に繋ぐ。又字阿津より大船越道を測。南室村、小浦村、字根緒坂、根緒村、鶏知村字高浜を歴て、洲藻道、大船越道追分、鶏知川渡り大船越道打止。此より式内住吉神社へ打上、社前迄測る。又追分より洲藻道を測。止宿入口より止宿打上。	一九二
3 *	（　3）	大船越村	同　対馬市	山田彦左衛門 伊吉	上根緒島一周測。、外に郷ノ島遠測。根緒村字根緒浜より式内和多都美神社へ打上、社前迄測る。又根緒浜より鶏知村、鶏知川尻を歴て烈風波高海辺測量難成打止浜印を残し街道へ打出、字高浜に繋。大船越道打止より順検使街道測。字樽ノ浜を歴て海辺へ打下、入江奥字樽ノ浜迄測る。又字樽ノ浜より字椎坂峠、大船越村街道近道追分、字小皿坂、字小田山を歴て街道海辺追分迄測る。又街道海辺追分より右山に沿海測、右に番所あり、大船越村人家の間、沿海打止。測所打上。	一九二
4 *	昼休	小船越村	同　対馬市	郷士早田左仲	逗留測。大船越村より順検使街道測、久須保村字大曽根、右久須保道、左右久須保村、左右海辺へ下る四辻追分を歴て右海辺へ打下、海辺字万ゼキ迄測る。又四辻追分より左海辺へ打下入江奥、字瓢箪石迄測る。又四辻追分より街道測、又左海辺字新ノ浦へ打下、街道に戻り、右海辺字榎浜へ出る、直に山の間へ入、又右の海辺字木下へ打下。街道に戻り、左右犬吠村、一里塚あり、右海辺字袋浜へ出る。又戻り、左右大山村、大山村小舟越村追分に至り、右海辺入江奥字下積に出。又直に山の間に入、小船越村、（左に名所安佐治山、今俗云大山岳）、右海辺入江奥字志土路浦へ出。此より海辺、街道両用、左山に海辺測、海辺街道追分。此より街道測、左に大山村道、右を海辺に小船越村人家前へ出、街道打止。此より横切、式内社前を歴て式内阿麻氐留神社へ打上。式内社前より横切向海入江奥、字西ノ越手へ出、入江口、字関ノ本にて打止。それより乗船帰宿。	一九二
5 *	（　5）	同	同	同	逗留測。大舟越村より右山沿海測、字古里浦、字六ッ呂鼻、字久須保鼻、字久須保浦、字久須保浦鼻、字太蔵ケ浦、久須保村迄測る。此より字瓢箪石に繋。又久須保村より沿海測、字新ノ浦に繋。又大船越村字黒崎浦、字玉調鼻、字小敷岩、又久須保村、字大塚浦、字玉調崎迄測る。大山村字玉調浦（名所）、又字玉調崎より字五治郎ケ浦鼻、沿海打止。それより乗船帰宿。【小手分】大船越村字小田山より右山沿海逆測、字堀切瀬戸、鶏知村字大田崎、字鶏知のハシ鼻、字ネソノ浦、字ネソ崎、字高浜に繋逆測終。又大船越村堀切瀬戸東より沿海順測、字綱掛崎にて打止。	一九二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
6 *	（ 6）	同	同	同	逗留測。大山村字五次郎浦鼻より右山沿海測、大船越村一印、字畳石鼻、六郎島渡り口を歴て六郎島一周測。又渡り口より沿海測、字中小野瀬、字西小野瀬、炭焼浦を歴て字狭瀬戸沿海打止。【小手分】尾形他2名、大船越村字小田山より内海左山逆測、字角兵衛浜を歴て、巡順検使街道、字行右衛門開に繋。又字角兵衛浜より沿海測、字千鳥鼻、字長浦崎を歴て字ハサマ浦迄測る。此より向海へ山越横切、鹿焼浦へ出。又字ハサマ浦より沿海測、字豆ノユウド鼻、字シリエ崎、字池尻鼻、字鹿焼鼻を歴て字鹿焼浦に繋、沿海終。恒星測定	一九二
7 *	（ 7）	久須保村	同 対馬市	小島吉兵衛 小島三之助 黒岩嘉兵衛	久須保村字万積浦より右山内海入江測、久須保村測所を歴て字干切、（恵美須島片測、瀬続細長島遠測）、字鵜瀬鼻、緒方村枝入江字備後浦、字鷲ノ巣崎にて小手分と合測。【小手分】大船越村字綱掛崎より左山沿海順測、字紺青浜、字紺青岳、緒方村、字烏帽子瀬鼻、字折瀬鼻、字御崎浦、字見通鼻、漁猟緒方村字モドノ浦、字クチモノ浦、字鷲巣崎にて順逆両手合測。	一九二
8 *	（ 8）	鴨居瀬村	同 対馬市	小田加内 中島甚吉	乗船、鴨居瀬村持赤島を測。字小瀬戸より左山に測、ミサゴ瀬渡口、字箙崎、東風泊島渡口、字黒浦を歴て今朝の字小瀬戸に繋終。馬子島片測、ミサゴ瀬片測、中島一周測、八天島片測、東風泊島一周測。【小手分】鴨居瀬村持黒島を測。字波石崎幟より右山に測、字鉾崎、字黒島浜、字縊切、字黒島崎、字縊切崎、字中島鼻、字坊主畑浜を歴て初幟に繋終。木星と午中太陽測定	一九二
9 *	（ 9）	同	同	同	逗留測。久須保村字万積浦より左山沿海測、字榎浜に繋、字木下浜に繋、字池ノ浦、字笠瀬崎幟に繋。犬吠村字袋浜に繋、字黒崎浦、字離崎、大山村字下積、入江奥街道より打下残に繋。又字下積より沿海測、字入道浦、字長崎を歴て字浦山鼻にて沿海終。それより乗船、帰宿。【小手分】鴨居瀬村持沖島測。字竹崎幟より右山に測、字甚兵衛浜、字小島浜、字カワノコブ北浜、字長波石崎、字鯨浦、字乗越浦、字マブシ浦片浦を歴て字アシミ泊鼻迄測る。住吉瀬戸へ渡をとる、鴨居瀬村字舟浦コッバ石。又字アシミ泊鼻より字アシミ泊、字御手洗浦を歴て字住吉瀬戸鼻迄測る。住吉瀬戸の狭き所瀬戸巾セ十一間、鴨居瀬村字下り松。又字住吉瀬戸鼻より字ホソガ浦、字ミオテ浦を歴て字大崎打止。	一九二
10 *	（ 10）	同	同	同	逗留測。乗船、犬吠村字浦山鼻より沿海測、一印を歴て山越横切、向海入江奥小船越村字カセノ浦へ出る。又一印より字石畑浦、字五輪、字国崎、小船越村字カセノ浦に繋。大仏島渡口を歴て大仏島一周測。又渡口より小仏島に繋、小仏島一周岩石、それより字畑崎を歴て出鼻一周測。又畑崎より字畑ノ浦を歴て字大崎沿海打止。【小手分】沖島、字大崎より字城木内ノ鼻、字獅子落崎、字七ツ浦、字大瀬戸口鼻、字フスマノ崎、此より赤島瀬戸になる。字岩屋浦浜、字セイセウ鼻（此鼻の上にセイセウ夷の祠あり）、字深浦、字深浦ノ市場付ノ鼻、字窓島鼻、赤島より立て測に繋、字大竹谷サク鼻、字大竹谷浜、字仁田浦を歴て字白浜崎打止。	一九二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
11 *	（11）	同	同	同	逗留測。乗船、小船越村字大崎より沿海入江測、字志土路に繋。此より海辺も街道も同様四日街道測にて済。街道、海辺追分より沿海測、字江尻鼻を歴て小船越村人家前街道に繋。此より海辺街道両用。街道追分を歴て沿海測、字トンノ浦、カツマ島へ渡、鴨居瀬村字大鹿浦に繋。字大鹿浦の出鼻よりイヤ島へ渡、字小鹿浦、字赤坂浦、字赤坂崎、蛇島へ渡を歴て鴨居瀬村測所迄測る。此より字宮崎、字新鴨居瀬、字長崎鼻、長手浦、字長手崎、字細浦、字モロノ首を歴てモロノ首鼻を回字モロノ首に繋終。【小手分】沖島字白浜崎より字竹崎に繋終。それより小島々を測。鴨居瀬村持鏡島、北隠島、唐船島一周測、駒島片測、裸島遠測、仁兵衛島、海賊島（海徳島）、蛇島、経島（寺島）、イヤ島、小舟越持カツマ島一周測。	一九二
12 *	（12）	横浦村	同　対馬市	横瀬源治 斎藤吉右衛門	鴨居瀬村字モロ首より沿海測、一印を歴て山越横切向海辺、字細浦に繋。又一印より字飛渡浦を歴て山越横切向海辺、字カジラ焼へ出る。又字飛渡浦より字弁才天崎（弁才天社あり）を歴て字カジラ焼に繋、字烏水、字ウシキ崎を歴て字船浦コツパ石に繋。此所沖ノ島の間瀬戸、字住吉瀬戸と云。和多都美神社前にて舟中小休。字下り松に繋。此所瀬戸巾至て狭。海底に紫色の草あり、汐満には黒色、汐干には紫色なり。よって此所の字紫瀬戸とも云。字コウサク浦、字茶木平を歴て山越横切向海辺、字ヲゴウサク浦へ出。又字茶木平よりイ印を歴て山越横切向海辺、字大丸浦へ出。又イ印初、右に猪島あり、字大丸鼻を歴て字大丸浦に繋。字ヲゴウサク浦に繋、字古越鼻、字寺越浜、鴨居瀬村、芦ノ村界沿海打止。此より小船越村迄横切、字寺越、小船越村、曹洞宗嶺南山梅林寺を歴て小船越村人家前、街道海辺追分に繋。 【小手分】横浦村字ミセ崎、滝ノ下より干切島へ渡り一周測。又ミセ崎より沿海測、字東浜、字ヲヤヂガ島鼻、字ヲテドノ浜、字ホウエンノ鼻、大裸、小裸島遠測、字亀甲浜、字観音鼻（大難所）、字風呂浜（絶壁下に黒岩二ッ相対、夫を風呂岩と云）、字長崎、字タモテ鼻を歴て的島一周測。又タモテノ鼻より字クタンテノ浜、字星ケ崎浜、字鯨場崎、字鯨浦浜、字大羽浜を歴て字大羽ノカゲ浦、沿海打止。江戸より書状を持来る。	一九二
13 *	（13）	同	同	同	大風雨逗留。	一九二
14 *	（14）	同	同	同	逗留測。【今泉他三名】横浦村入江より山越横切、字見世越峠、向海辺入江奥、字見世浜へ出。それより左山沿海測、字立場越浜、字フコウ浦、字西浦、字坊主畑、字ミセ崎滝ノ下、干切島渡口に繋終る。【尾形】鑓川村へ越て十五日木小星食の支度。恒星測定	一九二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
15 ＊	（15）	同	同	同	逗留測。芦ノ浦村字寺越浜より沿海順測、芦浦村人家下、字浦ノ大畑、字雷浦、字高岩、字大ビヤ鼻、字鼻グリ、字水垂崎、賀谷村、字大滝、小手分と合測終。又鷺島二島を一周測。 【小手分】横浦村字見世越浜より沿海逆測、字白子崎、字白子浦、賀谷村、字小白子浦、字細り口鼻、（此より入江回）、字屋敷浜、賀谷本村、賀谷川、字元賀谷浦、字白浜、字堀切ノ浦、字重崎、（此より外海）、字モタ丸浦、字大滝、順逆合測。外に賀谷村持鼠島一周測、外にヒシゲ島。月食測定（十四日より鑪川村へ渡海、測器据込、日夜舟行測）	一九二
16 ＊	（16）	横浦村	長崎県対馬市	横瀬源治 斎藤吉右衛門	逗留測。濃部村、鑪川村境、字大道谷街道追分より海辺字浦底へ出。此より海辺、街道両用、左山に順測、字馬頭鼻より横切（即街道）、向海辺へ出り印を残。又字馬頭鼻より小鼻を回、リ印に繋。此より海辺、街道追分ヘヌ印を残、字折神崎（沖に千鳥島有）、又海辺、街道追分ヌ印よりル印を残、此より海辺、街道両用、鑪川村人家下（測所へ打上、即木星小星食測出張所）。ル印より字エガヤ、海辺、街道追分ヲ印を残、千尋藻村、字恵比須崎、字シウト浦、街道へ出、追分ヘワ印を残、字長柄崎、字殿ノ浦、又街道へ出、カ印を残。此より暫街道に離る。字小千尋藻村、字大千尋藻村、字足腐浜（二十間計の間往来なし、押て通れば足腐と云可笑）、鰐島幟に繋。鰐島（二ッ瀬）、字東風坊浦、字内越浦、字網代浦、字大崎浦、字ウゲホン崎、字コウグウ崎、曽村字観音崎にて沿海打止。それより乗船帰宿。 【小手分】横浦村字大羽ノカゲ浦より沿海順測、字ツヤノ島鼻、八兵衛島渡口を歴て八兵衛島一周測。又八兵衛島渡口より字満切浦を歴て山越横切、字大羽ノカゲ浦に繋、又字満切浦より字今津屋鼻、今津屋浦の小島遠測、字黒浦崎、字黒浦、字次郎転鼻、字西立場浦、字立場鼻を歴て立場島一周測。又字立場鼻より字大畑浦を歴て横浦本村下に繋、字権現鼻、字田ノ尻を歴て元ノ島、御崎島測。又字田ノ尻より字大ヒゲ倉浦、字トハノ木鼻、横浦村鑪川村界を歴て字浦底、本手街道より打出残に繋。	一九二
17 ＊	（17）	志多賀村	同　対馬市	給人阿勢治郎兵衛 百姓与三郎	櫛村字銭亀崎より沿海順測、字銭亀浦、佐賀村、銭亀、字崩瀧、字小風呂ヶ浦、字馬籠浦、字滝ノ下、字千崎、字深江浦、字田浦を歴て山越横切、櫛村字内田ノ浦入江奥へ出。又佐賀村字田ノ浦より、字ツネイリ、字石ヶ浦、字シナイ浦、海辺街道一同になる。此より海辺街道を離れ、佐賀村（領主先祖の古城跡、曹洞宗海岸山円通寺あり）、海岸より一町計入て、宗像八幡社あり、小姓島渡口を歴て小姓島一周測。又小姓島渡口より沿海測、字カイゴ崎、字虫生崎、志多賀村字鳥崎、同村人家下（名所鹿ノ浦）沿海打止、測所打上（即街道）。 【小手分】曽村字観音崎より沿海順測、字薙ノ浜、字大隈谷、字乙宮崎、曽川、字浜中、字浜町、即曽本村下なり。字夷崎、字缶ノ浦、字イハシ浜、字イハシ崎、字大地石ノ浦、大地石川手前、曽村、櫛村界、本街道に印を残。櫛村本村、住吉小社あり、字串ノ谷浜、字夷ノ鼻、字得意ノ浦、得意川、字姥崎岬、字於呂ノ浦、字坊主木場浦、字道斗鼻、字明星崎、字内ノ田浦、字千千畑浜、字エイカ崎、字二段鼻、字竹ノ浦、字松板鼻、字水ケ浦、字銭亀崎に繋。恒星測定	一九二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
18 ＊	（18）	舟志村	同　対馬市	給人武本与七郎 曹洞宗円通山善応寺	志多賀村人家下より沿海順測、宮川尻、字椎ノ浦、字シコエ浦、字丸倉鼻、黒島渡口を歴て黒島一周測。（同島より裸島に至）。又黒島渡口より字三浦、志多賀村小鹿村界、中瀬、下瀬遠測。小鹿村人家下に宮印を残。名祖師神社社前迄打上。式内那須加美乃金子神社、名祖師神社共、又金子神社共云。字小島（岬如石山にて絶景）、松島遠測。字鶉崎、一重村、字碆泊、字坂口原、街道へ出。此より海辺、街道一同なり。一重村人家下海辺、街道追分。一重川尻、字亀崎、一重村芦見村界に繋終る。 【小手分】一重村芦見村界、字亀崎より沿海順測、芦見村、江川尻、字鳥ケ崎、平瀬遠測、字ミセ崎、字浅黄崎、浅黄瀬（但隠瀬也）、琴村、字小ブト崎、字大家浦、字足見坂、本街道に突当。此より沿海街道両用、琴村下を歴て沿海測、琴本村、針川、字持縄浜、山本神社下を歴て、式内胡禄神社へ打上。又神社下より、字赤平碆岬、字郷ノ浦、（左に琴崎明神、神楽殿あり）、字トウヂカトク岬、字鴻ノ瀬岬、字琴崎を歴て神社の下に至。此より琴崎明神へ打上げ、石華表、拝殿に至る。式内胡禄御子神社、郷崎明神とも琴崎明神とも云。又神社の下より、字赤土岬、字茂木浦、字茂木崎、五根緒村字鼻操崎にて沿海打止。木小星の食を測、推歩不合不測。	一九二
19 ＊	（19）	同	同	同	逗留測。五根緒村字鼻グリ崎より沿海測、字トウゲ浦、字塔ノ崎、字臼崎、瀬続、臼石に繋。五根緒村持銭島一周測。又字臼崎より字ウスセイノ浜、字女瀬ノ浜、字立場崎、字赤崎、赤島浦、字名保浦、字エメウジ岬、烏帽子瀬、五根緒村人家下、字内カガリ鼻にて沿海打止終る。【小手分】網代村冨浦村界、字尉殿崎より沿海逆測。字違浦、字男浦、字伊良ノ浜、字碆崎より品木島渡口を歴て品木島一周測（干汐に瀬続き）。又地方品木島渡口より、字夷崎、冨浦村本村、枝奥ノ浦、字積崎、唐舟志村、字ウキヤウノ浜、ツワノツイ瀬遠測、字ツワノ浜、江川尻、字中ノ浦、字棚木浦、字菅ノ浜、字東風坊崎、干切鼻渡口を歴て東風坊干切鼻一周測、又地方干切鼻渡口より、字古里ノ浜、唐舟志本村、字半崎、字パンシガ浦、鷺首島渡口を歴て鷺首島一周測。又地方鷺首島渡口より、字膳浜崎、字ノコ浜にて沿海打止。	一九二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
20＊	（20）	同	同	同	逗留測。五根緒村字内カガリ鼻より沿海順測、字ガルサ浦、字鰐口崎、舟志村、字京島浦、京島、千鳥島遠測、舟志浦、前浜川尻を歴て測所打上。又前浜川尻より大増村字小増浦、字入道ヶ浦、（海辺、街道一同になる）、字下河原、大増村人家下、字田ノ蔵浦、海辺街道追分。此より山間を横切向海辺、浜久須村、字立目崎へ出、即順検使街道。又大増村字田ノ蔵浦より、字大口浦、唐舟志村（飛地）高崎（神社あり）、字観音崎、浜久須村字井口ノ下にて小手分と合測。 【小手分】唐舟志村字ノコ浜より沿海逆測、字大ノコ浜、字尻切鼻、字瀬戸ノ浜、荻島渡口を歴て荻島一周測。又荻島渡口より、字松島岬、字阿弥陀崎、字麻生岬、字大麻生浦、浜久須村字ゴニウ木場岬、島浦川、字島ノ浦、島ノ浦島渡口を歴て島ノ浦島一周測。又島ノ浦島渡口より字島ノ浦崎、字鳴崎、鳴川尻、鳴ノ浦、字鈴ヶ崎、字牟理屋、本街道へ出合。此より新田堤測。久須川尻、字薬師堂浜、又本街道へ出会。此より沿海、街道両用、字氏神ノ本。此より街道を離れ沿海測、熊野小社あり、字ハゲ島鼻、字立目ノ浦、又街道へ出て、此より字中崎迄沿海街道両用、此より街道を離沿海、字中崎鼻、大増村字大増立目浦、又街道へ出合。此より街道逆測。字中崎に繋、又字大増立目浦より沿海街道両用、浜久須村字立目崎に繋。此より街道大に離、沿海岬の測。字立島、字竜瀬岬、字岡崎、字道畑崎、字井口ノ下にて順逆合測。	一九二
21＊	（21）	比田勝村	同　対馬市	給人比田勝長兵衛 神崎清右衛門	豊崎郷字尉殿崎、冨浦村・網代村界より沿海順測、字牛ノ首、字大浦、字金崎浦、左名所夕影山、字夕影浦、網代村人家前を歴て妙見島一周測、妙見社あり。又人家前より字段崎、字椎木崎、比田勝村字井ノ浦、順検使街道へ出。此より測所打上（即順検使街道）、止宿前を歴て測所迄測る。又字井ノ浦より（此海辺、名所比田勝磯と云）、海辺街道一同に測、字小平治浦、海辺街道追分を歴て字恵美須崎（恵美須小社あり）、字十郎ヶ浦崎、小手分と合測。 【小手分】西泊村字渡ノ崎内、初崎より沿海逆測、字中ノ崎、字鯨瀬浦、字アナゼ泊、字大間渕浜、字駒臥浜、字白石浦、字畑尻浜、字シラく崎、字後ノ浦、字後平崎、小島渡口を歴て小島一周測。又小島渡口より字雷鼻、字口ノ網代浜、字長崎、字向ノ浜、西泊本村、能理刀神社の下に至り神社へ打上、右天台宗西福寺、右に制札あり、石華表、木華表、拝殿迄測る。式内能理刀神社。又神社の下より字経ヶ崎、字赤崎、字塩郷浜（熊野権現塩砂浜にて小石も村人は不取と云）、字横道ノ下、字三石（昔時胡元入寇の時、権現此石をなげうつて元の寇を退と云）、字鬢櫛浜、字モクリ瀬浜、字谷越浜、古里村、古里川、字十郎ヶ浦にて本手と順逆合測。	一九二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
22 ＊	（22）	豊村	同　対馬市	給人須川治郎兵衛 大浦宇右衛門	西泊村字初崎より沿海順測、字牟田尻、字馬取崎、ミサゴ瀬遠測、字入田浦、江川尻、字鋤崎、字元ノ縊を歴て山越横切向海、字元ノ縊迄測る。又字元ノ縊より泉村字鳥ヶ崎、字渡り瀬、字唐平碆岬、字姥ヶ瀬、字大浜、字舌崎、字中ノ崎、字鰯ヶ崎、字船着浜、小手分と合測。【小手分】泉村（本街道）、字比田勝越橋口より、比田勝越川通、海辺へ打下、字岩口を歴て沿海逆測、比田勝越川、字元泉、字谷越浦、字小屋ノ浜崎、字仏ノ浦、字赤崎、字平尾崎、字ホンザイ浦、字セイダン越浦、字元ノ縊、本手と順逆合測。両手共大風波にて舟行ならず泉村へ着船それより上陸山越。	一九二
23 ＊	（23）	豊村	同　対馬市	同	逗留測。豊村字中河原、本川手前、順検使街道より海辺へ打下、字豊ノ浜に至る。此より右山に沿海逆測。本川尻、字姿崎、字姿浦、字シレイ崎、字シレイ浦迄測る。此より長崎出鼻を左山に回る。（此岬の内小石浜二十間計の所を不通の浜と云。往古より里人も往来せず、外人押而通れば村へ祟と云て村長恐る。仍て船にて測）。字小烏帽子瀬に繋、字長崎、（沖、地）シイネ島二島遠測、字シレイ浦に繋、長島鼻一周測。字シレイ浦より初、字椿ヶ浦迄沿海。右雑木山中に式内大国魂神社（号島頭神社）、社も華表もなし。（案内村長、木生の中を指て島頭の神社と云。領主祈願の事あれば、海辺に塁を敷、神楽を成、毎年氏子共祭には村中小麦の団子を供し又食と云）。字立ヶ浦、字若宮崎（若宮大明神、石あり）、字深浦。此より山越横切、字立目坂、泉村海辺、字立目浦へ出。又字深浦より、字厚崎、字亀ヶ浦、小手分と合測。 【小手分】泉村字岩口より沿海順測、泉本村、字夷ノ浜、字江崎、志古島渡口を歴て泉村持志古島一周測。又志古島渡口より、字小櫃浦内、南碆崎、字大櫃崎、字大櫃浜、字唐櫃ヶ浦、字黒滝浜、字アナゼ泊崎、字井出ヶ崎、豊村字亀ヶ浦にて本手と合測。	一九二
24 ＊	（24）	鰐浦村	同　対馬市	給人扇善兵衛 百姓惣治郎	【今泉他三名】豊村字豊浜より沿海順測、左に神社あり、祭神島頭大明神、那祖師神宮、若宮大明神。字大田浦、右に小島遠測、字島ノ浦、字ケエクボを歴て山越横切、向海辺、字小ウテエドへ出。又字ケエクボより字ミタ崎浜、字サイ長ヶ崎、中のミサゴ瀬、沖のミサゴ瀬遠測、字後ミタ崎浜、地のミサゴ瀬遠測、字鹿落、字小ウテエドに繋、字唐櫃崎、字巣鹿ノ浜、鰐浦村、字粒ノ浦、字大長畑、字久松浦、字九ノ崎、字八間畑、字池崎、地海老島渡口、字瀬戸ノ浦、字妙見ノ立、字蛎瀬崎、字蛎瀬浦、字田ノ浦、字鉾崎、字ヒツカリ浦、鰐浦（朝鮮渡口、冬浦なり）、船荷物改大番所、木戸口迄測る。此より遠見番所へ打上。又木戸口より左船改役人会所、本川尻沿海打止。此より街道打上測所前迄測る。	一九二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
25 *	（25）	同	同	同	逗留測、遠見番所にて朝鮮を測。	一九二
26 *	（26）	同	同	同	逗留測。鰐浦村持ウニ島一周測。外に小敷瀬へ繋。ウニ島より沖海老島へ渡り一周測。沖海老島より地ノ海老島へ渡り一周測。三ツ島の内、高島片測。高島より中島渡り片測。中島より大島へ渡り一周測。又地方鰐浦村本川尻より沿海順測、左絶壁（字鰐口）、字納屋場浦（去年此浦にて壱州鯨組の内土肥善治郎鯨を漁す）、字中ノ浦、字滝ノ浜、字人切ノ鼻、字中矢櫃、字浦矢櫃、字鬼浦、字鬼崎にて沿海打止。	一九二
27 *	（27）	同	同	同	逗留測。遠見番所へ登り朝鮮国を測。それより字鬼ヶ崎より左山沿海測、字三ツ瀬崎、大浦村、字矢櫃越、字女瀬の鼻、東西大手分会測。又大浦村字網浜浦より山越横切、道を測。字血ノ浜越峠、鰐ノ浦村、字原ノ段、字本宮下、右順検使街道へ出、追分を歴て、測所前に繋。此日大手分出会、昼休。又々同人数にて再手分になる。此所にて江戸書状認出す。	一九二

【支隊】

4月2日	（5．2）	坂部他四名	久和村	長崎県対馬市	弥五左衛門 市郎右衛門	久田村、久田川尻より豆酘街道測。久田川を渡、新川小流、鳴呼難儀坂を越（板置山の裾を上る。大難所なり、故に如右書と云）、板置尾浦村字茶屋ノ隈（順検使は此所に休息の由）、右久根村、左豆酘村追分にて打止、すべて山道大難所なり。	一九二
3	（3）	同	北瀬村	同	同	逗留測。安神村字亀ノ崎より右山沿海順測、和合浦、女瀬鼻、久和村江川を歴て神社へ打上、式内和多都美神社前迄測る。江川より字ヲツケイ浦にて打止。	一九二
4	（4）	昼休	豆酘村	同 対馬市	観音住持須藤円竜 奉役古賀与右衛門	尾浦村、久根村・豆酘村道追分より街道測、安神村、内山村、内山川（此川所々にて渡る）、南瀬村、北瀬村、久根村追分。又南瀬村、内山川渡、豆酘村、同村峠に至て打止。	一九二
5	（5）	同	同	同	同	逗留測。豆酘村内字卒土ノ浜より左山沿海逆測、干鳥瀬、網吉浦、神崎ノ首に至て打止。此の先の神崎岬大巌石、大風波に付引返し、又字卒土ノ浜より右山順測、アザモ川小流、石巌崎、入道ヶ浦、長瀬鼻、豆酘亀浦、コモ崎、豆酘村人家前浜に打止る。此所に式内二社あり（多久頭神社、高御魂神社）	一九二
6	（6）	坂部	西内院村	同 対馬市	斎藤彦右衛門	豆酘村神崎の縊より沿海逆測、神崎鼻、西内院村、松なし浜を歴て今朝の初、神崎の縊へ横切して繋。松なし浜より池崎、ケエトル浦、エウトル浦、内院川小流、東内院村、大久保浜、鹿ノ首を歴て向海へ横切、ヒヤウガシ浜迄測る。鹿ノ首より神崎、内院島渡口を歴てヒヤウガシ浜に繋終る。	一九二
		豆酘村		同 対馬市	観音住持須藤円竜		一九二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
7	（7）	豆酘村	同　対馬市	観音住持須藤円竜 奉役古賀与右衛門	久和村海辺、字ヲツケイ浦より右山沿海、鍋通し鼻、広瀬鼻、トウサヒ浦、東内院村、潜瀬鼻、ヒヤウガシ浜に繋。それより東内院村持内院島を一周測。又豆酘村人家前海辺より街道を豆酘峠へ測、観音堂追分を歴て豆酘峠に繋終。又観音堂追分より観音堂へ打上。	一九二
8	（8）	北瀬村	同　対馬市	奉役高松羽左衛門 上原吉之丞	豆酘村人家前海辺より右山沿海順測、亀甲鼻、牛ケ瀬浜、豆酘崎（当国第一極南岬）、犬ノ首、黒崎、南瀬村、郷界瀬川尻を歴て街道へ残、南瀬村、内山川渡へ繋。郷界瀬川尻より北瀬村、久根浜村、字大石小風呂迄測。	一九二
昼休		上槻村	同　対馬市	源五左衛門	北瀬村内、久根村追分より街道横切、久根浜村を歴て神社へ打上、久根田舎村、式内銀山上神社（旧号太調神社、俗称五所大明神）前迄測。境内に矢立大明神の社あり。久根浜村より、久根川尻、海辺へ出。久根浜村字大石小風呂より沿海、久根川尻に繋、板石浜、久根田舎村、板石崎、汐除鼻、上槻村、上槻川尻を歴て向海へ横切乙印を残。上槻川尻より、島山鼻を回て横切乙印に繋、椎根村、字トノ浜、椎根川小流、小茂田村、佐須川尻、川端、街道海辺追分打止。	一九二
9	（9）	小茂田村	同　対馬市	下知役斎藤太仲 鈴木善蔵	小茂田村海辺佐須川尻より右山沿海測。ツブラ崎、大ノ口浜、阿連村、阿連川、阿連村人家下海辺迄測る。此より式内雷命神社（俗云八竜大明神）へ打上。人家下海辺より今印を残（追而府中より横切印）、韮崎、白浜、荒レ崎、シユリ田浜、今里村、シクチ浜、コツテイ崎、大津浦、鬼原崎、郷崎、鯨見小屋前打止。	一九二
10	（10）	今里村	同　対馬市	下知役大石又六 根〆只七	今里村中川尻より左山沿海逆、牛ケ鼻、縊崎、尾崎村飛地字土崎、字大連河内、字水崎、カリヤド島遠測、エボシ瀬、水ケ浦、又今里村、ヨケ崎、鶉崎、郷ノ浜海辺に式社都々智神社（俗云郷崎大明神）、郷崎、鯨見小屋前に繋終。	一九二
11	（11）	廻村	同　対馬市	阿比留喜右衛門 阿比留平八	廻村字瀬戸間より廻村持牛島頂上へ引渡。又字瀬戸間より沿海順測、ウト崎、池ノ浜、アシタ崎、宮ノ崎を歴て寺崎島一周測。宮ノ崎より曲崎、白瀬崎、ヌカス崎、唐洲村、夷崎、乙メウ崎、スグノ浦、入江、貝口村、スミ崎、黒平鼻、夷浜、メイ崎、佐保村、メイノ浜、イキシ浜を歴て裏海、佐志加村内笹葉浦入口へ横切。又イキシ浜より字トウノ浦、入江、韮崎、ホケ島遠測、タントウ浜打止。	一九二
12	（12）	小綱村	同　対馬市	村瀬唯右衛門 村瀬駒作	雨天逗留。	一九二
13	（13）	同	同	同	逗留仕越測。小綱村字筒ケ崎より左山沿海逆測、筒ヶ浦、亀ケ崎、カケ乗番所、小綱村止宿前、大綱村、字ミブネ、ハイツボ崎、志多浦村、字トウノ崎、大風に付打止。	一九二
14	（14）	同	同	同		一九二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
15	（15）	同	同	同	逗留測。小綱村人家前（止宿前）より街道横切、田村に式内行相神社（俗に王子若宮と云）。海辺へ出、平口川尻横切終。此より右山沿海順測。同村内、鼻クリ崎、田村・加佐村界迄測。又平口川尻より左山沿海逆測、宮浦崎、田ノ浦、白岩崎、丸崎瀬を歴て丸島一周測。丸崎瀬より尻カヂ浦、尻カヂ崎、田村二俣崎迄逆測終。	一九二
16	（16）	同	同	同	逗留測。志多浦村字トウノ崎より、メウ瀬崎、メウ瀬島、千鳥瀬遠測、碆崎、佐保村字ビシヤコ瀬遠測、同村内、タントウ浜に繋逆測終。又大飛に小綱村字筒崎より右山沿海順測、深入浦、入江、弓ケ浦、ウビ崎、銘村、銘崎打止。又小綱村持島を測（いづれ島も人家なし）。地の鹿ノ島、榎島、中ノ島、カウノ島一周測。外に沖の鹿島、ビシヤ瀬遠測。それより乗船帰宿。	一九二
17	（17）	木坂村	同　対馬市	平山源兵衛	銘村、銘崎より右山沿海順測、カニヤリ浦、鵜ノ瀬鼻、田村、金吾瀬、小磯、千鳥瀬遠測、二俣浦、二俣崎に繋。又飛て、田村・加佐村界、字鼻操崎より右山沿海入江測、竹ナシ浦、京ケ浦、加佐本村、エビス崎、ウチカケ崎、吉田村、松ケ崎、津ノ江浦入江奥、吉田川尻を歴て郷ノ浦崎、児崎、吉田・三根村界、白岳浜に終る。それより乗船。	一九二
18	（18）	同	同	同	逗留測。木坂村海辺人家下より左山沿海逆測、ヲコシ神鼻、ウトロ崎、草葉崎、狩尾村、シン崎、字水口瀬、狩尾本村、浅瀬浦、長崎鼻、鮪浦、鼻操崎、三根村、三根浦の奥字汐壷、三根川尻を歴て街道追分、字田口迄測る。此分沿海街道両用。此より三根村・吉田村界に繋逆測終。又木坂村海辺人家下より右山沿海順測、八幡浜、鳶崎、青海村、字ウスヅキ浜迄測。	一九二
19	（19）	鹿見村	同　対馬市	阿比留金右衛門 阿比留小治郎	青海村字ウスツキ浜より沿海順測、チヂラ崎、津柳村、母衣崎、鯨瀬（大岩なり）、女連村、トヤノ崎、養父佐崎、サナダ崎、俎板崎、久原村人家前、海辺街道追分迄測る。此より本街道を横切向海へ出、鹿見村内見印迄街道測。又久原村海辺街道追分より沿海測、権現崎を回て横切残見印に繋。此より沿海街道両用、鹿見村、沿海街道追分迄測。此より沿海順測。鹿見川尻、エビス崎、干鳥瀬遠測、長崎岬、カサ浦、御園村、カサ浜迄測。	一九二
20	（20）	伊奈村	同　対馬市	阿比留伝六 小野新左衛門	御園村（飛地）加佐浜より右山に沿海、カサ島、剣崎、銭島遠測地続、犬ケ浦村（飛地）ツヽロ崎、樫滝村字弓ノ原、仁田川尻迄測る。此より仁田川端を片測（追而街道より繋）。又仁田川尻より沿海測、仁田川尻を渡り、犬ケ浦村、百崎、ツボ崎、御園村、干鳥瀬鼻に沿海終。	一九二
21	（21）	同	同	同	逗留測。御園村干鳥瀬より右山沿海、松島岬、日野崎、三十浜鼻、越高村、越高川小流、街道端を歴て海辺付の街道を越高村字伊越迄測る。それより沿海、早子崎、ミソコモリ鼻、伊奈村、千鳥瀬（磯）、伊奈船瀬（岩）、モエ浦、伊奈川尻、沿海街道追分を歴て海辺付の街道を奈印迄測る。それより沿海、馬立崎、伊奈・志多留村界を歴て、志多留村、人家前川尻、街道沿海追分、此より沿海、字竹ノ尻に沿海終る。又、伊奈・志多留村界より街道筋横切、越高村迄逆測。伊奈村海辺へ出、奈印に繋。又伊奈川尻より式内伊奈久比神社（俗云穂ノ家神社）、伊奈坂を越て越高村海辺へ出、字伊越に繋、街道横切終。	一九二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
22	（22）	同	同	同	逗留測。志多留村、竹ノ尻より右山順測、立石崎、伊奈崎、田ジウ崎、志多留村枝田ノ浜、苅生、人家前浜に打止終。それより乗船帰宿。（此日伊奈村にて鯨を取を見る）。志多留村枝苅生、人家前より右山沿海、湊村、字中山、マノ浜、丸輪崎、棹尾崎、魚瀬鼻、メウ瀬鼻、佐護川尻、此より川尻を街道へ横切、湊村人家に打止。此所に式内天神多久頭神社あり。俗云天道ノ神社、社なし、大山を神社とす。	一九二
23	（23）	湊村	同　対馬市	天道山大日寺 仮亭主豊田角右衛門 大石兵内	湊村人家前川瑞より佐須奈村、街道測、友谷村、同村枝ムクナシ、井口村、佐護川を渡、恵古村、又佐護川渡り、同村人家前、本街道へ出。此より本街道を逆に式内神社へ打上、深山村、佐護川端を歴て。此迄街道、是より式内天諸羽命神社前迄測る。俗、釜ノ神、又門ノ神とも云。別に社もなく石を方に積て印とす。恵古村人家前より坂なし峠、佐須奈村、サゴウチ原迄測る。此より式内島大国魂御子神社へ打上、俗に日吉権現と云。サゴウチ原よりサコウチ川端を歴て字ヘギノ浦海辺迄測る。サコウチ川端よりサゴウチ川海辺に出、街道測終る。	一九二
24	（24）	佐須奈村	同　対馬市	給人武田吉蔵 足軽庄司利三郎	逗留測。佐須奈村サゴウチ川より沿海順測、トノウチ川、同村人家前船着、街道海辺追分迄測る。此迄街道海辺同。番所前（当湊は朝鮮渡口。三月朔日より八月晦日迄）を歴て、此より同所遠見番所山へ打上、朝鮮諸山を測。番所前より松ヶ崎、字向番瀬にて沿海打止。	一九二
25	（25）	同	同	同	佐須奈村向番瀬より右山沿海、シケ崎、ウミダシ鼻、鵜ノ子鼻、大浦、入江、仏崎にて打止る（風波にて舟測難成打止）。又、佐須奈村人家前船着より大浦村へ街道測、大トノウチ川（小流也、所々にて渡）、大野坂、地蔵堂、西ノ津屋村、河内村、（楠ノ平川小流、所々にて渡る）、同村枝佐河内海辺迄測る。此より街道海辺両用。河内村人家前を歴て、此より街道を横切河内坂を越、大浦村人家前街道打止。	一九二
26	（26）	大浦村	同　対馬市	大浦藤右衛門 大浦喜右衛門	逗留測。大浦村人家前海辺より大浦川尻、此迄海辺街道両用。鵜ノ瀬鼻、綱浦浜（浜浦）を歴て（別手此より横切鰐浦へ測）、関戸ノ浦、赤崎、メウ瀬崎、大浦村内女瀬鼻、大手分と左右出会。此より乗船、鰐ノ浦より街道を測。豊村字元越、（鰐浦、豊村、大浦）三ツ辻より街道横切測、元越川（所々にて渡る）、大浦村字田ノ頭、弓掛松（朝鮮陣の節諸士の稽古場）、字中ノ町、字タノシヤ、大浦川尻に繋終。	一九二
27	（27）	同	同	同		一九二
	坂部	鰐ノ浦村	同　対馬市	給人扇善兵衛		一九二
【本隊】						
28 *	小休	豊村	長崎県対馬市	須川治郎兵衛	【今泉他三名】鰐ノ浦村字本宮下より字元越峠、豊村、元越元、順検使街道へ出、三ツ辻に繋。此より街道測。豊村、字中河原に繋、本川、地蔵坂、泉村に繋、泉川、字メクヂリ坂、古里村、字恋路ノ坂、比田勝村海辺、字小平治浦に繋。此より海辺街道追分に繋、測所前に打止終。江戸行書状を出。	一九二
	昼休	泉村	同　対馬市	給人比田勝伝十郎		一九二
	小休	古里村	同　対馬市	与三郎		一九二
	（28）	比田勝村	同　対馬市	給人比田勝長兵衛 神崎清右衛門		一九二

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
29＊	小休	浜久須本村	同　対馬市	奉役古藤治左衛門	比田勝村測所前より街道測、比田勝川二度渡、右に大日権現宮あり、字沼田坂、字茶屋ノ元（名所比多我多山と云、順検使休所）、浜久須村、左に鳴滝と云小滝あり、海辺字牟理屋に繋、（左新田仕立にて一両年に成願と云）、字十万蔵、右に曹洞宗自宝山観音寺、佐護領田舎久須村、田舎久須川、海辺字薬師堂に繋。此より海辺街道一同重測。浜久須村字氏神ノ元、海辺・街道追分に繋、又海辺字立目浦に繋。又此より重測。字中ノ崎に繋、左に小鼻あり、少間海辺を離れ又直に海辺街道一同になり重測、大増村字立目ノ浦に繋。此より一町計海辺を離れ又向海辺へ出、重測、（右に当村鎮守あり、テンダイヤウサと云、朝鮮より渡神か）、大増村、字入道ヶ浦に繋。此より海辺を離れ山越、字小増浦に繋、海辺へ出、直に離て舟志坂を上る。舟志村字原、佐須奈道追分、順検使街道打止。此より海辺打下、止宿前に繋終。	一九二
	昼休	大増村	同　対馬市	曹洞宗滝水山慈眼寺		一九二
	（29）	舟志村	同　対馬市	給人武本与七郎 曹洞宗円通山善応寺		一九二
文化10年5月（1813）						
1＊	小休	佐須奈村	長崎県対馬市	武田吉蔵	逗留測。無測にて佐須奈村に着。同村字太次郎山の遠見番所へ登り朝鮮山々を測。同村字浦ノ浜より舟志道を測、左に曹洞宗福寿山仙蔵寺、白江川水なし、数ヶ所渡る、舟志坂峠、舟志村、畜生段川中河原を通行、字中原、字原、順検使街道へ出、繋ぐ。又字原より順検使街道測、仕越、浜坊川、下江良川、カリサクチ川三度渡、長畑川巾、字横坂口、街道打止。恒星測定	一九二
	昼休共（5．30）	舟志村	同　対馬市	給人武本与七郎 曹洞宗円通山善応寺		一九二
2＊	小休	琴村	同　対馬市	給人財部勘兵衛	舟志村字横坂口より街道測、五根緒村、字赤坂峠、（島畑川、上は笹本川と云。度々渡る）、琴村、四河内川、字堂坂峠、原川、字原、原川、琴村人家の間、寺の前に、銀杏の大樹あり十囲。右銀杏より引込て天台宗琴照山江教寺、海辺へ出、繋ぐ。此より海辺街道重測、針尾川尻、海辺街道追分、字葦見坂口に繋、字葦見坂峠、葦見村、海辺江川尻に繋、字妻ノ神坂、一重村、一重川手前打止、外測所打上。恒星測定	一九二
	小休	葦見村	同　対馬市	吉兵衛		一九二
	（31）	一重村	同　対馬市	給人平間惣八 平間仁左衛門		一九二
3＊	昼休	小鹿村	同　対馬市	給人扇忠左衛門	一重村、一重川手前より街道測、一重川渡り海辺へ出、繋ぐ。此より海辺街道重測、字坂口原、海辺街道追分に繋、字批把坂、小鹿村、字古小鹿浦、古小鹿坂、小鹿村海辺へ出、繋ぐ。字横桁、字茶屋隈坂、志多賀村、関本川度々渡る、字赤坂、大雨に付打止。	一九二
	（6．1）	志多賀村	同　対馬市	下知役阿比留治郎兵衛 百姓与三郎		一九二
4＊	昼休共（2）	同	同	同	逗留測。志多賀村字赤坂より関本川、字松ノ実、松ノ実川、宮ノ川、志多賀村測所前に繋、此より仕越測、字七曲坂、字仏岳坂、佐賀村、斧礪川六度渡る、字大原、左に宗像八幡宮、海辺へ出、繋ぐ、佐賀村制札前打止。それより乗船、帰宿。恒星測定	一九二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
５＊	小休	櫛村	同　対馬市	百姓善八	佐賀村迄乗船、昨日打止制札前より街道測、右に曹洞宗海岸山円通寺、当国主往古の菩提寺也、橋本川、海辺、字シナイ浦に繋、字ザラコ坂、櫛村、徳江川、字小細原、字徳江浦に繋、字中ノ谷、字徳江坂、海辺に出、繋ぐ。大地石川、櫛村曽村界、即街道海辺追分に繋、字ホドキ坂、此所にて筑前の興津島を測。此より海辺、字ホドキノ浦に繋。又字ホドキ坂より字浜中、海辺へ出、繋ぐ。字浜谷測所前、和板道・千尋藻道追分、順検使街道打止。此より千尋藻道横切の測、曽川、千尋藻村字殿坂、向海辺、字殿ノ浦に繋。（先日海辺測に此道を順検使街道と間違案内せしにより浦底より此迄数ヶ所残印悉に不用になる）。対州侯より端午祝賀に肴を贈。	一九二
	昼休共（３）曽村	同　対馬市	下知役林野初平 給人一宮孫右衛門			一九二
６＊	昼休	仁位村枝和板	同　対馬市	百姓勘兵衛	曽村測所前より順検使街道測、字田舎、串田川、曽川、鑪川村、大平坂、字茶屋隈、曽村・鑪川村界、鑪川坂、字大河内、仁位村枝和板、尻掛川三度渡、仁位道追分に繋、又同村海辺、字恵美須川より左山に沿海測、恵美須川尻中央、仁位村和板・濃部村界、濃部村持千鳥島遠測、字長碆崎、字白潟、字カメノナノ浦、字乙浦、字聖王崎、沿海打止。	一九二
	（４）濃部村	長崎県対馬市	本陣乙治郎 今泉幸右衛門 九右衛門			一九二
７＊	（５）同	同	同	同	逗留測。【今泉他三名】濃部村字聖王崎より沿海測、字呼崎浦、字柳浦を歴て、街道打上。又字柳浦より字坂無浦、字石原浦、濃部村測所前を歴て、入江奥、字濃部浦、字立花崎、字網掛崎、字岳ノ下、字赤崎、地ノ京ヶ島渡口を歴て地ノ京ヶ島一周測、又渡口より字綿打ヶ浦、字関本、濃部村・大山村界、大干切鼻前に繋。此より左山に大干切鼻を測、小手分と合測【尾形他二名】濃部村持草島一周測。京ヶ島属干切島一周測。大山村持総名三ッ室島を測、丸島、中島、沖ノ島一周測。それより琵琶島一周測。三ノ島（俗云死人島）、麦島一周測。それより地方、小船越村字小干切鼻より出鼻逆測、（但右山計小船越村分、左海計大山村分）、字江切ノ浦、字カシコホノ浦（小干切鼻の本なり）、を歴て此より沿海逆測、字鹿生浦、字関ノ下、大干切鼻の本に至。此より大干切鼻を回る。字帷衣崎、本手と合測。恒星測定	一九二
８＊	昼休	小船越村	同　対馬市	給人早田左仲	逗留測。仁位村枝和板、海辺街道追分より巡検使街道測、小石川、濃部村字末原、字大道谷、海辺街道追分に繋、字末岳坂、字柳ヶ浦に繋、字長曽根、字十文字、小船越村、字島ノ内、小船越村人家前に繋街道終。それより同村字関ノ本より右山沿海逆測、字ハカドウケ崎、字ヨシワダ浦、字タイソフ浦迄測。此より土手山越横切向海へ出二印を残、又字タイソフ浦より沿海測、字長崎浦、字長崎を歴て二印に繋、恵美須島渡口を歴て恵比須島一周測。又渡口より、字カシゴウ浦（小干切鼻ノ元）に繋、小干切鼻に繋終。【小手分】島山村字端ノ網代鼻より右山沿海、字アセヂ浜、字前瀬鼻、字満汐鼻、字満汐浦、字白岩鼻、字六郎ヶ浜、字福畑浦、字マカラ城鼻、字トドガ崎、字屋敷浦、地廻り島、沖廻り島遠測、字鍋通シ浦、字碇崎、字長財鼻、字島ノ浦、干切島渡口を歴て干切島一周測。又渡口より字石神ノ浦、字赤崎にて沿海打止。	一九二
	（６）濃部村	同　対馬市	本陣乙治郎 今泉幸右衛門 九右衛門			一九二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
９＊	（　７）	同	同	同	逗留測。小船越村字関本より左山沿海、字船隠、大山村、字真帆崎、字赤崎浦、字口釜崎、字後山浦、岡崎出鼻満切真中を歴て岡崎出鼻一周測。出鼻満切真中より字添崎、恵比須島、字和田ノ浦、字姚灯崎、満切岬瀬続の真中を歴て満切鼻一周測。瀬続の真中より字焼白崎にて打止。【小手分】島山村字赤崎より沿海測、字赤崎浦、字浄香崎、字水ヶ浦、字塔ヶ浦、字ドモゾノ崎、字綱打灘、字江ノ内、字甑ノ浦、字甑崎、三郎島遠測、字狭瀬戸ノ内、馬渡瀬戸、海界（大山村、大舟越村になる）、字松崎、字水ノ谷浦、字エイノ瀬戸崎にて沿海打止。又字エイノ瀬戸崎より黒三崎島へ渡、黒三崎島一周測。	一九二
１０＊	（　８）	島山村	同　対馬市	給人神宮長左衛門 百姓千六	大山村字焼白崎より左山沿海測、字シャウテ浦、字シガラキ浦、バンドウ島渡口を歴てバンドウ島一周測。又渡口より、字ザツセウ松、字内ヶ浦迄測る。此より土手山越横切、向海辺にス印を残。又字内ヶ浦より字中山、字炭焼崎、字新ノ浦を歴て横切のス印に繋、字炭焼浦、大船越村、字狭瀬戸に繋。向海辺へ渡、大船越村字鹿焼より左山に沿海、字鹿焼崎、竹敷村（此辺シシイ浦と云）、字大田越、字勝利ヶ谷、網代ヶ浦、茶木島の渡口を歴て茶木島一周測。渡口より字赤崎、字赤崎浦、字高保ヶ浦、字高保崎にて沿海打止。【小手分】島山村字エイノ崎よりゴセンナ浦、字開キ浦、字孕石崎、字蜂巣崎、字赤崎、字網代浦、字通ヶ浦、字江ノ内越浦、字チヂ畑浦、字通ヶ浦崎、字平野浦、字烏帽子浦、字柿木畑浦、字平野トモ崎、字忍ヶ浦、字片平、島山村本村測所前迄測る。それより仕越、字氏神鼻、千鳥島遠測、字漆畑浜にて打止。	一九二
１１＊	（　９）	同	同	同	逗留測。竹敷村字高保崎より沿海、イ印迄測る。此より土手山越横切向海辺へ出、ロ印を残。又イ印より沿海、ハ印を歴て、土手山越横切向海辺へニ印を残。又ハ印より沿海、字手城崎、ズンキリ島渡口を歴てズンキリ島一周測。又渡口より沿海、字唐藻崎横切二印に繋、又横切ロ印に繋、字唐藻瀬戸、シシガ島渡口を歴てシシガ島一周測。鹿ケ島より小島へ渡、小島一周測。又渡口より、字網代浦、字網代崎、字布子浦、字米ヶ浦、字ナゲタ崎、字ナゲタ浦、鶏知村、字長崎、字深浦、字樽ノ浜を歴て入江奥字船着場、街道より打下すに繋ぐ。それより又字樽ノ浜より、字笠松、字干切崎、字干切浦、アジ島渡口を歴て鯵崎島一周測。【小手分】島山村字漆畑浜より字童子畑崎、字四軒畑浦、字コウバウカ浦、字六郎ヶ鼻、字六郎浦、字船頭崎、字コクノギ崎、字コクノギ浦、字大クノギ浦、字大クノギ崎、字白瀬崎、字松ヶ浦、字長峯浜、字長峯崎、字集浦、字大平崎、字瑞ノ網代崎に繋、島山村の一周終。府中より江戸書状届。	一九二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
１２ ＊	（１０）	箕形村	同　対馬市	百姓喜右衛門 松右衛門	竹敷村持鼠島一周測。同村地方字ネソトク崎より沿海測、黒瀬村、字表浦、字ワゲ浦、字土崎、昼浦村、字フツケ浦、字飯盛崎、字ホケエモリ浦、字藍畑浦、字犬ノ首を歴て土手山越横切向海辺、字批把ノ首迄測る。又字犬ノ首より、字高欄津崎、字批把ノ首に繋、出鼻測。字浅牟田浦、字小畑浦、盗人島渡口を歴て盗人島一周測。渡口より、字長谷浦、字大江浦、字芋崎幟に繋、字白崎、黒瀬村、字中崎にて沿海打止。 【小手分】鶏知村字鰺崎島渡口より沿海、字ドノ浦、字土ノ浦崎、字船隠シ浦、字久須ノ浦、字皿ノ浦、洲藻村、字ミジカ浦、字汐越浜を歴て此より山越横切、向海辺黒瀬村、字坂無浦迄測る。又字汐越浜より竹敷村、字大羽石浜、字瀬戸ヶ浦、車島渡口を歴て車島一周測。又渡口より字島ノ内浦を歴て瀬戸崎出鼻を回り、字瀬戸ヶ崎に繋、出鼻一周測。字クヒトウ浜を歴て苗字崎を回り苗字崎横切に繋、出鼻一周測。左に聖母大明神小社あり。竹敷本村、禅宗竜光山高眼寺あり、字シツボカ尻浦を歴て此より向海へ山越横切、字タツネノ縊浜迄測る。又字シツボカ尻浦より、字ユリ越浜、字横畑浜、関坊崎回り、字関坊崎、字ケンネイカ浦の幟に繋、横切残字ゲンネイガ浦に繋、字ゲンネイ崎、字甑崎、字ユウシ浦、ヲダイガ島渡口を歴てヲダイ島一周測。又渡口より字ユウシカ浦、字吉ノ内浜に繋、字シモツキ崎（深浦迄をシモツキ灘と云）、字福浦、字タツネノ縊浜に繋、字深浦、字エイ畑浦、字ネソトク崎に繋。	一九二
１３ ＊	（１１）	同	同	同	雨天逗留	一九二
１４ ＊	（１２）	箕形村	同　対馬市	百姓喜右衛門 松右衛門	逗留測。箕形村字チノギ浜、加志道追分より右山沿海、字針ノ浦、カコフ松川尻、洲藻道追分迄沿海、カコフ松川尻を渡、字納屋ノ浜、右に大厳石、左に瀬続、崎島遠測、字仏崎、字赤隈浦、字木ノ浦、黒瀬村字小月崎、（名所）御着浜（神功皇后三韓征伐御帰国に此浦へ御着船と）、名所包石、字妙瀬鼻（此所八幡宮の御磯にて平生往来なし、不知して通行すれば風雨起と里人とも恐る）、字鋸分灘、（右）城八幡宮華表（御影石継なし一本石、国主の銘あり）、社前迄打上（此所一ノ木戸跡と云）。城山旧跡二ノ木戸、三ノ木戸字仏法崎、字人呼崎、字サナノ浦、（此所にて大風雨に成、測量難相成、黒瀬村へ乗付立入、昼休。小手分も同。小雨に出）、字チマキ浦、洲藻村、障子ヶ浦崎、字イカ山浦、字デンサイ崎、字洲藻浦、塩郷川尻、字中道、字関谷、字短谷越、字草織ヶ谷にて小手分と合測。 【小手分】黒瀬村字中崎より字穂入浦、字宮ノ縊を歴て此より向海へ横切字宮縊崎迄測る。又字宮ノ縊より字宮縊崎に繋、字仏田浜、字クワメラ浜、字碇崎、字塔ノ崎、字立ノ浦、字仏勧請、字鋸分（壁立削成なり。上に味噌瓶岩と云あり）、字瓶ノ下鼻、字積ノ浦、字ソル越浜、字夫婦石鼻（夫婦石あり）、字当歳ヶ崎、字岩屋崎、字岩屋浜、黒瀬本村、本手と同昼休、字夷崎、字カシコボ浦、字坂無鼻、字坂無浦に繋、洲藻村、字猪ノ浦、字水垂崎、字孝行崎（孝行岩あり。孟宗筍を掘、皃かたちに似たり）、字常来崎、字草織谷迄測る。	一九二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
15 ＊	小休	洲藻村	同　対馬市	足軽六左衛門	箕形村字針ノ浦、カコウ松川尻より鶏知村道測。カコウ松川十五ヶ所渡る、字一ノ谷、洲藻村、字ミヤゲノ平坂、洲藻川五ヶ所渡る、字方積坂、鶏知村字肥川迄測る。此より海辺打下、字久須ノ浜に繋、又字肥川より字ホソリ坂、巡検使街道へ出、鶏知川を渡、止宿入口に繋。	一九二
	（　13）	鶏知村	同　対馬市	奉役神宮直右衛門 神宮貞之丞		一九二

【支隊】　坂部他四名

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
4月28日	（　28）	佐須奈村	同　対馬市	竹田吉蔵 庄司利三郎	大浦村海辺人家前より左山沿海逆測、字浜町、松ヶ崎、河内村、字河内浜に繋。（此より先は海辺街道測済ゆえに飛て）河内村佐河内人家脇より、河内川、鈴ヶ崎、トウネ崎、犬戻鼻、西津屋村、堀崎、津屋崎、天道崎、立石（大岩）、立石浦、佐須奈村内、仏崎に繋終。それより乗船。	一九二
29	昼休	湊村	同　対馬市	禅宗天道山大日寺	佐須奈村サゴウチ川尻より左山沿海、照島鼻（旧は島なり、今は地続新田になる）、字ヘギノ浦海辺に繋、字ヘギノ浦、塚崎鼻を回り、佐須奈村、枝大地、ショウジ島遠測、鵜子鼻、登路久崎、井口村、井口浜、立石崎、友谷村、湊村、佐護川尻に繋終。それより無測。坂部は朝鮮測に伊奈村へ越。	一九二
	（　29）	深山村	同　対馬市	奉役佐護茂左衛門		一九二
	坂部	伊奈村	同　対馬市	阿比留伝六		一九二
5月1日	（5．30）	伊奈村	長崎県対馬市	阿比留伝六 小野新左衛門	深山村佐護川端街道より街道測、佐護川を渡、字瀬田、仁田内村字滝口、佐護川所々にて渡（俗に四十八川と云。川上を中山川と云）、志多留村、伊奈坂、志多留川尻人家前に繋終。それより乗船。	一九二
2	（　31）	鹿見村	同　対馬市	阿比留金右衛門 阿比留小次郎	越高村人家前より街道測、六ツ郷坂、御園村、瀬田村、枝宮原、技中栗巣、瀬田川、瀬田本村、樫滝村、樫滝川尻、字弓ノ原、字下里、海辺に出、川尻に繋、（此より街道海辺両用）。又樫滝村、弓ノ原内仁田川尻より鹿見村、弓坂峠、鹿見川小流、鹿見村人家前に繋終。	一九二
3	昼休	三根村枝上村	同　対馬市	阿比留種右衛門	久原村海辺人家前より街道測、女連村、三根村、枝下村、枝中村、枝上村、三根川尻、字汐壷に繋終。同村式内小牧宿祢神社（俗云蔵王権現）あり。又同村内、字田口より、ヲウヤノ坂、吉田村、吉田川瑞を歴て、此より海辺打下、吉田川尻に繋、又吉田川瑞より吉田川を渡、吉田村人家前に打止終。	一九二
	（6．1）	吉田村	同　対馬市	阿比留多左衛門 竜造寺判左衛門		一九二
4	（　2）	仁位村	同　対馬市	奉役平松左伝 山上武左衛門	吉田村人家前より田村、枝上村人家前を歴て、枝下村人家前に繋。又枝上村人家前より、シヤウゼン寺坂、大綱村、仁位村、字寿松院原、橋口にて街道打止。此より海辺打下、仁位川、下小路、堂ノ内町、（旧古此海辺に当国の府を建んとなせしに不都合なるによりて今の府中に建るゆえ如右地名也）、仁位川尻海辺に出。此より浅海入江口左に逆測して、仁位村内、モトエ鼻打止に終る。当村式内（一ヶ所、遠測）和多都美御子神社。	一九二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
5	（3）	嵯峨村	同　対馬市	給人佐伯彦左衛門 田中治部左衛門	仁位村橋口より街道測、字上町、仁位川を渡、和板坂、仁位村枝和板村、曽村道追分を歴て、街道海辺追分、カンバリ川端。此より海辺打下、浅海入江奥和板浦へ出。此より右山沿海測。弥五郎島渡口を歴て弥五郎島一周測（古名シキ島）。又渡口より、糸瀬村、浦山崎、セウコウ浦、イカキ浦、朽山木浦、朽山木鼻、浜椿浦、赤崎鼻、若松浦、ヨシキ崎、糸瀬浦、糸瀬本村人家限に沿海打止。それより乗船。	一九二
6	（4）	同	同	同	逗留測。糸瀬村人家前より右山沿海、嵯峨村、千鳥瀬（小磯）、島ノ内島遠測、島ノ内浦、マナゴ浦、竜ノ浦、瀬ノ内浦、北ビウ鼻、トウヤ崎、カシゴウ浦、立ノ崎、浜椿浦を歴て多田島一周測。又浜椿浦より高瀬浦、仏ノ浦、同入江奥、嵯峨村へ横切用意を残、馬取浦、長崎鼻、鯨江浦、貝鮒村、ウバ泊浦にて沿海打止。	一九二
7	昼休	貝鮒村	同　対馬市	犬塚貞右衛門	逗留測。嵯峨村人家前より左山沿海逆測、長岩崎、仁位崎、デイノ浦、メウ崎、ヌクエ浦、貝鮒村、横道浦入江奥を歴て裏海へ横切、貝鮒村人家前迄測る。又入江奥より岩口崎、白銀島（遠測）、岩口崎を廻り貝鮒村人家前に繋、貝鮒浦、クビト浦を歴て山越横切裏海ウバ泊浦迄測る。又クビト浦より小網代鼻、タソ崎を回り横切ウバ泊浦に繋、ウバ泊浦に繋逆測終。又嵯峨村内仏ヶ浦入江奥より横切、カ印を残、此より同村内カシガフ浦に繋。又カ印より、山越、嵯峨村人家前に繋。	一九二
7	（5）	嵯峨村	同　対馬市	給人佐伯彦左衛門 田中治部左衛門		一九二
8	（6）	佐保村	同　対馬市	長郷仁左衛門 長郷秀作	嵯峨村人家前海辺より右山沿海順測、嵯峨浦、増山崎、佐志賀村、長崎、小佐志賀浦、松崎浦、島ノ腰、キソウクラ浦、大ビラ崎を歴てトウケ崎一周測。大ビラ崎より大王浦、横瀬浦、屋敷浦、横瀬崎、綱入浦、築入浦、仁位村、ハミヤ浦、和多都美浦、式社前迄測る。此より一支引入。式内大島神社（俗に和多都美大明神と云）。 同所に式内波良波神社、外に式外行先殿（又曰浜御子社）。 樫ノ木崎、モトエ鼻に繋終。それより乗船。	一九二
9	（7）	同	同	同	逗留測。仁位村海辺仁位川尻より右山沿海順測、仁位川尻を渡、仁位浦、段尻鼻、有麦村（又卯麦村とも）、糠ノ浦、翁崎、翁浦、有麦川小流、小路ノ浦、ゴソノ鼻、鈴木崎、ソウ崎浦、唐船崎、中山浦、柿ノ木崎、佐保村、シラメ川小流、斧口崎、佐志賀村（飛地）センニウドウ浦、笹葉浦、同浦奥に繋、二俣浦、笹葉鼻、スンクル鼻にて打止終。	一九二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
10	（8）	嵯峨村	同　対馬市	給人佐伯彦左衛門 給人田中治郎左衛門	佐志賀村地内、笹葉口スンクル浜より右山沿海、乙平浦、コツポウ浦、二俣浦、岩井松崎、平城浦、ススラ浦、貝口村、寺浦、手無浦、貝口浦（在所）小路浦口を歴て黒島へ渡り一周測。小路浦口より佐志賀村（飛地、在所は入江を隔て向にあり）小路浦、ヲテンガ島の瀬戸を歴てヲテンガ島一周測。ヲテンガ島の瀬戸よりホシヤル浦、金掛崎、嵯峨村（飛地）板倉崎、板倉浦、板戸崎、ヲウシ浦（深入江）、貝鮒村（飛地、在所は入江向にあり）立石崎にて終。	一九二
11	（9）	今里村	同　対馬市	下知役大石又六 根〆只七	貝鮒村飛地立石崎より右山沿海順測、師弟崎、丸島遠測、船頭崎、泉島遠測、船頭浦、有松浦、深浦を歴て山越横切外海へ出畑印残、又深浦より深浦内、ユリコシ浦を歴て又外海へ横切里印を残、ユリコシ浦より長刀崎、二子島（大、小遠測）、犬越鼻（此浜より砥石出る。カネギの砥石と云て諸国へ出ると云）、横切残里印に繋、又横切残す畑印繋、小島瀬戸を歴て横島へ渡り一周測。地方小島瀬戸より唐洲村、加藤浦、スゲ崎、唐洲崎、タヽコエ鼻、廻り村、段三郎鼻、牛島瀬戸に繋終。それより乗船。	一九二
12	（10）	吹崎村	同　対馬市	百姓吉蔵 甚右衛門	今里村海辺、中川、町見川落口尻より右山沿海、加志村道カ印を残、ジヤウカキ鼻を歴て島へ渡、志賀島一周測、志賀大明神小社あり。加志村地方ジヤウカキ鼻よりナゲヒラを歴て島へ渡、経島一周測。又ナゲヒラより、加志川小流、ヲクリ浜、加志道加印を残、大島渡口を歴て島へ渡、大島一周測。地方渡口より深里村、入江鼻を歴て島へ渡、黒太郎島一周測、又入江鼻より吹崎村、ツルヤリ浦、島フリ浦、蜷浜崎、犬ノ縊ノ腰に至。此より裏海へ横切首印を残、犬ノ縊ノ腰より犬ノ縊崎を廻て横切残首印繋、瀬戸崎、深ブラ浦、崩レ松崎、吹崎浦、吹崎人家前に打止終。又、黒瀬村持馬把島（一周測）、同村持沖島（大）（中）一周測。又、吹崎村持ヘタ島一周測。	一九二
13	（11）	同	同	同	雨天逗留。	一九二
14	（12）	今里村	同	下知役大石又六 根〆只七	吹崎村人家前より右山沿海、箕形村、尼ヶ崎、タガエ浦、字チノキ浜、加志村・海辺追分に繋、当国沿海終。又加志村・海辺追分より街道測、加志村へ横切、今里村へ測。加志村、加志川端を歴て式社へ打上げ神前迄測る。式内太祝祠神社（俗曰加志大明神）。又加志川端より引込、式内敷島神社。又加志川端より加志川を渡、加志村（在所）を歴て海辺へ打下、加印に繋。加志村（在所）より今里村、海辺へ出、カ印に繋終。	一九二

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
15	（13）	小茂田村	同　対馬市	下知役斎藤太仲 鈴木善蔵	今里村海辺中川尻より街道測、中川小流、阿連坂を歴て阿連村海辺に繋。又、小茂田村海辺より府中街道測、佐須川（此川所々にて渡る）、右樫根村、左下原村、同地内鶴野（此は枝郷にあらず。正徳年中此地より白銀を多掘出せり、其頃は繁盛にて家千軒余ありと、即今は鉛を少々宛掘得と云。今少の住居は府中町人出張也と。傍に観音堂あり）。樫根村内佐須川瑞、式内銀山神社（俗曰六所大明神）。樫根村枝部、下原村枝若田（此所より若田石と云硯を出す、当国の産物）、字坂尻にて打止終る。	一九二
【本隊】						
5月16日	（14）	府中城下横町	同　対馬市	塩津庄右衛門 八木喜右衛門 竜井与八郎	【本隊】鶏知村字ホゾリ坂、洲藻道追分より巡検使街道測、左同村川向、曹洞宗銭宝山蔵泉寺在、鶏知川、字焼松原、字大坂、字イノキ河内ノ段、字在庁落、字亀坂、（山測打上）、字十文字、府内領、字七曲坂、字笠谷、右佐須道追分を歴て字下屋敷、城下入口、河津道追分に繋終る。【支隊】下原村内字坂尻より府中街道測、佐須坂、松原峠、佐須峠、此より有明山へ引上げ、有明山頂に至て山測の印を残置（此日濛気大に深して遠山不見）。佐須峠より府中領、鶏知・佐須道追分に繋終。大手分四十四日にて両手出会。恒星測定。	一九二
17	（15）	同	同	同	有明山、又遠見番所へ登て山々を測。濛気深して遠山は不見。当領主より、国産を被贈。	一九二
18	（16）	同	同	同	長持其外荷物船積。又、有明山へ登、濛気深不見。	一九二
19	（17）	同	同	同	順風ならず逗留。	一九二
20	（18）	同	同	同	波高にて出船ならずと云。逗留。	一九二
21	（19）	同	同	同	波高にて出船ならずと云。逗留。	一九二
22	（20）	平戸島　田介浦	同　平戸市	船中泊	府中出帆、順風。（壱州勝本浦船着と舟頭兼而極し所）、平戸田介浦へ着。	二〇四
23	（21）	五島列島 宇久島 平村	同　佐世保市	油屋藤助 山田紋九郎 亀屋与左衛門	平戸領田助湊出帆。（此朝平戸より江戸書状相届、坂部へ不幸申来る）。宇久島（即五島領）平村着。恒星測定	二〇六

祖母のこと

伊能　洋

私の祖母についてお話ししようと思います。

祖母、伊能孝は慶応三年に、下総国佐原村（現香取市佐原）の伊能忠敬の旧宅に生まれ、明治、大正、昭和と四代を生き抜いて八十八歳の天寿を全うしました。忠敬から四代目の景文の五人姉妹の長女として誕生し、婿養子を迎えた孝は、生まれた畳の上で生涯を終えるという、当時の女性としては珍しい経験をした人でした。

さて、私と祖母の関わりはというと、先の戦争中、学童疎開ということが行われ、東京の原宿に住んでいた私は、家族と離れ一人佐原に疎開することになり、一九四五年の敗戦まで三年間を祖母と生活を共にしたことです。

そしてその後の私の人生に大きく影響を受けたさまざまな事を学ぶことになります。

忠敬の遺品を前にする祖母・孝

孝の生涯の大仕事だった先祖伊能忠敬の遺品の継承と事跡の顕彰についてお話ししなければなりません。

祖父は私が生まれた二年後に亡くなったので記憶がありません。祖父の没後は家業もたたみ、祖母が手伝いの女性と家を守っていましたが、旧宅には日本中から毎日のように見学者が訪れていました。

当時、旧宅は文部省から史跡に認定され、遺品の主なものは重要文化財の指定を受けていたものの、何をしてくれるでもなく、私物のままで、その管理保守の一切を孝が担っていたわけです。

旧宅の見学者のことを我が家では「地図見」（ちずみ）と呼んでいて、個人から団体、さまざまな職業年齢の方が訪ねて来られました。

中学生に測量器具（象限儀）の解説をする孝

孝（祖母）が無償の天職としていたのは、現在の学芸員の仕事と言えましょう。

「地図見」が見えると、書斎の縁側に測量器具の数々を並べ、壁には畳一枚もある地図を掛けて、名調子の説明が始まるわけです。

忠敬の七つ玉算盤を説明する孝

遺品の大きなものは、その都度「おくら」と呼んでいた文庫蔵から出し入れする手伝いを私がしていました。見学者は予約なしの方も多く、その対応はさぞ大変だったと思いますが、祖母が愚痴をこぼしたり、嫌な顔を見せたことはありませんでした。

孝の生年と忠敬の没年の差は49年しかなく、孝にとっての忠敬は先祖というより祖父に近い存在で、ことに親近感を持っていました。

名調子で解説する孝に聞き入る子どもたち

戦後、名家の多くが窮乏して、貴重な遺品が散逸するということがよくありました。我が家も御多分に漏れず父が勤めていた三井物産は解体され、佐原に保有していた田畑も農地解放で没収されるなど、経済的には大変な時代でしたが、忠敬の膨大な遺品が欠けることなく守られたのは一重に孝の強い意志と、それを受け入れて、遺品・旧宅を公のものにするべく努力した母、多嘉子など女性たちの力に依るところが大きかったと考えています。

佐原の伊能忠敬の旧宅（昭和初年頃）

一九六一年（昭和36年）に、国・県・市の協力を得て、旧宅の敷地内に耐震耐火の「伊能忠敬記念館」が建立される運びになり、遺品の大部分を佐原市に寄贈、土地、旧宅は市に買上げて頂くことになりました。私の両親の積年の願いが実を結び、伊能家としては一安心というわけです。

現在は一九九八年（平成10年）に小野川をはさんだ旧宅の真向いに、新『伊能忠敬記念館』が学芸員3名を擁する堂々たる市立博物館として開館され、年間7万人に及ぶ「地図見」が来訪されるほどになり、地下の祖母はどれほど喜んでいることでしょう。

なお、二〇一〇年（平成22年）には記念館収蔵の遺品、地図、文書、測量器具など二三四五点が国宝の指定を受けました。

わんか羅針（杖先方位盤）

半円方位盤

忠敬の読みは「タダタカ」が正しいのですが、我が家では敬愛の念を込めて「チュウケイ先生」と言い習わしていました。佐原の人も殆どが「チュウケイ先生」でしたが、現在では「チュウケイさん」が多いようです。

深川富岡八幡宮の忠敬像、測量旅行出発にあたっては必ず当宮を参拝していた。

祖母のことに話を戻しましょう。

祖母は小学校卒で学歴はありませんでしたが、実に何でも知っている人で、手紙なども左手に巻紙を持ち、すらすらと宙に筆を走らせる様は子ども心にも見事でした。

当時の旧家ではよくあったことですが、旧宅の離れには旧制佐原中学校に通う親戚の寄宿生が絶えることがなく、祖母の面倒見の良さは格別でした。

常に若い人と接していたことも、祖母が若さを保っていた要因の一つだったかも知れません。私が世話になった頃はすでに70代も後半でしたが、背筋も伸びていて年寄りのイメージは全くありませんでした。

旧宅の千坪余りの敷地内には野菜畑や花畠も方々にあり、野菜類の大方は手作りのもので間に合いました。都会育ちの私が学んだ植物や農作業の知識の殆どが佐原時代のもので、それが今、俳句作りにどれほど役に立っていることか、その頃は考えもしなかったことです。

花畑には四季の花が常に咲き変わり、自然に季節にも敏感になりました。

かわいらしい「地図見」さんらに挨拶する孝

商家の主婦だった祖母が玄人はだしで農作業に精通していたことに驚きます。納屋には農具の一式が揃っていました。

私は堆肥作りから、天秤棒で肥担桶をかつぐことまで教えられ、里芋の取入れでは、芋茎の汁で爪の中まで黒く染まることも知りました。

梅の実の季節には、むしろを広げての梅干作り、秋には箕を振っての豆のサヤ取りなど一幅の絵のように思い出されます。

毎朝の味噌汁の実は朝摘みの小松菜や葱などで、朝食の前には何を置いても一粒の梅干しで朝茶を一杯頂くのが、ならわしでした。

因みに当時祖母が丹精していた野菜類をざっと思い出してみると、トマト、胡瓜、茄子、人参、大根、蕪、南瓜、里芋、薩摩芋、蚕豆、いんげん、十六ささげ、枝豆、さやえんどう、小松菜、芥子菜、ほうれん草、葱、韮、茗荷、紫蘇、唐辛子など、

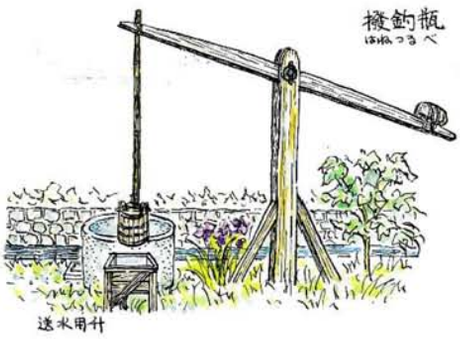
花では梅、芍薬、牡丹、菖蒲、アイリス、立葵、紅蜀葵、金盞花、鶏頭、紫蘭、朝顔、小菊類、コスモスなど実に多彩でした。

ことに私の部屋の濡縁の下に咲き乱れていた秋海棠は、両親の許を離れていた私の郷愁の念を誘ったものでした。

なお敗戦直後の東京は食糧難で、月に一度は小学生の私が一人満員の汽車に乗って、リュック一杯の野菜を東京の家まで運んだものでしたが、今の小学生を見ていると、自分のことながら信じられない思いです。

井戸からの水汲みは毎日の私の仕事で、今考えると台所の大きな水瓶、外風呂の風呂桶を満たすのは結構な重労働でしたが、いっぱしの男になったような気分でした。

井戸は土蔵の横にあった撥釣瓶で、現在は地方でも見られなくなったのが残念です。井戸端には無花果が茂っていて、柿と共に秋の楽しみでした。



全てに勤勉な祖母でしたが、まことに大らかな面も持ち、夏の夕べには母屋から10mほど離れて中庭の一隅にあった外風呂から、腰巻一枚で飛び石の上を下駄を鳴らして帰ってくるのが日常のことでした。

母屋

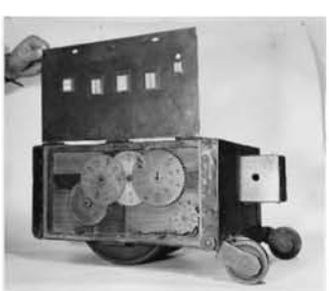
用水と文庫蔵

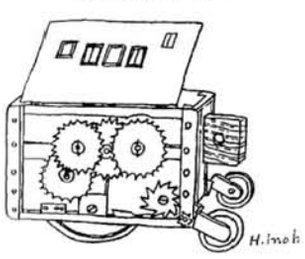
漱石の「吾輩ハ猫デアル」の中に苦沙弥先生と細君との、細君の頭の真中の禿についてのユーモラスなやりとりがありましたが、そう言えば祖母の頭も同様で、当時の髷を結う女性によくあることだったのかと納得しました。

その禿は付け髷を乗せて隠していました。苦沙弥先生の細君と祖母は、ほぼ同年代だったようです。

さて、とやかく言っても小学生だった私はいたずら盛りで、測量器具の一つである量程車（平地を曳いて距離を測る箱車）にまたがって書斎の縁側を走らせて遊び、祖母に大目玉を喰らったりしていました。

現在記念館に収められている量程車は国宝の一つ、白手袋で扱われていて何とも言えない思いです。


国宝の量程車



筆者によるイラスト

祖母は薬草の知識も豊かで、切傷の止血には弟切草の葉、腹痛にはセンブリやゲンノショウコが煎じられ、急な耳の痛みにはユキノシタの汁が即座に利いて驚いたものです。

全て敷地内に自生していた植物で、昔の女性が持っていた生活の智恵は深いものでした。

また、手先も器用で、お手玉や姉様人形などお手のものでしたが、ことに七彩の絹糸をかがっての手毬作りでは、見当だけで正確に麻の葉模様を刺して行くのに見惚れました。

百人一首や花札もよく取りましたが、新しいものにも好奇心が強く、トランプ、ダイヤモンドゲーム、チェッカーなどもすぐ覚え、私たちともよく遊んでくれました。

三人分もの仕事をこなしながら、遊び心も失わなかった祖母の心の余裕がどこから生まれていたのか未だに不思議です。

旧宅の敷地内には店舗と母屋の他に文庫蔵をはじめ、二棟の収納庫、薪倉（たきぎ）、油小舎（菜種を絞る作業所）、味噌（みそ）、炭部屋、麹室（こうじむろ）、離れと呼んだ一軒屋、氏神様などの建物群がありました。

祖母はそれらの全てを熟知していて、ことに鉄の大きな錠前が珍しかった文庫蔵には、長持、鎧（よろい）櫃（びつ）、和箪笥、船箪笥、20人前の客膳一式、伊万里の大皿、高張提灯、山積みされた書籍の箱、そして大小の地図の箱、測量器具の数々など、道具屋が見たら涎（よだれ）を流すであろう品々が所狭しと積まれていましたが、祖母が探し物に手間取るということはありませんでした。

忠敬の遺品以外の大方の品は、祖母の没後に散逸してしまいましたが、これも時代の流れで止むを得ないことでした。

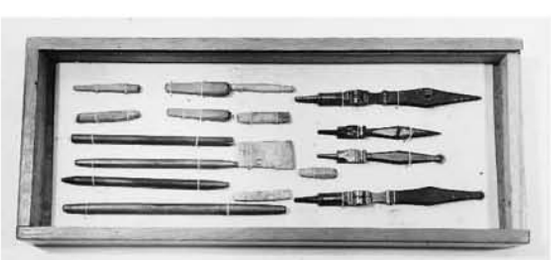
長々と祖母・孝についてお話ししてきましたが、決して恵まれた晩年ではなかった祖母の常に屈託なく生き生きと何かをしていた姿しか浮かびません。

祖母の特質は天性の明るさかと思います。

慶応に生まれて八十八年を生き抜いた祖母の一生は、たまたま忠敬の子孫として生まれたことだけではなく、一人の日本の女性としてまことに興味深いものがあります。

全ての人に優しく接することができたのは、常に前向きに生きる姿勢から生まれたものでしょうか。

祖母の没年に近付いてきた孫として、省みることの多い私ですが、今さらながら少年時代に「オパアチャマ」に学んだくさぐさの大きさに驚いています。終



忠敬特注による烏口のセット

写真・イラスト提供：伊能洋
測量器具の解説：伊能忠敬記念館ＨＰより

※本稿は二〇一六年6月～12月の「しんぶん赤松」に連載されたものを再編集したものである。

伊能忠敬と私
大河ドラマ〝一押しシーン〟に！

戸村　茂昭

はじめに

今年は、日本の領土確定に特筆すべき事績を残した伊能図が完成して二〇〇年という記念すべき年にあたるので、是非とも今年の大河ドラマに伊能忠敬を取り上げて欲しい、と数年前にたくさんの署名を集めたりしたことがある。

残念ながら、今年は「渋沢栄一」の「青天を衝け」、来年は「鎌倉殿の十三人」ということで、伊能忠敬の登場はお預けとなってしまっている。そのNHKは、大河ドラマの代わりに「歴史秘話ヒストリア」で「世界を変えた地図ものがたり」という番組を先日（令和三年一月六日）放映し、「伊能図をもとにしたシーボルトの日本図が、ロシアと日本との領土の境界確定に使われた」と説明して、大河ドラマ化運動に若干ではあるが報いたようである。

本稿は、もし自分が大河ドラマをプロデュースする立場ならば、是非とも〝**一押しシーン**〟に取り上げたいと独断で考えた場面の紹介である。出典は、断らない限りDVD版『伊能忠敬測量日記』（イノペディアをつくる会）に拠っている。

一．南鐐一片遺しけり

寛政十二年閏四月二十三日、第一次（蝦夷地）測量の往路で、白河城下の止宿先となった因幡屋の主は、図らずも忠敬が隠居前に事業家として活躍した佐原で酒造していたことがある既知の人物だった。そのことから宿の主の茂兵衛とねんごろになり、酒肴を以って饗応してくれた。そこで、そのお礼に、忠敬は茂兵衛の女房に一枚の南鐐銀を宿代とは別にチップとしてさし上げた。「**酒肴を以って饗応しまま女房に、南鐐一片遺しけり**」と記録している。南鐐銀一枚は小判の八分の一に相当する値打ちがあったというから、現在の価値で三～四万円ということになる。忠敬先生、よっぽどうれしかったので大枚を張り込んだようである。大河ドラマで謹厳実直な忠敬と美人女将との艶っぽいツーショット映像が流れたとしたら、視聴者の話題になるであろう。

二．翌朝雲間小測

享和二年六月十一日、忠敬は第三次（出羽・越後）測量に出発した。その出発当日の止宿先である「草加宿」では、既に二次測量の際に天体観測は実施済みであるにも関わらず「此の夜、曇る。**翌朝雲間小測**」と記録している。この，翌朝，が何時ごろかと言えば、測った恒星が晩秋の夕刻に南中するペガスス座の星々（離宮四、離宮二～室宿二、室宿一、[測地度説]より）なのであるから、推歩先生(高橋至時が忠敬につけたニックネーム)の学んだ天文暦学の知見（観測した恒星が南中する時刻）によれば、翌十二日未明の午前三時頃ということになる。

まさに、伊能測量とは「昼は地を量り、夜は天を測る」という、寝る間も惜しんだ測天量地の旅であったので、これまでの大河ドラマには登場しなかった科学的な測量場面の映像になるであろう。

なお、深夜から未明になって天測したケースは、次の通り枚挙に暇(いとま)がなかったのである。

・一次測量　寛政十二年

十月六日　吉岡「七日晨少晴測量」

十月九日　舟廻「翌十日晨測量」

・三次測量　享和二年

六月十四日　間々田「此夜暁に測量」

七月二十四日　能代「子午線午後に出来上がる」

※その晩、80個の恒星を暮五ツから翌日未明まで測った([北極高度測量記])。

九月二十三日　太郎代浜「此夜曇天。暁七ッ頃。測量」

十月十七日　本庄宿「此夜曇天。雲間に漸六七星測る。九ッ頃より雨、至暁。」

・四次測量　享和三年

四月十六日　宮崎村「此夜曇天。十七日暁晴て測量」

・五次測量　文化二年・三年

五月二日　鳥羽城下「此日未明、市野、日和山にて遠山を測る。測人高橋・市野也。」

五月六日　鳥羽湊「此夜木星、四小星凌犯を測る。暁に至る。」

九月二十日　坂本村「平山・佐藤は未明に比叡山四明ケ岳へ登りて山々を測る」

二月二十二日　宮浦「此夜曇、雲間に測量。」

十月十日　敦賀町「暁七ツ半後晴間測る」

・七次測量　文化七年

七月十日　山川津「木星測、暁に付一同疲れ」

七月二十六日　片浦村「此暁木星を測」

八月二日　上甑島里村「此夜木星と二小星凌犯あり。（中略）暁迄測」

三．夢に堀田侯に謁す

三次測量の享和二年七月二十六日、能代におい

て「予二十五日より病気、此夜**夢に堀田侯に謁す**」とある。

堀田侯とは堀田摂津守正敦で、寛政二年から天保三年までの四十二年間という長期にわたって若年寄を務め、伊能測量を幕府の中枢で支えた人物である。出自が仙台藩伊達家で、忠敬の妻お信の父である仙台藩藩医の桑原隆朝とも親しい間柄ということから、忠敬の後ろ盾でもあったのであろう。このような文部科学省的な江戸幕府の政治の場面を、大河ドラマを介して視聴者に紹介できる筈である。

四．芭蕉塚発見

『測量日記』は、測量の業務日誌であるから、基本的には測量に無関係な私的なことは書かないのであるが、なぜか測量業務には関係なさそうな芭蕉塚を発見したことが、七次測量と八次測量では記録されている。現在でも残っているその句碑の前に佇む忠敬の映像は、大河ドラマ映像として絵になるだろう。

・七次測量

文化六年十一月十二日　明石市柿本神社
蛸壺やはかなき夢を夏の月　笈の小文収録

・八次測量

文化九年九月二十六日（支隊）
梅が香にのつと日の出る山路かな　炭俵収録
文化九年九月二十七日
世の人の見つけぬ花や軒の栗　奥の細道収録
文化九年九月二十九日（支隊）
川上とこの川下や月の友　続猿蓑収録
文化九年十月五日（支隊）
月影や四門四宗もただひとつ　更科紀行収録
文化十年九月十六日
目にかかる雲やしばしの渡鳥　渡鳥集収録
文化十年十二月八日（支隊）
さまざまのこと思い出すさくらかな
文化十年十二月廿日
梅が香にのつと日の出る山路かな　炭俵収録
文化十一年三月十三日（支隊）真言宗相染院
境内に芭蕉塚というあり
文化十一年四月二十六日
霧時雨富士を見ぬ日の面白き　野ざらし紀行
文化十一年四月二十九日　姥捨山
おもかげや姨ひとりなく月の友

五．富士を測る

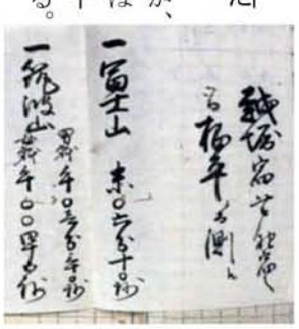
・本州最北東端　三次測量の享和二年六月二十日、上野国越堀宿～芦野宿間栢平（富士見峠）から測量。（「山嶋方位記」第二巻）

「越堀宿・芦野宿之間栢平ニ而測ル。
一．富士山　未〇六分十〇秒
一．筑波山　男躰　午〇壱分三十秒
　　女躰　午〇〇四十五秒　」

・関東最東端　二次測量の享和元年七月二十六日、下総国銚子湊（千葉県銚子市）。

「此早朝、日出に犬若岬において慶助、富士山を測。着後十九日より富士山の方位を測らんと日々手分し、高きに升り遠へ出しけれど、日々蒙気おおくして見えざりき、此朝、**富士山を測得たり**。そのよろこび知るべし。（予が病気も最早全快に及べり。）（申一九分二五秒）」

何故、病気が全快するほど、喜んだのであろうか？銚子市にある記念碑の文言に依れば「忠敬はこの地で伊能測量の方法による**測量の精度を確認できた**から・・・」としているが、筆者の見解はこれとは若干ながら異なる。



山嶋方位記
香取市伊能記念館所蔵

芭蕉翁面影塚（長野県千曲市）

実は、この地に至るまで導線法と天体観測による測量はできたのであるが、今一つの「交会法」による測量の目標とする高山や島影がこの房総半島の外房には一切ないことから、関東最東端にあたるであろうこの地を地図の上で矛盾なく描けるか心配だったのであろうと考えられるのである。このような具体的な心配事がこの地での富士山測量で払拭できることになったので、持病が全快するほどの喜びとなったのであろうと考えるのが妥当と思うのである。

・本州最西南端　五次測量の文化二年五月二十日、志摩国国府村海岸（三重県志摩市）。

「朝晴天、六ツ頃国府村海岸に出て富士山を測る。（丑二五分五〇秒より丑二六分）」

このように富士山の方位を東西南北の遠方から測っていることが、国絵図ではあり得ない伊

能図の特徴で、大河ドラマにすることによって、地方の町おこしにも貢献できるであろう。

六．後世永々英名を御残し候事この時に候て

四次測量、享和三年九月二十二日、いわゆる糸魚川事件にあたり、長岡城下で受け取った、師匠高橋至時からの親身なる書簡の一節である。

伊能忠敬銚子測量記念碑（銚子市）

令和元年建立の記念碑（志摩市）

「（上略）元来御存知の事にて申迄は無之候えども、即今、天下の暦学者各眼を拭い、足下の地図成就の期を、日を算え待候事にて、**後世永々英名を御残し候事此時に候**て、又是を以、世上暦家の机上腐臭の故態を破し、精密の一家堅く相建候も　今の時にて、実に足下の一身、天下暦学の盛衰に係ると可申候。加程の大事業の将に成んとするの間、一小事にて万々一中絶に成候はば、何程の残念と思召候哉。（下略）」

まさに名文である。病床にありながら、『ラランデ暦書管見』を執筆中の高橋先生の息使いとともに、弟子である忠敬への愛情がほとばしっており、ドラマの最大の見せ場になることであろう。

七．地図を精敷認候術は

「第一次測量幕府折衝編」寛政十二年閏四月五日の条に、忠敬は次のように記している。

「（上略）松平信濃守様より我等蝦夷御用之御沙汰猶御尋之儀有之候由に付、為御使、渡辺清蔵殿態々御遣し被下御尋に付、左に書付差上候。（中略）**地図を精敷認候術は、第一は北極出地度、其次は方位**に御座候。（下略）」

この書きつけこそ、伊能測量を実現させることに成功した忠敬自身のプレゼンテーションであるから、大河ドラマでは重要な場面になるであろう。

おわりに

このように、伊能測量には、これまでの覇権争いが中心の大河ドラマとは一線を画して、江戸時代という、科学立国日本の黎明期における興味の尽きないドラマが満載であるのだから、大河ドラマにすれば“地上の星”という歌で一世を風靡したあの「プロジェクトX」という番組のように、視聴者に自信を与えることが出来る番組にすることができるであろう。

是非、小生の目の黒いうちに、伊能測量が大河ドラマに登場して欲しいとあらためて願うものである。（了）

『伊能忠敬測量日記』第７巻　享和３年９月２２日「高橋先生戒告状部分」
伊能忠敬記念館蔵伊能忠敬と伊能図の大事典をつくる会制作ＤＶＤより

白山を測った「地平経儀」

河崎倫代

加賀藩測量で「地平佳儀」を使用

享和3年（1803）の加賀藩測量関係史料を読み直していた時に、ふと「地平佳儀」という測量器具が気になった。「為測量御用天文方高橋作左衛門殿弟子伊能勘解由殿浦方御巡行ニ付前後諸事覚書」（石川県立図書館蔵「田中文庫」）という、測量隊の付添案内役を務めた十村手代たちの報告書の中に3回出てくる。

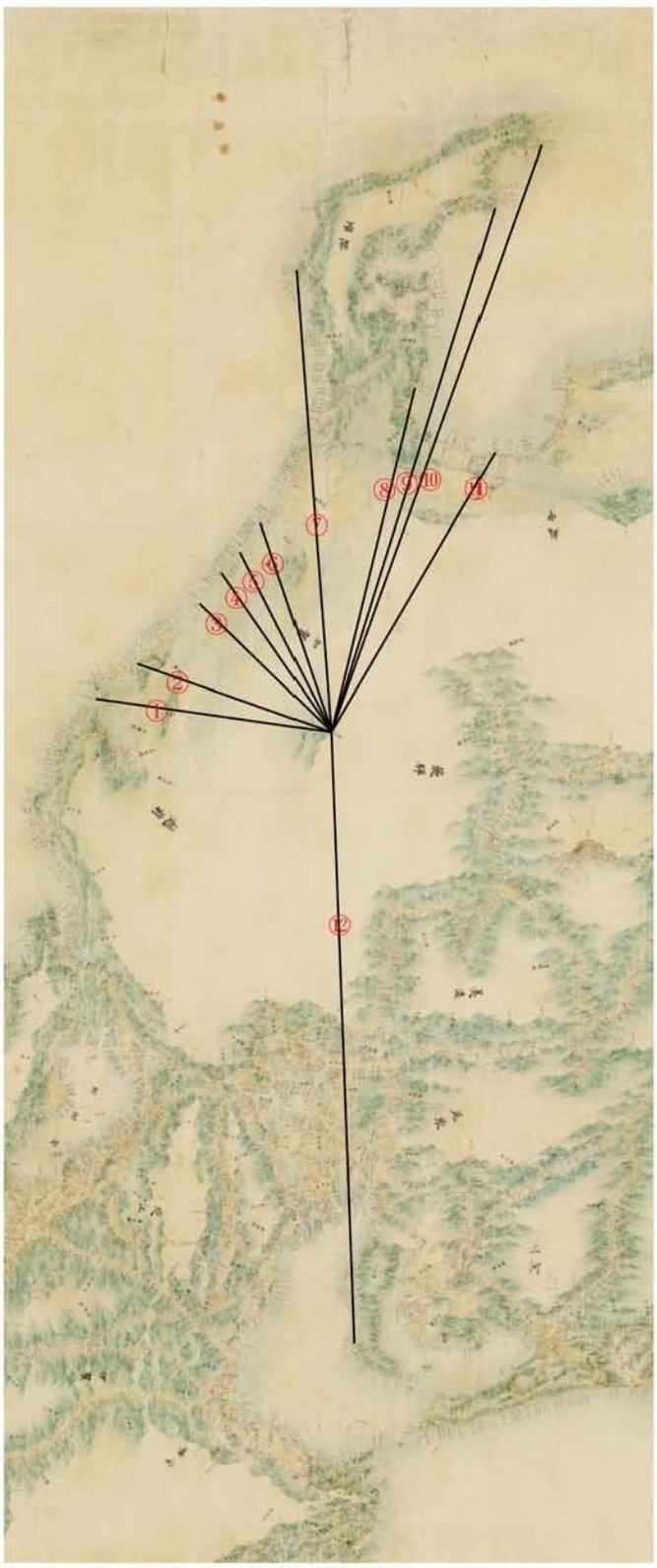
①7月6日　瀧村領山の崎にて宝達山・海士崎・五石ケ峯等を遠目鏡で見て、磁石様の物を取り出し、方角・山の高低を見た。「是は地平佳儀と申す物」と手代共へ申されて、それで測量された。

②7月7日　安部屋村領の出崎にて、大福寺山・海士崎等を、地平佳儀で見請けられた。

③7月8日　めなふ浦と申す所で、鷹巣岩等を地平佳儀で見請けられ、出張っている所は郡蔵が留書されていた。

この3回はいずれも、能登半島外浦海岸を手分測量した平山郡蔵隊の様子を記している。

『山島方位記』を詳しく見ていくと、測定値だけでなく、使用した方位盤も記録されていることが分かった。忠敬隊は「半」「甲」「乙」「小」の4器を、平山隊は「中」「丙」「丁」の3器を使用していた。「半」は「半円方位盤」、「中」は「中方位盤」であろう。



国土地理院蔵「伊能中図」（中部近畿）に加筆

「地平佳儀」とは？

「地平佳儀」は、付添案内役の十村手代が平山郡蔵から聞き取り記録した際に、「佳」と書き誤ったと考えられ、本来は「地平経儀」であろう。大谷亮吉著『伊能忠敬』や保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績』によると、「地平経儀」は「大・中方位盤」のことで、伊能忠敬使用のものは現存していないという。『測量日記』や各地の測量関係史料に「地平経儀」が登場する例があるかどうか知らない。これを機に、各地の情報を寄せていただければ有り難い。

『測量日記』によると、蝦夷地測量出立前に、象限儀・**新製方位盤**（径二尺五寸）・子午線儀の3器は人足に運ばせ、**方位盤**（径一尺二寸）は垂揺球儀・望遠鏡・間縄・書物・算盤・筆墨・紙類等とともに長持に入れて持参する、と記している。この**新製方位盤**が「大方位盤」、**方位盤**が「中方位盤」であろう。

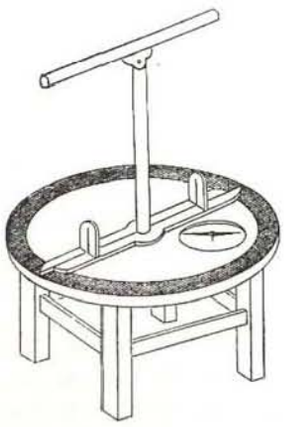
しかし、第4次測量には「大方位盤」を持参しなかったようで、『山島方位記』には「大」の文字は無い。前述のように、「中」

方位盤、「半」円方位盤、数器の杖先方位盤で測った方位が記されている。

越中国射水郡高木村の和算家・測量家石黒信由は、8月3日夜の放生津での天文測量を見学し、翌日の測量にも同行して、忠敬と親しく交流したことを自著に「測遠用器之巻」として追記している。これまで、小方位盤（杖先方位盤、彎窠羅針、小方儀）とその図が注目されてきたが、図はないものの「地平経儀」についても、かなり詳しく記述しているので、その部分を紹介したい。

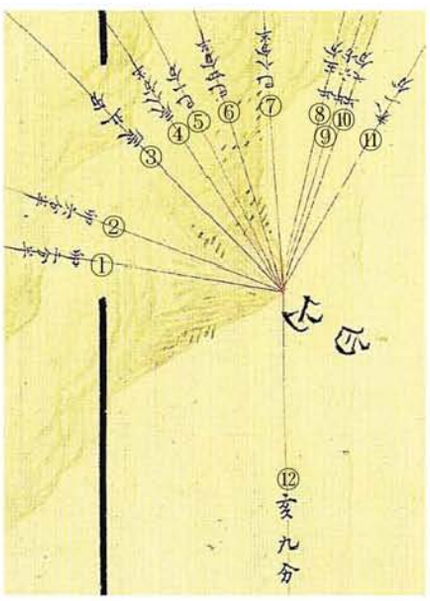
地平圭器ト云モノ持参ナリ。其製作ハ、径一尺計リノ磁石盤面ヲ三百六十度ニ割リ、其一度ヲ又厘尺ノ如クニ六ツニ割リ、磁石ハ片隅ニ虫長三寸ハカリナルヲ伏せ、前ニシルス所ノ先師中田氏ヨリ伝ル隅伏磁石盤ノ如クナリ。扨、右磁石盤ノ上ニ、輪ヲ以笠骨ノ如クニ組ミ、其上ニ天衡ノ定規ノ如クニシテ遠目鏡ヲ仕掛ケ、向ヒノ遠山ナトヲ望ミ視ルモノナリ。此磁石盤目盛ハ常ニ異ナリ、東西南北四方ニ配シテ、一方九十度ヅヽトスルナリ。方位ノ見ヤウハ、北ノ正中ヲ初度トシテ、或ハ北ノ四十五度七分ナトヽス。或ハ東ノ何十何度何分ナト記スナリ。是、地図ヲ画クノトキ方々ノ山々ヲ繋印ナルヘシ。

『測遠要術』附録「測遠用器之巻」



「地平経儀」大谷亮吉著『伊能忠敬』より

「半円方位盤」千葉県香取市伊能忠敬記念館蔵



【白山への12本の方位線】

―ペイレ氏旧蔵伊能中図より―

①卯二分半：三国湊（坂井市）
②卯六分半：塩屋村（加賀市）
③辰五分：山口釜屋村（能美市）
④辰八分半：平加村（白山市）
⑤巳一分：相川村（白山市）
⑥巳四分半：宮腰町（金沢市）
⑦巳八分半：笹波村玄徳岬（志賀町）
⑧午五分：泊村・小杉村界（氷見市）
⑨午六分：小木湊日和山（能登町）
⑩午七分：小泊村（珠洲市）
⑪未一分：神通川河口（富山市）
⑫亥九分：奥田村（愛知県美浜町）

白山を測った地平経儀

この機会に、霊峰白山について、伊能中図に描かれた方位線から知った意外な事実にも触れておきたい。

ペイレ氏旧蔵（現NISSHA株式会社蔵）伊能中図には白山への方位線が12本描かれている。8本は石川県内から、2本は富山県内から、1本は福井県内からである。ところが残りの1本は、ほぼ真南に伸びている。ずっと辿っていくと、なんと知多半島西岸の奥田村近辺に至った。驚きであった。その後、三重県鳥羽市からも白山が見えたことが『山島方位記』で確認できた。愛知県・三重県の海岸から、今も白山が見えるのだろうか？

富士山ばかりではない。各地の名峰が意外な場所から見えていたという事実。伊能忠敬の測量行は、今年完成二百年を迎える「伊能図」の精緻さ、華麗さにとどまらず、各地の二百年前の光景に思いを膨らませる楽しみを日本中に残してくれたといえよう。

コロナ禍の中、ちょっとした旅行もままならない日々が続くが、伊能図を広げて二百年前の日本列島と現在とを往復しつつ、図上旅行を楽しむこともできるのではないだろうか。

伊能図完成二百年・地方展
金沢海みらい図書館で開催

石川県支部　河崎倫代

会報92号で予告したように、２０２１年１月７日～12日、金沢海みらい図書館で「伊能忠敬測量隊、宮腰往還を行く―伊能図完成二百年―」を開催した。

海みらい図書館は、享和３年（１８０３）、第４次測量隊が量程車を曳いて金沢城下尾張町の宿所まで往復した〝宮腰往還〟沿いに立地する。

開催内容

①伊能図完成二百年展示
・伊能大図復元図
　石川県・富山県部分
　国土地理院北陸地測部作成
　フロア展示（透明シート）
・東博伊能中図（複製８枚）
・御用旗・肖像画（複製）
・『測量日記』
　伊能図＋簡略翻刻文
・『館報入船山　第七号』
・その他
　宮腰往還今昔
　金沢市域の宿所紹介
　量程車紹介

②講演会
・日時　１月９日（土）
・講師　石川県支部会員
　寺口学・室山孝・河崎倫代
・過密を避けるため、30名限定。
　事前申し込み。
・レジュメ配布、映像で。

③ミニ歩測大会
・日時　１月10・11日（日・祝）
・対象　小学５～中学３年生
　近隣３小学校の６年生全員にチラシ配布

展示会場

①伊能図完成二百年展示

②講演会

③ミニ歩測大会

・図書館ギャラリーに10メートルのテープを貼る。

・テープ上を往復して、往路と復路の歩数を平均し、10メートルを平均歩数で割って、各人の歩幅を出す。

・会場内にテープで設置したルートを往復して、往路と復路の歩数を平均し、各人の歩幅を掛けて、距離を出す。

・設置テープの距離（38.86メートル）に近い人から順位を付けて賞状を渡す。

・参加者は6名。大雪とコロナ禍の影響で少なかった？

1位は+20㎝の誤差でした。
賞状には「今後は、忠敬さんの孫弟子として、大いに活躍されることを期待いたします」と記しました。

海みらい図書館展を終えて

初日と二日目は超のつく強風。三日目は一夜に30㎝の積雪。半地下の会場からは近くの信号機も低く見えました。「伊能図完成二百年」を記念する、日本で最初の伊能展だったのですが…。

会場は広く快適で、過密になることなく、講演会も30名限定の事前申込制でした。館長・担当者はじめ図書館スタッフの皆さまに大変お世話になりました。

支部会員の室山・河崎が連日詰め、寺口・相良・安田会員も参加・協力して滞りなく終了しました。以上、今後、日本各地で開催されることを期待し、その経緯・内容を簡単に紹介しました。

各地での企画・実施に際して、講師派遣・展示品等の貸出・支援が必要な場合は事務局にご相談ください。お待ちしています。

「伊能忠敬笹山領探索の会」新聞第９号を発行

伊能忠敬笹山領探索の会の加賀尾宏一さんから、２０２０年12月１日発行の「新聞第９号」が届きました。メイン記事は、10月５・６日、「伊能忠敬笹山領探索の会」（会長は加賀尾会員）の指導で行われた、丹波篠山市立古市小学校６年生19人による歩測体験実施報告です。

まず、事前に各人の歩幅を計測。子どもたちは「御用旗」と「梵天」を持ち、歩数を数えながら街道を歩きます。その後、教室に帰って、歩幅と歩数を掛け算して距離を割り出し、答え合わせをしました。実距離は５９０ｍでしたが、大きな誤差が出た班もあり、「日本中を歩いて測量した伊能忠敬はすごい人だと思う」と話していました。

第９号新聞には、加賀尾会員による事前学習で歩測方法を学ぶ様子や、伊能測量隊の測線の一部を実際に歩測する様子、体験終了後の感想などが掲載されています。

出前授業「古市小学校」令和2年10月5日・6日 伊能忠敬笹山領探索の会
6年生"身近な伊能忠敬さん"於 古市小学校教室、油井・大歳神社～日出坂峠

1班　宮内綾菜・石橋陽奈・細見周悠・益満美羽・松浦真人

加賀尾さんのお話を聞いて、古市の校区には伊能忠敬の歴史がいっぱいあることを知りました。歩測実習を早くやりたいと思ったし、実習したら、どうやって地図を作ったのか、どれだけ苦労をしていたのかがわかるかな、と思いました。

次の日、歩測実習のやり方を教えてもらって、伊能忠敬は「こういうやり方をしていたんだな」とわかりました。歩測、御用旗、記録をかわりばんこでやって、全部体験できました。

2班　酒井琉果・酒井心佑・酒井優芽・玉山椿

歩測をしている時、だんだん数が大きくなってくると、言いにくくなって、歩くスピードと数えるのが合わなくなる時がありました。私たちが歩測したのは、少しの距離だったのに、とてもつかれました。休憩をとりながらだったとしても、伊能忠敬はとても大変で、手間のかかることをしたのだと、より分かりました。

学校で歩測の結果を計算してみると、初めは結果がとても変でした。でもやり直してみると、結果はまあまあ近くなったので「おかしくなかったんだ！」と安心しました。こんな貴重な体験ができてよかったです。

3班　下田みどり・酒井姫咲・河南琥生・前河明希・前川想太

初めて伊能忠敬の話を聞いた時、地球一周分の距離を歩いたのは、とてもすごいなと思いました。

そして伊能忠敬の歩いた道を測ってみました。記録とか歩くのとか、思ったより楽しかったです。歩測をしながら、昔はこんな感じで考えていたのか、最近は便利なものが増えたな、など、考えました。学校に帰ってから計算をしました。私は計算をまちがえたけれど、伊能忠敬は正確に計算できていたし、体力も頭脳もすごいなあ！と思いました。

4班　檜田こはる・西尾梨沙・秋月和花・酒井雄琉・藤原美央

まず、伊能忠敬の測量の仕方を教えていただきました。地図には今と同じ地名があったり、今と同じようなかけ算を使って考えたりしたことがわかりました。

そして、次の日に歩いて距離を計算しました。自分の歩幅が一回ずつちがいすぎて計算するのが大変でした。歩測の実習は班の子と協力しながらできてよかったです。結果どの区間にもバラつきが出ました。一歩一歩、意識しながら歩いたのですが、やはり難しかったです。

このように考えると、伊能忠敬がつくった日本地図と今の日本地図との差が少ないというのは、本当にすばらしいことだと思います。

「伊能忠敬笹山領探索の会」のこれまでの活動には、これからの地域を担っていく子どもたちへの愛情と期待が感じられます。このような〝タネまき〟が、地域の活性化をうながし、ひいては伊能忠敬研究会を担う次世代の成長にもつながってくれるのではないでしょうか。

小・中学校の教科書に必ず登場する伊能忠敬です。私たち会員は、地域の教師や児童・生徒たちに届くような活動をもっと重視し、お互いの工夫を共有していきませんか。会員の皆さまからのちょっとした活動報告、提案、工夫などの投稿をお待ちしています。

（伊能忠敬研究会事務局）

第二次測量隊が宮古町鍬ヶ崎浦で止宿した「和泉屋民右衛門跡地」の特定

須賀原修二

江戸時代以来、江戸との交易で財を成した豪商和泉屋もいつしか姿を消し、その跡地には現在七滝公園が完成しています。跡地の特定と存在していた時期と経緯について簡単な調査を行いましたので、ご報告いたします。

先ずは、インターネット「宮古on Web」サイト内の「宮古大年表」と「宮古大事典」で「和泉屋」を検索しました。それによると和泉屋は

本姓は豊島で、屋号は豊島屋。１６９１年（元禄４）に大坂和泉から来住。屋敷は現在の七滝湯（鍬ヶ崎仲町３番18号）あたりにあったという。呉服・質屋・酒屋・宿屋・建網・廻船を営み、…１７８１年（天明１）頃から前川善兵衛に代わって閉伊地方の長崎俵物を扱った。蔵が７つあったといわれ、「大漁唄い込み」「大々漁節」に〝お旦那さまは七つの蔵をお建てなさる、扇のごとく末広く、うちわのごとく末円く〟と歌われた。１８６９年（明治２）３月25日の宮古港海戦のさいには官軍の本陣が置かれた。

と記されていました。

和泉屋のその後について詳細不明なのは、明治13年（１８８０）鍬ヶ崎に大火が発生し３２０戸を消失、その後、明治29年（１８９６）三陸大津波の襲来で鍬ヶ崎では流出家屋２７７戸、津波高８．４ｍとあり、火災か津波のどちらかが原因かと思われます。

「屋敷は現在の七滝湯（旧、鍬ヶ崎仲町３番18号）あたりにあった」という情報を手掛かりに、現地で近隣住民に聞き取りをおこないました。その結果、２０１１年３月11日の東日本大震災以前に存在していた「七滝の湯」の跡地は現在の七滝公園北側西隣と特定出来ましたが、そこにいつの時点まで和泉屋が存在していたかは分かりませんでした。

同所に於て江戸時代、天体観測や下役人方々とのお掛け合い、肝入方の出立お見送りなど、我が家の記録にありました出来事を想像すると楽しくなります。

然るに、新たに設置された七滝公園案内には伊能測量隊来訪の記載がなく、そのことが、些か残念でもありました。

2011年4月25日撮影の鍬ケ崎地区
（「漁師の徒然なるブログ」より）

測量隊の案内役を務めた須賀原家（現存）と宿所和泉屋跡地（現、七滝公園）（Google Earthに加筆）

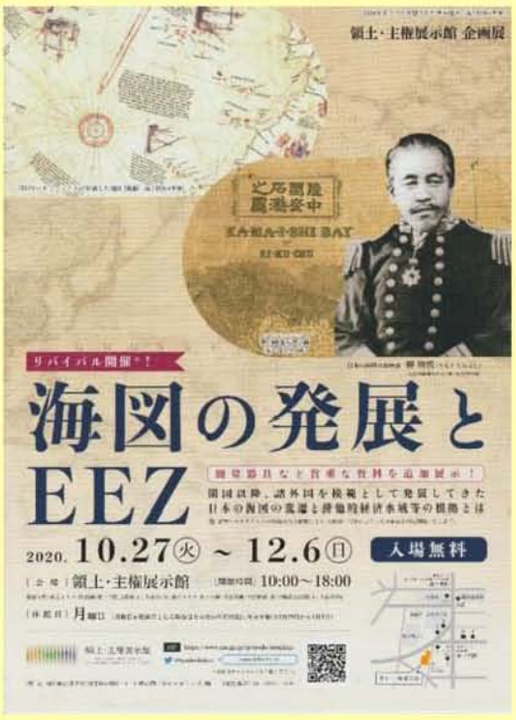
七滝公園入口
（2020年12月29日撮影）

現在の鍬ケ崎3丁目七滝公園（左）付近　（2020年12月29日撮影）

企画展『海図の発展とＥＥＺ』「海の伊能忠敬」柳楢悦と伊能図

前田　幸子

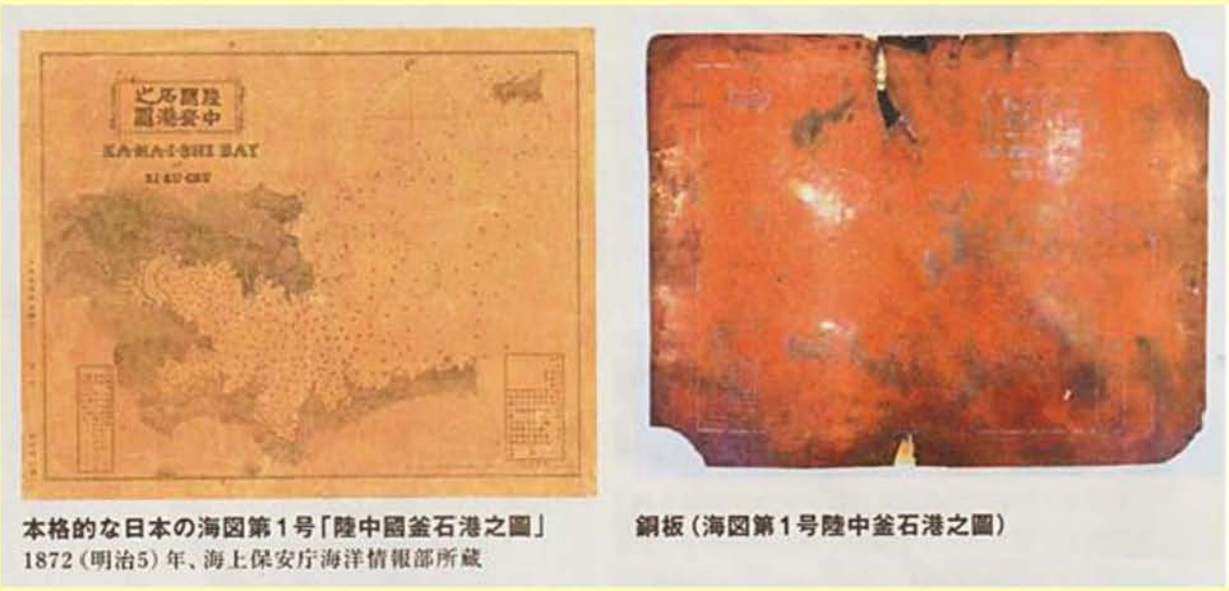
２０２０年１０月２７日から１２月６日まで東京・霞が関「領土・主権展示館」（内閣府）で企画展『海図の発展とＥＥＺ』が開催された。会場には日本初の近代的な海図第１号「陸中國釜石港之圖」（明治５）とともに、伊能大図と伊能忠敬についての資料が展示され、明治期における海図作製への貢献が紹介された。初代水路部長・柳楢悦（やなぎ　ならよし）は外国の力を借りずに自力で海図を作製する必要性を痛感、全国の海図作製に力を尽した。水路部は沿岸測量計画策定のため内務省地理局から伊能図原本を借用して謄写した。のちに伊能図原本は震災で焼失するが、転写した謄写図が現存する。柳楢悦はその多大な功績から「水路測量の父」「海の伊能忠敬」と称されている。



柳　楢悦（やなぎ　ならよし）

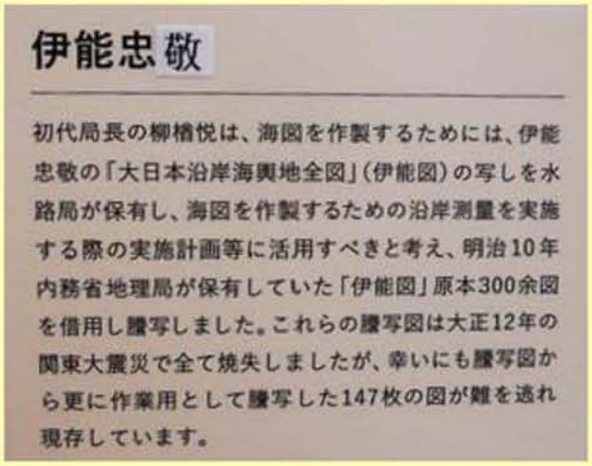
天保３年～明治24年（1832年～1891年）

津藩士、和算家、数学者、測量学者、初代水路局長・水路部長、貴族院議員、大日本水産会名誉会員。近代国家の黎明期、わが国独自の力で港湾等の測量を行うことを第一に、全国の海図作製に率先して心血を注ぐ。その多大な功績から「水路測量の父」、「海の伊能忠敬」と称されている。



本格的な日本の海図第１号「陸中國釜石港之圖」
1872（明治5）年、海上保安庁海洋情報部所蔵

銅板（海図第１号陸中釜石港之圖）



海上保安庁所蔵「伊能大図謄写図」

水路部は沿岸測量計画にあたり、内務部地理局から「伊能図」原本３００余図を借用して謄写した。この謄写図は関東大震災で焼失したが、幸いにもこの謄写図からさらに作業用に転写された１４７枚の謄写図が現存している。しかも、このうちの４枚は伊能大図２１４枚のうち最後まで未発見だった唯一無二の貴重な図。下図は、その４枚のうちの２枚である。この謄写図の２００７年の調査は会報第４８号、第４９号「『伊能大図謄写図』調査概報」（鈴木純子氏）で報告されている。

157号　備中　備後福山

164号　備後　安芸　伊予今治

◇**出典**：本記事の画像はすべて内閣官房領土・主権対策企画調整室「領土・主権展示館」の企画展「海図の発展とＥＥＺ」会場で配布されたチラシおよび掲示されたパネルから引用したものである。

新入会員の自己紹介

須賀原修二

「伊能忠敬研究」第91号「史料紹介三陸宮古磯鶏村〝須賀原家文書〟にみる伊能測量」に取り上げて頂きました岩手県在住の須賀原修二と申します。第二次測量で三陸沿岸の付添案内人を務めた磯鶏（そけい）村（現、宮古市）の肝入茂兵衛の子孫にあたり、盛岡で家畜改良事業に携わった仕事をしております。

研究会のお役に立てるようなスキルはありませんが、岩手県ゆかりの場所や関係資料などに目を向けていただければ幸いです。

今後とも宜しくお願い申し上げます。

伊能忠敬顕彰記念事業　伊能図完成200年記念の集い

① 記念講演会「伊能忠敬測量の日本地図を読む－200年前の日本の姿－」

伊能忠敬（1745-1818）は、50歳を過ぎてから足かけ17年をかけ、日本全国を巡り海岸線や街道などを測量し、史上初めての実測日本地図（伊能図）を完成させ、幕府に提出しました。その中には、国宝や重要文化財に指定されているものもあり、明治期に模写された国もあります。伊能図を通して知られる200年前の日本の姿について解き明かします。

日　時：4月18日（日）13:30～15:00
講　師：星埜由尚（伊能忠敬研究会特別顧問、元国土地理院長）
昭和21年生まれ、74歳、東京大学大学院（地理学）修了後、国土地理院で測量・地図の行政・事業・研究に従事、平成16年国土地理院長退官後、日本測量協会等の役員を歴任。現在、東京地学協会副会長、伊能忠敬研究会特別顧問。
会　場：江東区文化センター ホール　　入場料：無料　全席自由
申込み：3月10日（水）～　江東区文化センター　TEL.03-3644-8111　FAX.03-3646-8369

② 記念展示会－伊能図と測量機器などの展示－

「大日本沿海輿地全図（通称：伊能図）」は、伊能忠敬らによって寛政12（1800）年から足掛け17年にわたる測量により製作された日本全土の地図で、文政4（1821）年に完成しました。
その伊能図（複製）と最新のコンピューター技術で再作成された今和の伊能図及び伊能測量に使われた機器（複製）を展示します。
会　期：4月16日（金）～18日（日）10:00～20:00（解説員の対応は17:00まで）
入場料：無料　　会　場：江東区文化センター 展示ロビー・談話ロビー・展示室

③ 伊能忠敬の測量にチャレンジしよう

伊能忠敬が全国の地図を描くために行った測量では、測量ルートに沿って距離と角度（北からの方位角）を測る方法が用いられました。距離は、最初は歩測（歩幅を物差しにする方法）、後には主に間縄という目盛付きのロープで測り、角度は磁石で測りました。今回は、距離は歩測で測り、角度はオリエンテーリング競技用のシルバコンパスを利用して伊能忠敬の測量を再現します。
日　時：4月16日（金）～18日（日）10:00～17:00
参加費：無料　　会　場：江東区文化センター 中庭（雨天の場合は屋内で開催）
申込み：不要。どなたでも参加できます。当日、会場にお越しください。

④ 地図の折り方教室－地図のミウラ折りに挑戦しよう－

地図のミウラ折りは、人工衛星の太陽電池パネルのたたみ方考案者である東京大学名誉教授の三浦公亮氏が考案されたものです。あっという間に、折りたたまれた地図の対角線部分をもって左右に引っ張れば一瞬にして一面の地図に広がり、見やすくなるのです。ミウラ折りは、便利な地図の折り方で、旅行やハイキングなどで、小さくたたんだ地図が簡単に広げて見られます。
日　時：4月16日（金）～18日（日）10:00～17:00
参加費：無料　　会　場：江東区文化センター 展示ロビー
申込み：不要。どなたでも参加できます。当日、会場にお越しください。

■電車利用の場合
□東京メトロ東西線「東陽町」駅　1番出口より徒歩8分
■バス利用の場合
①東「錦糸町」駅または都営新宿線「住吉」駅より
錦22 系統「東京駅丸の内北口」⇔「錦糸町駅前」
②都営新宿線「東大島」駅より
門21 系統「東大島駅前」⇔「門前仲町」
③東「亀戸」駅または都営新宿線「大島」駅より
亀21 系統「東陽町駅前」⇔「亀戸駅前」
④「亀戸駅前」より
都07 系統「錦糸町駅前」⇔「門前仲町」
※①、②とも「江東区役所前」下車徒歩3分
※③、④とも「東陽町駅前」下車徒歩8分

公益財団法人江東区文化コミュニティ財団が定める「新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」に沿って開催します。来場前に検温、手指の消毒、マスクの着用をお願いいたします。体温37.5度以上の方、体調不良の方は入場をお断りいたします。

伊能図完成200年記念の集い　記念落語会

立川志の輔「伊能忠敬物語－大河への道－」

2021年
4月17日（土）
17:00開演（16:30開場）

江東区文化センターホール

全席指定　一　般　4,000円
友の会　3,600円
江東区民　3,800円
※6歳以上からご入場いただけます

チケット発売
2021年2月10日（水）10:00～
ご予約・お問合せ
江東区文化センター
03-3644-8111（9:00～21:00）
https://www.kcf.or.jp/koto/
ティアラこうとうチケットサービス
03-5624-3333（9:00～21:00）
そのほか、江東区内各文化センター、総合区民センター、深川江戸資料館でも取り扱います

主催：伊能図完成200年記念事業推進協議会
構成団体：日本土地家屋調査士会連合会／公益財団法人日本測量調査技術協会／一般財団法人日本地図センター／公益社団法人日本測量協会／一般社団法人全国測量設計業協会連合会／一般社団法人地図調製技術協会／一般社団法人日本ウォーキング協会／伊能忠敬研究会
共催：富岡乃鶴庵／今和の伊能大図をつくる会／公益財団法人江東区文化コミュニティ財団
後援：国土地理院

※公益財団法人江東区文化コミュニティ財団が定める「新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」に沿って公演します。
客席は定員の半数以下に制限し、1席ずつ空けた配席とします。ただし、入場者数を増やすことが可能と判断した場合には1席ずつ空けた席を販売することがあります。あらかじめご了承ください。

江東区文化プログラム

事務局だより

■伊能忠敬顕彰記念事業

伊能図完成２００年記念の集い

２０２１年４月16日～18日、江東区文化センターにて立川志の輔による記念落語会、星埜由尚特別顧問による講演会、その他伊能図や伊能測量に関する機器の展示、測量体験等が行われます。

※落語会のチケットは完売しました。

主催　伊能図完成２００年事業推進協議会

伊能図完成２００年記念講演会

２０２１年７月10日、千代田区立日比谷図書文化館において、星埜由尚・鈴木純子特別顧問による講演会を予定しています。

主催　伊能忠敬研究会

■定期総会のお知らせ

２０２１年度総会については、現下の緊急事態宣言解除後の状況により、開催方法を検討のうえ、改めてお知らせします。

■会費納入のお願い

２０２１年度会費の納入をお願いします。

■訂正

第92号　25ページ中段6行目

誤　「松尾卓次氏（元会員）」

正　「松尾卓次会員」

『伊能忠敬研究』投稿要領

①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

＊刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字（704字×三段または480字×四段）です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

②原稿のかたち

・**本文（テキスト）**　原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・**写真**　一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

＊印刷サイズが100mm×75mmで350ppiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラやスマートフォンによって5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありません。

デジタルカメラのデータ仕様がわからない場合は、L判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・**図**　写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキャナで撮った電子ファイル（JPEG形式またはTIFF形式）にしてください。

③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷上り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくは**ホームページ**　http://www.inoh-ken.org/　を参照）

送り先

・**電子メール添付の場合**　kaiho@inoh-ken.org

・**郵送の場合**　〒153-0042　東京都目黒区青葉台4-9-6日本地図センター2階
伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。

・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取っておいてください。

・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。

・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。

・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。

次号（第94号）は2021年6月発行　原稿〆切は4月30日の予定です。
皆様からの投稿をお待ちしています！

伊能忠敬研究会 入会の御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

①会報の発行　研究成果・会員活動情報など　原則として年三回発行

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等

入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、伊能忠敬研究会事務局所在地

〒153-0042　東京都目黒区青葉台4-9-6　日本地図センター2F

電話・FAX　03-3466-9752

（留守の場合は録音テープに吹込んでください。）

事務局メール　mail@inoh-ken.org

郵便振替口座　〇〇一五〇-六-〇七二八六一〇

ホームページ　http://www.inoh-ken.org/

編集後記　◇2021年がスタートして二か月が過ぎた。◇年明け早々に新型コロナウィルスの感染拡大による医療機関の崩壊が懸念され、緊急事態宣言が発出された。◇今年は、伊能図が幕府に上呈されて200年の節目に当たる。◇緊急事態宣言で外出自粛が呼びかけられる中、伊能図完成200年記念行事の準備が進んでいる。◇実施にあたっては、参加人数の制限や感染対策が求められ、主催者は頭を悩ませている。研究会も幕府上呈の日（七月十日）に合わせて「江戸城」近くの会場で記念講演会を予定している。◇昨年東京で開催予定だったオリンピック・パラリンピックも一年延期され、今年の夏に開催されることになっているが、開催できるか不安視する声も少なくない。◇伊能忠敬の測量開始200年を機に発足した研究会は四半世紀が過ぎ、研究会を牽引してきた渡辺一郎さんも他界されてしまったが、伊能図の完成記念を祝す行事は何とか実施したいと願っている。（H）

「伊能忠敬研究」第93号© 2021年2月28日発行　編集　髙安克己　発行　菱山剛秀
〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6　日本地図センター2F　伊能忠敬研究会　TEL&FAX 03-3465-9752